瀬流彦°

ガビアル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ベルセルクのセルピコが瀬流彦へ生まれ変わります。もう一人もまた。

目次

一話 1
二話 27
三話 58
四話 104
五話 139
六話 176
七話 203

一話

聖都に雪が降る。
神の坐します都、思い出の中では常に白い雪の中に埋もれていた。
神のために。ただ神のために。
思えば自らの命もあの時神に召し上げられようとしていたところだったのかもしれない。
寸前で救われた。
当時の自分にとって呪いの言葉でしかなかった「貴族」のご令嬢。
まさか雪に埋もれた浮浪児、自らが足蹴にしたソレが自分の異母兄だったとは思いもよらなかった事だろう。もっとも、そんな事は自分もまた後から知った事だったが。
あの小さな暴君、その無茶ぶりもまた懐かしく思う。

「……先生、瀬流彦（せるひこ）先生、急にぼうっとしてどうかしたですか」
「ああ、ちょっと睡眠不足が祟っただけです。新田先生には内緒にしておきますから早いところ運ぶとしましょう。綾瀬さんはバッグなど持ち物をお願いします」

「はいです」

瀬流彦は束の間の現実逃避を諦め、酒の臭いのする生徒達を抱えてバスに運び込むのだった。誰もこんな稚拙な……いや意表をついた手段でもって攪乱してくるとは思わないだろう。その一点についてはとても見事だったのかもしれない。これもまた不可抗力……だろうか。とはいえ、こんな事でせっかくの修学旅行が中止されてしまうのはさすがに可哀想だった。

新田先生は先の方で源先生と一緒にいるはず。しかし、修学旅行初日にしてこの騒ぎ……しかもその前のカエル騒動といい予想外の悪戯とも言える妨害工作、頭痛を感じざるを得ないものだった。

「前途多難ですねえ……」

くしゃりと自分の茶色の髪をかき混ぜ、瀬流彦はため息を吐いた。

かつての自分が今の自分を見たら信じられない気持ちになるだろう。まさか自分が教師などという人を導くような事をしているとは思いもよらなかったに違いない。

そして今は……笑えるのだ。作り笑いではなく。あの雪に埋もれた聖都がひどく遠いものに思える。

自分が変わった理由は何だったのだろうか。色々思いつく。

存外、麻帆良の空気に当てられた、そんな単純な事かもしれなかった。

◇

１９９５年春。

例年より少し早く開花した桜の下を瀬流彦は歩いていた。

まだ早朝と言って良い時間であり、すれ違う人も朝早くの散歩か、ジョギングをしている人、あるいは部活の朝練だろうか、ジャージ姿の中学生達が掛け声をあげながら集団で走っていく。

『ピコリン、ピコリンちんたら歩いてないで早く行こうよ、ハリーハリー！』

そんな声が頭の中に直接届いた。瀬流彦は数年前に助けたこの喧しい妖精を胸ポケットからつまみ上げる。

「プーカ、あなたはフェアリーでしょう？」

『そーだけどー？』

使い魔契約なんてものを交わしている、念話も可能だが、今は周囲に誰も居ないので普通に語りかけていた。つまみあげているといっても、瀬流彦が主だからこそ見えるというだけで、一般人にはまず見えない存在だった。今の自分はさぞかし電波を受信してしまった怪しい人間に見られるのだろうな、とふと思う。

「妖精なら自然霊の一種なわけですし、こうした綺麗な花の咲き誇る中で何か感じ入るとかそういう心はないんですか？」

『あるよ、ある！　ふわふわしてわくわくして、皆咲いてるから私も咲く！　って感じ。だからほらピコリン、動こう！　動こう！』

蝶のようにも見える羽根をぱたぱたと忙しなく動かし、プーカは空中でステップを踏んだ。人間ではありえない色、白い小さな肢体が跳ねる。若草色の長い髪とドレスがふわふわ舞った。

満開の桜の中だからこその陽気に影響されているらしい。

春ってやつですねえ……などと思いながら、静かにこの桜の美しさを楽しむのは無理だと諦めた。人が来る気配を感じ、そろそろ危ないかとプーカを制服の内側のポケットに招き入れる。一般人以外にも感じ取られにくい妖精ではあるが、念のためだ。

麻帆良国際大付属高等学校。瀬流彦はつい先日から通い始めたばかりの一年生である。

実家、熊野の田舎から出てきた時は、駅から降りた際の麻帆良学園、その異様な広さにとてつもなく、そう言葉を無くして驚いたものだった。

都会は凄い。その一言である。

様々な人が集まるという所を見ればきっとこれほど多種多様な人間が一カ所に集中した場所もないのでは、と思ってしまう。

母の薦めるがままに来た学校だったが……きっとここなら進みたいどんな道にも進

む事ができるだろう。

父と母がそうであったように「魔法使い」なんて道でさえも。

ざあ、と吹いた風が桜の花びらを舞わせ、瀬流彦の髪を揺らした。

◇

人と付き合うのは苦手だった。

今に始まった事ではない。

今生が始まる前、あの雪の都では少ない食べ物を巡って始終子供達は争っていた。最後には徒党を組んだ方が勝つ。そんな大原則を教えられたのもその時期である。ただ、自分はその徒党に入って行く事はできなかった。母の「貴族」であれという言葉に縛られていたから。

ヴァンディミオン家に仕えるようになってからもそれは変わらない。他人は自分を「如才ない」と言ってくれるが、礼儀の付き合い以上に人と言葉を交わした事が果たしてあっただろうか。自らの弱い部分をさらけ出し、背中を支え合うような関係の人が居ただろうか。

孤独だった。それは物心ついた時からそうであり、だからこそ同じ臭いをかぎ取ったのかもしれない。あのお嬢様は。

そしてそれを今になっても引きずっている自分には呆れる他ない。

瀬流彦はクラスではいつしか空気のような存在となっている。
小学校からそうだった。周囲に違和感なく溶け込んでしまえるが、根本的に同級生とはズレている。
あんな血生臭い記憶があるのでは当たり前かもしれないが、言い訳にもならない。
（まったく、母さんにも申し訳が立たないですねこれは）
授業を真面目に受けている風を装いながら小さく嘆息した。息子になかなか友達ができない事を心配していたのだ。
瀬流彦は今の母にはとても複雑な思いがある。かつての……自分が生まれ直す前の母にあんな末路を辿らせてしまった自分、その罪悪感は未だに残り燻っている。今の自分の母親は幸せになって貰いたかった。
今生の母とて、その人生は穏やかなものとは言えない。
高校を出て町で働いている時、悪い魔法使いとやらに攫われてしまったらしい。魔法世界というところに連れていかれ、そこで連合に所属していた父に助けられそのまま結婚したのだとか。
その父も先の大戦で亡くなり、物心つかない子供を抱いて故郷たる熊野の山村に帰ったのだ。幸い遺族に対する補償もあったため、お金には困らなかったが、若くしてどこかにふらりと行方をくらませ、帰ったら子供連れで夫は死没。そんな女性に田舎の閉鎖

的なコミュニティはあまり良い目を向けてくれない。幼い瀬流彦もそれは常々感じ取っていた。

夜、子供に聞こえないよう、声を殺して泣く母を目にした事も一度や二度ではない。思えば魔法を教えてなんて願うようになったのも、母の寂しさをちょっとでも慰めようと子供ながらに考えた事ではなかっただろうか。

「私もあの人からすればあまり出来の良い生徒ではなかったのだけど……」

そうはにかみながらも母は父に教わったという魔法についての知識を瀬流彦に教えた。今や遺品とも言える魔法の基礎についての教本があったのもまた幸いだったのだろう。

瀬流彦は物覚えの良い生徒ではあったが、魔法使いとして見ればそれは必ずしも出来が良いとは言えないものだった。ひどく偏っているのだ。

基本の基本、杖の先に火を灯す事さえ半年を要したと言うのに、風を起こす事はただの一度の失敗もなかった。

数年が経ち、もう基礎の教本では覚える事も無くなってしまった頃だった。

記憶が混乱した。

その時期の、瀬流彦の主観からした時間の経過はとても言い表せない。

引き延ばされたかと思えば凝縮する。雪の中で埋もれている自分を思い出したかと

思えば、杖を振って頑張って炎を出そうとしている自分と重なったり、今の自分の手より遙かに大きい手で剣を研ぎ、油を塗り……我に返り自分の小さな手を見て違和感を覚える。そんな事が数年続いた。

ある日突然記憶が蘇った、そういうものならばまだ良かったかもしれない。どこからどこまでがかつての自分の記憶かはっきり判るのだから。

段々、段々とすり込まれるような記憶、毎日毎日少しづつ自分が自分でない人間になっていく感覚。

頭の中で整理がついてしまえば、結局瀬流彦は瀬流彦でしかない。かつての自分に飲まれるような事はなかったわけだが……いや、かつての自分と思えるようになった事こそがもしかしたら一番大きな変化だったのかもしれない。

一見、ちょっと前に流行ったらしいミサンガのようにも見える、手首に巻いた組み紐を撫でる。

母が時間をかけて作ったもので、魔力を抑え、魔法を使えないようにする効果がある魔法具だった。

瀬流彦がこの学校に来る際にもらったものだ。

「これで魔法は使えなくなるけど、魔法使いにも感知されにくくなるからね。彼等を十分に見て知った上で関わりを持ちたくないなら、卒業するまでつけたままでいること。

いいわね？　あの世界に関わろうと、どんな道を選ぼうと母さんは文句言わないから、自分の好きな事をやりなさい」

そう言って送り出してくれた母は少々子供に甘すぎるかもしれない。ただ、瀬流彦からすれば……かつての自分からすれば、罪の意識を覚えてしまうくらい良い母親だった。

この学校、麻帆良学園の裏の事情もまた教えてくれた。そちらの世界に関係のある人は当然知っているような知識程度とは自分でも言っていたのだが。

かつては自らも攫われた事があるという経験からきているのかもしれない。魔法関係に関与するなら慎重に……との事だった。

幸い、使い魔契約を交わしているフェアリーのプーカは風妖精だけに隠れようとすれば非常に隠密性が高く、滅多に気付かれるものではない。また本来ならこういう半分が魔力の塊のような存在にとって、主人からの魔力供給が限りなく細くなった状態はよろしくないはずなのだが、この地では居るだけで大気から魔力を得られるようで、その点でも一つほっとしていた。

瀬流彦の方から首を突っ込んだりするのでなければ、そうそう接点も生まれる事もなく――

一般生徒として学問に精を出すこと一年が過ぎた。

都会での生活にも慣れ、パソコンなども扱うようになり、せっかくだからかつての世界には無かったこの便利な機器たち、その専門の方にでも向かうべきかと朧げに考え始めた頃の事だった。プーカが夜の散歩中、ひどく慌てた念話をよこしてきたのは。

◇

かつて、闇の福音とも不死の魔法使いとも、禍音の使徒とも童姿の闇の魔王とも、胃もたれしそうな程重厚な名前で呼ばれていた吸血鬼が居た。

あらゆる障害を退け、６００年を生き、魔法世界の者にとっては夜更かしする子供を寝かしつける脅し文句としては一番ポピュラーな存在、それほどに広く知れ渡り、恐怖されている。

そんな恐怖の代名詞たる彼女は不思議な虚脱状態にあった。

ナギ・スプリングフィールドという恒星。その焼け付くような眩しい光に誘われこの地まで来た。

６００年の時を経てもあれほどの眩しい存在には出会った事が無かった。

だからこそ……だからこそ、酷く裏切られた気持ちになった。

口で言う程彼女は登校地獄なんてふざけた魔法により縛られている事を負担に思っているわけではない。今まで過ごした時を思えばわずか数年。須臾の間と言っても良いだろう。

確かに学校生活は楽しめた。人としてのわずかな3年。順当に高校にでも進み、興味のある分野が見つかれば……そう例えばこのところ日進月歩を遂げている医学など面白そうかもしれない、自らが不死なだけに。大学にでも進み、彼の言った通り光に生きる道もあるいはあったのかもしれない。

だが、登校地獄なんてふざけた魔法。何より、魔法が壊れているのか卒業が出来ず、その呪いにより同級生からは忘れ去られた時、愕然とした。一年、また一年と一向にナギが現れない事に不満は募り、苛立ちは増す。

この地に来て、五年も経った頃だろか。

ナギ・スプリングフィールドが死んだ。そんな噂が流れた。学園長に聞きに行けば、何やら隠し事もありそうだったが、迂遠な言い方でナギの死亡を告げられた。

そんな可能性も考えなかったわけではない。人の死など嫌というほど見てきた。どんな英雄だって死は避けられない。

自分を置いて先に逝ってしまう、そんな事になったらどれほど自分は荒れ狂うだろうかと思った事もある。

不思議と何も感じなかった。

ただ、虚無感は一層深くなり、夜空の星を見上げ、小さく息を吐いた。またかと思った。

その夜流した一筋の涙。それが彼女の憧れた光、それへの鎮魂の儀式だった。

それからさらに3年が経っていた。

投稿地獄なんてふざけた呪いを解こうとする気力もなく、この地の魔法先生や生徒には恐れ、疎まれながらも惰性で警備の仕事などは受け持っていた。

最初の同級生達は卒業と共に、この壊れた呪いにより自分の事をすっかり忘れてしまっている。思い出す様子はないようだ。彼等の卒業後の活躍、例えば手芸で賞をとっただの、進学した先の学校の部活動でオリンピックの強化選手に選ばれただの、ティーンズ向けの小説を書き、学生ながらデビューを飾った事だの……そんな事をふと目にする度にかすかに唇が綻ぶ。

今を生きる者達が輝くのはやはり美しい。そう思ってしまうのは死者の在り方なのだろう。そうふと考えついてしまい、妙なおかしみも湧く。

そう……忘れていた。彼等と共に過ごすうちに忘れてしまっていた。自分は極めつけの死者であった。

孤独だった。多数の人の暮らす地の中、騒がしい級友に囲まれ、他愛もない事を毎日聞きながらなお、エヴァンジェリンは孤独だった。

存在するのがいささか面倒になってきていたのかもしれない。

連絡を受け、指定の場所に着き、誰かが召還した在来の鬼どもを駆逐していた時の事

だった。

「ガハ……ガハハ、掴まえたぞ西洋の小さな鬼よ、その細い腕を、細い足をちぎりとり、喰ろうてくれようか」

迂闊だったのだろう。本来ならばまず有り得ないミス。

倒し損ねた大鬼に足を掴まれ、振り回され、森の中の木に叩きつけられた。腐っても鬼の力だ。巨木と言ってもいい木がめきめきと音を立てへし折れた。この木も数百年生きたのだろうに、くだらぬ戦いに巻き込まれて難儀な事だ。エヴァンジェリンの頭をふとそんな場違いな思いがよぎる。

どうという事もない。封印され弱っている今でもこんな単純力バカを何とかするだけならやり方なぞ幾らでもある。ただ……

「……億劫だな」

気力が湧かなかった。立ち上がるのも面倒になっていた。このままばらばらにされ、噛み千切られ、鬼の胃袋にでも入ってしまえばあるいは死んだものと見なされて呪いが解けるんじゃないか？　ふと、そんな馬鹿馬鹿しい思考も浮かんでくる。

「血吸いの鬼は確か串刺しが習わしだったかのう」

大鬼が折れた枝、子供の腕ほどもあるそれを持ち上げ、仰向けに倒れたままのエヴァンジェリンに狙いを付ける。勢いを付けるように大きく振りかぶった。

――風が吹いた。

物理的な風ではない。精霊魔法による、魔法的な概念が通り抜けた後、風が巻き起こる……そんな独特な現象。

杭のような枝を振りかぶった鬼の腕がその勢いのまま後ろに放物線を描いて落ちた。

信じられぬ様子で鬼は首を回し、落ちた腕を見ようとし、首がずれた。

「が……が……ぷぼ」

声にならぬ声を出し、鬼の首が落ち、体がゆっくり傾いで、後ろに倒れ込む。

どうやらエヴァンジェリンは助かったようだった。それもどうでも良かったのだが。一連の戦闘に驚いてか虫なども鳴き止んでいる。その妙に静謐な空間に小さくため息を吐いた。

仰向けでぼうとしているエヴァンジェリンの様子を確かめにか、人が小走りに近寄ってくる気配がした。この疎まれている我が身を助けるとはとんだ物好きも居たものだ。タカミチなら判らないでもないが、奴は今海外に行っているはず。そう思い少しの好奇心から、その人影を見ようと首を回す。

糸目の少年だった。あまり目が細くて眠っているようにも見えてしまう。どこか日本人離れした容姿の中肉中背の少年。感じる魔力は並より上だがそれほどでもない。多分事情を知らない新参の魔法生徒なのだろう。

そう判断したエヴァンジェリンは次の瞬間にはその少年への興味を失っていた。だが……

「け、怪我はありませんか？」

どこか慌てた様子……まるで親しいものが傷つけられたかのような慌てた口調でそう聞いてきた。

しかし、この身が怪我だと？

「くく……」

思わず笑ってしまい、少年を憮然とさせてしまう。

「格好良い登場でもしたかったのか坊や」

少年もそんな台詞を投げかけられるとは思っていなかったのだろう。憮然とした顔が唖然となった。

気を取り直すように、魔法の発動体なのだろう。飾り気の無い黒壇の短杖でとんとんと肩を叩く。

「……いえ、そのですね。麻帆良は魔法使いが大勢居るはずなのに何で応援が駆けつけないのかな……と。気を揉みながら隠れて見ていたのですが」

ふむ、とエヴァンジェリンは口の中で呟く。あまり魔法使いの顔を覚えているわけではないが、こんな特徴的な新参魔法生徒は居ただろうか？　いや、つまりはモグリ。麻

帆良に通いながらも魔法使いであることは隠していたのだろう。苦笑が一つ湧いて出た。

「ならば残念だったな、私を助けなければ見つからなかったものを」

複数の魔力持ちの人間が近づく感じがする。今になって麻帆良の魔法使い達が駆けつける様だった。この少年の魔力反応でも感知したのだろう。

少年は妙に疲れたため息を吐くと、誰に言っているのか一言、困ったものですと呟いた。

◇

麻帆良学園本校女子中等部校舎、麻帆良学園の最奥にある建物の中を瀬流彦は歩いていた。

周りは明らかに魔法使いらしい教師や生徒で囲まれている。最初に杖を預けてしまったのが良かったのだろう、極端に酷い扱いは受けず、拘束もされていない。

瀬流彦からすれば夕飯でも食べに行こうと思っていたら、プーカが突然慌てて知らせてきたのである。でかくて強くて凄いやつらと、少女が戦ってるなどと。これまでも、麻帆良の侵入者を排除している魔法使いの事は2、3度見かけた事がある。多分それだと思うがどうも聞いてみる限り1人で対応しているものらしい。

「単騎ですか……」

何となく思い出してしまう。あの黒い剣士、鉄塊としか言い様のない大剣でもって1人化け物達を蹴散らす姿。

場所は大体判る、男子寮から少し外れた郊外、森の中のようだった。

父の形見の杖。黒壇のシンプルなものだが、それを持って駆けつけ、様子を伺った、小柄な影が鬼と戦っている。

魔法使いのようだが、木に叩きつけられ、ダメージを負っているのか動かない。

まさか、と思った。この学園はかなり魔法使いの数が多い。確認できただけでも相当数になる。1人では動いていないはず。きっとあれは油断させるための囮ではないか、そんな事も一瞬頭に浮かんだ。

だが、鬼が折れた枝、枝と言ってもそれは杭のように太く、折れ口は鋭く、いかにも武器になりそうだ。それを持ち上げ……

瀬流彦は目を剥いた。考える前に動いていた。

魔力を抑えている紐を引きちぎり、杖に魔力を通す。精霊に働きかけるには一言で良かった。

「風よ（ウェンテ）」

――言い訳をするなら……あの姿。ハニーブロンドの軽いウェーブの入った髪。小柄な身体。いかにも貴族然とした昂然とした顔。

かつて従者として付き従ったファルネーゼ様の幼少の頃が被ってしまったのは否定できなかった。
当然ながら、まったく違う感じの人ではあったのだが。
衝動で動いてしまうなどとは……まったく自分にも困ったものだった。
「さて、麻帆良国際大付属高等学校2年B組、早川瀬流彦君。夜分まで引き留めてすまんが、少々聞かせてもらってもらいたいのじゃが、良いかのう？」
ぬらりひょんなどとあだ名もつけられたりしている麻帆良の名物学園長に聞かれ、瀬流彦は返事の代わりに頷いた。気の抜けるような念話を丁度交わしていたのだ。
『プーカ、あまり遠くまで出歩いちゃ駄目ですよ』
『はいはいーっと、ぬらりひょんが本当にぬらりひょんだったのか後で教えてね』
妖精にとってこの建物はちょっと近づきにくいらしい。もしかしたら結界か何か、守りのために敷いているのかもしれなかった。
「ふむ、では聞かせて貰いたいのじゃが、君が魔法使いである事は判ったが、何故隠しておったのかの？」
「はあ、いえ。これと言った理由でもないのですが、田舎出なもので十分に状況を見てから、とは思っておりました」
瀬流彦はとぼけた様子で鼻を掻いた。

「確かに魔法関係に触れる縁があるような出身地でもないのう、魔法の事についてはご両……いや、お母君から教わったのもので良いのかの？　お父君は亡くなられておるようじゃの、こちらも魔法関係者であるなら、詳細を教えてもらいたいのじゃが」
「ええと、はい。そうです魔法は母に教わりました。父については物心ついてない時に居なくなってしまったので、母から聞いた事になりますが。ウィル・フェネグリークといって連合所属の魔法使いであったそうです。先の大戦で亡くなったらしく、父の係累も居なかったとかで、母は幼い僕を連れて故郷に戻ったという事のようですね」
　学園長は少し驚いたように目を開いた。
「ほ、随分素直に喋ってくれるの、隠しておったのじゃからもう少し警戒されておるものだと思っておったよ」
「いえ、ですからこれと言った理由でもないんです。自分の先行き、魔法に関係したものを含めて考えたほうが良いのかどうか迷っていただけなので。あ、それと寮の僕の部屋の机、上から2番目の引き出しに母に持たされた麻帆良への紹介状が入ってます。封印は解いてないので、身の証となると思います」
　学園長が目配せすると魔法先生らしき黒人の男性が頷き、その場を後にした。確認のためだろう。
　だが、ここまでの会話でそう怪しい部分はないし、瀬流彦もまた不自然な緊張などは

していない。連合所属の父というところで一瞬メガロメセンブリアの手の者かという思考が学園長の脳裏をよぎったが、それこそバカ正直に話したりはしないだろう。

「……ふん、迷っていたなら徹底して迷うべきだったな。何も知らぬまま巻き込まれたのと違い、お前は目を塞ぎ耳を塞ぐ事ができたのだ。放っておけば良かったものを」

エヴァンジェリンが窓の外を見ながらそう言った。

鬼に倒されかけ、助けられたものの言葉ではない。それに何よりそれは偉大な魔法使い（マギステル・マギ）を目指す魔法先生、生徒の理想とはかけ離れていた。必然目が厳しくなり、学園長室の空気が少し緊張する。

そんな空気の意味が判らず、瀬流彦は不思議そうに首をひねり言った。

「目の前で女の子が殺されかけて、何とかできそうな手段があったら普通動くでしょう」

部屋の空気が固まった。それこそびしりと音が鳴ったかのように。

かろうじて動いた魔法先生の1人が「闇の福音だぞそいつは……」と親切にも瀬流彦に言う。

「闇の福音……」

噛みしめるように瀬流彦は呟き、少し眉を顰めうつむいた。

その姿をちらりと目の端で捉え、エヴァンジェリンはそれ見た事かと皮肉気に笑う。

「すいません、どうやら知識が無いようで……闇の福音って何でしょう」

瀬流彦は頭を掻き言った。部屋の緊張した空気が雲散霧消する。力が抜け、エヴァンジェリンは皮肉気な笑いのまま窓に額をぶつけた。魔法先生の誰かが、肩をすくめてやれやれだなあとぼやいていた。

身元の証明をし、魔法の能力的な軽い検査を終え、瀬流彦は魔法生徒として登録される事になった。

麻帆良の魔法関係の組織図、規約書、連絡網などの書類を貰い退室する。

どうやら瀬流彦が思っていた以上にここの組織は「優しい」らしい。規約を読めば判るが、魔法の使用に際しては厳重な注意事項があるものの、所属している魔法使いが麻帆良のために働くという義務は課せられていないようで、あくまで力を持った存在を管理しておくという側面が強いもののようだった。もちろんそれは平時の話なのだろうが。

先の襲撃のような際には普段から警備も兼任している魔法先生、魔法生徒がそれに当たるようで、戦力としては大概の事はそれで十分らしい。場合によっては戦闘向きの魔法使いに臨時警備を依頼する、という事もあるようだ。その場合には臨時報酬がでるようで、計算式もまた細かく載っている。

ふむふむと読みながら校舎を出る。一緒にもらった紙袋にしまい、時計を見ればさすがに遅い時間だった。満点の星空が晴れ渡っている事を感じさせる。月が柔らかい光

を落としていた。
まだ終電が行ってしまう時間ではないものの、何となく足早に駅に向かって歩き出した。普段来慣れない女子中の校舎という事もある。少々の恥ずかしさというものもまた感じているのだった。
その瀬流彦の後ろをエヴァンジェリンもまた何となく歩いていた。
少しの興味が湧いている。ああは言ったものの、この少年が自分に駆け寄った時の慌てた様子は何だったのか。そう、目の前で危ないから助けたというのも嘘ではないだろう。だが、全てを話しているわけでもない。その謎解きもまた暇つぶし程度にはなるだろうか。
それに、助けられた形にはなったがあれを貸しと思われるのも少々業腹でもある。
ふむ、と少し考えた。
歩く。
歩く。
……判断力もどうやら落ちているようだった。それもどうこうする気になれず、まあ、どうでもよい事かと瀬流彦に声をかけ、止まらせた。
「借りを作るのも貸しだと思われるのも性に合わん。何か望みがあるなら言え」
瀬流彦は悩んだ。ぶしつけに呼び止められ、いきなりその台詞である。闇の福音につ

いて学園長から話は聞いていた。６００年ものの生きる伝説、闇の福音、ダークエヴァンジェルとも、不死の魔法使いと書いてマガ・ノスフェラトゥとも人形使いと書いてドール・マスターとも呼ばれる存在。名前の仰々しさに負けないくらいに数々の伝説、悪行を残し６００万ドルの賞金首、最強と言っても良い魔法使い。ただ、今は封印されているらしく、そう威圧感も感じられない。実際には凄まじい力量でもあるのだろう。

そんな存在からすれば瀬流彦のようなぽっと出の若輩魔法使いに助けられたというのもまた面白くないのかもしれない。いや、助けたというのもまたおこがましいか、鬼にやられそうだった状況も狙ったものだった可能性がある。

（そして望みは？　と来ましたか……）

特にないというのもこの場合、力量を疑っている事になって失礼になってしまうのだろうか？

瀬流彦が悩んでいると、エヴァンジェリンはかすかに身震いした。

「おい、忘れていたが……若い男の異常性欲を私で満たそうというのはさすがに無しだ」

がくりと肩の力が抜ける。

「それは有り得ないです……」

「むう……それはそれで失礼な話だな」

緊張感がどこかに行ってしまうと、それこそ健康な若い男の胃袋がぐうと音を立て

た。
　そういえば、夕食を食べに行こうとしていたのだった、と瀬流彦は腹をさする。ぴんと一つ思いついた。
「じゃあ夕食を」
「ふむ……？　構わんがそんなもので良いのか？」
「作りますので是非食べてってください」
　こけた。
　精々坊やの食べた事のない高級店に連れて行き肝を冷やさせてやろう、などと考え歩きだそうとした拍子だったのだ。
「普通逆だろう、何を考えているんだお前は」
「……ここ1年ほど料理していなかったもので腕が落ちてないか心配なんです」
　元々瀬流彦は料理が嫌いではない。ただそれはどちらかというと趣味に近いものがある。人に出す料理なら作りもするが、自分1人の賄いであるなら割とどうでも良く、外食で済ませてしまっていたのだった。
「あ……」
「今度は何だ」
「いえ、寮の設備が微妙だったのを思い出しまして」

そう、寮そのものが昔作られたものだというのもあるが、男子寮では自炊する事を考えられていない。湯沸かしが精々の電気コンロと流し台ぐらいでしかないのだ。

さて、どうしようかとゆっくり歩きながら顎に手を当て悩んでいると、エヴァンジェリンが大きくため息を吐いた。

「……もういい、うちに来い。一軒家だから設備はある。しばらく自炊などしていなかったから材料などは無いが。道すがら買って行け。支払いは持つ、プライドが許さん」

そう言い、駅とは別の方向に歩き出した。

後ろから付いてくる飄々とした少年の事を考え、エヴァンジェリンは思う。それにしても変わった奴だ、と。自分にいつの間にかついて回った悪行、風評、賞金の事など聞いてもまるで態度が変わらない。よほどの馬鹿か、あるいは肝でも据わっているのか……そんな大悪人の住み処に招かれたというのに躊躇もしない。

（あるいはとてつもない場数、それも修羅場でもくぐり抜けてきたか？）

後ろから小さく響く明らかに訓練したものらしい一定の足音。突拍子もない妄想が浮かんだのはそんなものが気に留まってしまったからだろう。

学園長は食わせものだ。あの学園長室、嘘や偽りをつけない「場」が形成されている。無論知っている者ならばレジストもできようが……つまり、あの少年に学園長が確認し

た経歴にも嘘は無いのだろう。正真正銘16歳のひよっこのはずだ。武道でも囓っているだけだろう。

「くく……私もやきが回ったものだ」

小さな声で自嘲した。

春の夜道を小さな吸血鬼に導かれながら、瀬流彦はそんな小さな声も聞いていた。何かは判らないがこういう時に「何か?」などと声を掛けるほど無謀ではない。

2人は無言で歩いた。

にんにくが苦手なのを言い忘れたエヴァンジェリンが悶絶する事になる2時間ほど前の事である。

それが瀬流彦とエヴァンジェリン2人の小さく奇妙な友誼の始まりだった。

二話

その日、瀬流彦は迷っていた。

『ピコリン、あたしはこのモンブラン一択！　栗！　栗！』

『プーカ、君が栗の事を言うと、どうも散々つつかれた嫌な思い出を思い出しそうになるからやめてください。それに今日のはお見舞い用です』

『買ってくれないと……刺す！　刺すッ！　刺ーすッ！』

瀬流彦と使い魔契約を結んでいるはずの、どうも言う事を聞かない妖精はどこからか調達した枝で瀬流彦の頭を突き始めた。

それ自体は別に痛くもなく、チクチクとした刺激がするだけなのだが。

やれやれとため息を一つ落とした。

「じゃあ、モンブランとミルクプリン、フルーツタルトとこっちの苺のミルフィーユをお願いします」

どうせ買うなら多めに買っていってもいいだろう。元気な様子なら一緒に食べるというのもまた良し。お財布の中身を考えればあまり散財するものではないのだが……そろそろアルバイトでも考えた方が良いのだろうか、などと考えながら支払い、ケーキ

の箱を受け取る。先程とは一転して上機嫌になった妖精が今度は頭の上で踊り出す。以前はさすがに、ここまで大っぴらに表に出すことはできなかったのだが……先日ここ、麻帆良の魔法生徒として登録する時に使い魔の事は話してある。もとより霊体に近く、一般生徒の目に留まる存在ではなし。プーカも外に出られて嬉しかったのだろう、今日一日ずっとテンションが高いままだった。

いつもは降りないはずの駅で下車し、昨晩案内された道を思い出しながら歩く。

小さな暴君じみた吸血鬼、エヴァンジェリン。寝込んでしまった彼女への見舞いに行くところなのだった。

昨晩、ちょっとした思いつきで瀬流彦が振る舞った料理に入っていたにんにくが問題だったらしい。考えてみれば確かに吸血鬼に対してにんにくは大敵だったのだが、正直、彼女がまったく吸血鬼っぽくなかったので考えにも及ばなかったのだ。また、美味しそうな春キャベツであったので、ついロールキャベツを思いついてしまい、挽肉に混ぜられたニンニクの香りが表に出ず、分かりにくかったのもまたエヴァンジェリンにとって不運だったのかもしれない。

最初は普通に食べていたのだが、次第に顔を青ざめさせ、涙目で悶絶し始めた。それでも普段なら「ひどく臭かった」程度で済むらしいのだが、時期が悪かったらしい。

魔力をもぎりぎりまで封印されているエヴァンジェリンは、何でもこの時期、意識し

て魔法障壁を展開し、花粉の影響を防いでいたのだとか。そしてちょっとした刺激、いや嫌いなものの代表格であるにんにくの香りにより、その魔法障壁も解いてしまい……

「……ッくしゅん、くしゅん……ぐす……うう、臭い……ぐじゅん」

と、発症した花粉症とこみ上げる嫌いな臭いによって顔はぐしゃぐしゃ。おまけにその事で体の抵抗力もまた落ちたのか、ほどなく熱まで出始め、エヴァンジェリンからすれば散々な事になってしまったのだった。

「吸血鬼と聞いておきながらついニンニクを入れてしまったのはこちらの落ち度、しかしその後は本当に斜め上でしたね」

『まさかまさか、花粉症とか風邪とかひくと思わないもんねー』

とはいえ自分の料理が引き金になってしまった事には少々申し訳なさもあり……翌日、授業が終わるとケーキなどを買い込み、瀬流彦はエヴァンジェリン宅へお見舞いに向かう事にしたのだった。

◇

アンティーク調のベルをカランコロンと鳴らし、しばらく待ってみる。昨夜は寝込んでいたのでもしかしたら出られないかもしれない。その場合はどうしようか、などと考えている間に家の中からハイと返事があり、ドアが開いた。

出てきたのは長身の男だった。硬そうな灰色にも銀髪にも見える髪をオールバック

にしている、年齢は不肖なところがあるが、ひどく落ち着いた風格のようなものを感じさせた。

『ひょっとしてひょっとして、あの金髪吸血鬼の彼氏？　彼氏！　うっひゃー人間だとこういうのってロリコンって言うんだよね！　ろりりん！　ろりりん！』

『いえ相手は６００年生きてるはずですし、そういう意味ではロリコンというわけでは……いやプーカ、家族の方っていう可能性だってあるんですから、くるくる回らないで落ち着いて下さい』

念話とはいえ、とてつもなく失礼な事を使い魔と話していると、その男性がおや、と言いたげな顔をし、次に得心した顔になる。

「早川　瀬流彦君だね。学園長から話は聞いているよ。エヴァの危ないところを助けてくれたみたいだね。あー、きっとあいつの事だから礼の一つも言っていないだろう。代わりと言っては何だけど、ありがとう」

男は目を細めそう言った。

瀬流彦は相変わらず茫洋と、はあ、と言って流したのだが。

「ところで、助けたのが僕だというなら風邪をひかせてしまったのも僕のようなので、お見舞いに来ました」

そう言って瀬流彦はケーキの箱を掲げて見せた。

勝手知ったる様子で男は瀬流彦を招き入れ座席に着かせると、紅茶を出してくれる。自らも対面に座り、一口紅茶を飲んで「やはりうまくいかないなあ」と首をひねった。

男は高畑・T・タカミチと名乗った。

麻帆良国際大学三年生らしい。魔法生徒として瀬流彦の先輩とも言える人のようだ。今朝方帰国したので、挨拶がてら病欠しているエヴァンジェリンをお見舞いに来たのだと言う。

瀬流彦もまた温厚そうな人だなと思い、エヴァンジェリンとの関係を追求する事をあくまで望む使い魔の意見を退けた。

エヴァンジェリンの様子を聞くと、薬が効いたらしく熱も下がり、今は暇そうに本を読んでいるという。

ならばと、途中で買ったミルクプリンをお皿に盛りつけ、紅茶を淹れなおす。昨夜調子を崩してしまった吸血鬼を見舞う事とした。

「お見舞いです、どうぞ」

「……む」

エヴァンジェリンは不機嫌そうに本を置き、見舞いに訪れた瀬流彦を見やった。何か気にかかる事でもあるのか、瀬流彦の後ろに高畑の姿も見える。

どうぞと差し出されたプリンを一口。

「うむ、三光堂のプリンか。良い店を選んだな」
などとどこかの倶楽部の主催者のごとく重々しい口調で言う。
「選んだのはたまたまでしたが……お気に召したなら何より。具合はいかがです？」
「ああ、大事ない。というかただの風邪だ、気を使うな」
『風邪引く吸血鬼さん、鼻水出てるよ！　ティッシュ！　ティッシュ！』
プーカがひらひらとティッシュペーパーを運んでくる。
エヴァンジェリンは食べる手を止めて妖精の運んだ紙ではなく妖精をつまみあげた。
『あーうーあー！　何するの！』
「珍しいな、この地でフェアリーとは。存在が薄過ぎて結界が反応しなかったか……どこから迷い込んだ？」
じたばた暴れるプーカを手に不思議そうにそう問いかけた。
「その子は僕の連れなんですよ。昨日はちょっと離れた所から見てたようでして」
風妖精のプーカです、と瀬流彦が紹介する。
エヴァンジェリンはそうか、とつまらなさそうに呟くと、落ちたティッシュを拾い鼻をかんだ。解放された妖精は慌てて瀬流彦の頭の上に飛んで戻る。
そんなやり取りを見ていた高畑は驚いていた。まさか、あのエヴァ相手にこれほど自然体とは……

「いや、学園長から話には聞いていたけど、本当に君は驚かないんだな」
そう言って苦笑する。
エヴァンジェリンもまた少しふてくされた様子になった。
「こいつはまるで魔法使いの常識を知らない。その上、今の私は封じられて魔力も最低限だしな。ただの小娘としてしか感じられていないのだろうよ」
そう言われても困る。そんな様子を滲ませ、瀬流彦は髪を掻く。
エヴァンジェリンは、はぐ、とプリンの最後の一かけを食べた。そのまま行儀悪く口に入れたスプーンをぶらぶらと動かす。
何か思いついたらしく、ふむと小さく頷いた。高畑に顔を向けて言う。
「……そうだな。タカミチ、アレを出せ、別荘だ。地下の奥に埋もれてる。面倒で出す気にもなれなかったが、お前がいるなら丁度良い。発掘してこい」
「やれやれ、人使いが荒いねエヴァは。帰国したばかりなんだけどな」
「ふん、どうせ麻帆良にいる間は使うつもりだろう。とっとと働け男手」

◇

何となく流れのままに、瀬流彦もまた高畑の発掘作業とやらを手伝っていた。
外観は一見普通のログハウスだというのに、なぜか結構な広さの地下室が設けられており、とにかく色々な類の物が積まれていた。

一番目立っているのは人形だろう。なぜかこればかりは整然と大小様々な人形が並んでおり、照明によってはホラーハウスにも見えてしまいそうだった。

しばらくの作業の後、様々な物の山から高畑が引っ張り出してきたものは一つの大きな木箱だった。蓋を開ければ巨大なフラスコが入っている。中は曇っていてまるで見えない。

手慣れた様子でそれを隣の部屋に運び、台座を組み立て、フラスコを置く。同梱されていた本を見ながら床に模様を描き始める、どうやら魔法陣のようだ。複雑な模様を描きながら高畑は言った。

「……よし、そろそろエヴァを呼んできてくれないか？」

２階に上がり、エヴァンジェリンに用意が出来たらしい事を伝えると。

「うむ、だがだるい。運べ」

「……はあ」

こんな時の抗弁の無意味さをよくよく知っている瀬流彦は素直におぶって運ぶ事にした。それに考えてみれば６００年も生きているのだ。

（年寄りは労るものですしね）

聞こえないように口の中で呟いたつもりだったのだが、首を絞められた。

吸血鬼。瀬流彦はブラム・ストーカーの吸血鬼ドラキュラくらいしか読んだ事はな

かったし、正直な話これまでイメージとしてエヴァンジェリンと結びつける事はできていなかった。
しかし目の前でその様子を見せられてはさすがに理解出来る。エヴァンジェリンは疑いなく吸血鬼であった。
何でも別荘、ダイオラマ魔法球と言っていたが、その魔法具は封印の解除そして起動に結構な魔力が必要になるらしい。
「魔法薬でも良いが、面倒だ。タカミチ腕を出せ」
と、血を吸い始めたのだ。
しばしの後、血を吸い終えると顔をしかめて言った。
「タカミチ、煙草はやめろ。血が不味い。体にも悪いぞ」
「はは、師匠の真似でつい抜けられなくなってしまってね」
まったく、と呟きながら、エヴァンジェリンは魔法球の表面を指でなぞった。途端、フラスコの曇りがみるみるうちに消え去り、中にはミニチュアの模型じみた建物が見えている。
「何はともあれくしゅんっ、入れ」
ずずと鼻をすすりながらフラスコの表面に手の平を触れるとエヴァンジェリンが消えた。高畑が少し怪訝な顔をしたが、ああ、と手を打つ。

「設定がリセットされたのか。手を触れれば良いらしいね。瀬流彦君からどうぞ」
そして瀬流彦が魔法球の表面に手を触れてみれば、足元に魔法陣が浮かび上がり……浮遊感。次の瞬間には景色が変わっていた。
遠くには一面の海、そこにそびえ立つ塔のような建物……あのフラスコの中に見えたミニチュア模型のようなものとまったく同じ造形である。ただ、ミニチュア模型の中に入ったというわけではないようだ。風は潮の香りがし、波の音がかすかに聞こえる。
『すすす……凄い！　凄い凄い！』
はしゃぐプーカと戸惑いの色を出す瀬流彦に、エヴァンジェリンはどこか自慢げな顔を向け、こっちだと招いた。
続いて転移してきた高畑と共にその塔のような建物に渡り、すたすたと歩くエヴァンジェリンに続いてワンフロア下りる。
そこには絨毯が敷かれ、ベッドが置かれていた。リビングのような場所でもあるのだろうか？　大きいソファやテーブル、本棚も設置されている。
エヴァンジェリンはそのベッドに倒れ込むように寝転がる。仰向けになり大きく一息ついた。
「ああ……大分楽になった」
不思議そうな顔になる瀬流彦に高畑が説明した。

「この空間は魔力が外の世界より大分濃いからね。エヴァの場合魔力の有る無しで体調も変化するし、ここにいれば風邪の治りも早いんじゃないかな」
「……はあ。でもそんな便利なものならしまっておかなくても良かったのでは」
　答えたのはエヴァンジェリンである。
「この魔法具の性質上、時間を引き延ばす事はできても短縮する事はできん。外での一時間とこの世界の一日が連動しているんだ。ただでさえ私は永い時を生きるというのにさらに引き延ばしてどうする」
　そう言ってぷいと横を向く。
「大体私ほどの者になれば魔力の多寡なんて便利か不便かでしかない。風邪でも引かねばそうこだわるものでもないわ」
「はは、そのセリフは魔力が強いか弱いかで競ってる魔法使い達にはとても聞かせられないね」
　高畑が言うと、ふんと一つ鼻を鳴らした。
「まあいい、私は寝る。肉体労働の報酬代わりだタカミチ。ここは好きに使え。どうせ学園長のじじいにも頼まれてるんだろう、そいつの事を」
　お見通しか、と笑う高畑。
　瀬流彦が何の事でしょうかと訊ねれば、どうやら魔法生徒の先輩として瀬流彦の事を

全般的に面倒を見るよう言われたのだとか。能力検査のようなものも任されているらしい。

もちろん、学園側としては所属する魔法使いがどういう傾向で、どの程度の力量なのかを把握しておきたいという部分はある。ただ、瀬流彦の場合についてはさらにもう一つの理由もあった。なにしろ、弱体化したとはいえ、あの闇の福音が危機に陥った程の相手を倒してしまったのだ。

エヴァンジェリンの提出した報告書がまた最低限しか書いていないシンプルなものだったというのも大きかったのだろう。運なのか実力なのか、あるいはエヴァンジェリンの不調が極まっていたのか。学園側からすれば瀬流彦の力量というものを計りかねていて、そんな折に丁度任せられる人物が帰国したのだ。高畑・T・タカミチが瀬流彦の事を任されたのは当然だったかもしれない。

「この空間なら思い切り、派手に魔法を使っても問題ないからね。とりあえず君の自己申告した魔法の確認からいこうか」

高畑は瀬流彦を表に連れ出し、何やら書類を出してそう言った。

確認と言われても、正直なところ瀬流彦の使える魔法というものはそう多くない。参考になる教材も基礎的な魔法教本だけであったし、母は母で戦時中に覚えた魔法、それも恐らく父が護身のためにと教えたものであり、教本に載っているものとあまり変わり

ない。

それに瀬流彦自身の風属性への適正が高すぎた事もあり、使用できる魔法の幅も狭くしていた。忘却の魔法や認識を阻害する魔法などあまり属性の関係ない魔法、どちらかというと地味な魔法はかなり使用できるのだが、そういった種類のものについては後に専用の測定できる魔道具があるので、それで検査をするらしい。

そんな理由から、その場で確認のために見せたのは数種類の魔法のみである。

一通りの種類を試し、効果範囲や持続時間、魔力の限界値など事細かに計り終えた時には三時間ほども経っていた。

魔力を消費した瀬流彦が休憩を入れていると、エヴァンジェリンがのそのそと上がってきた。

体調は大丈夫なのかと聞くと、鼻で笑う。

エヴァンジェリンは1人で黙々と地味な鍛錬をしている高畑と、座って壁にもたれながらぼうっと眺めている瀬流彦を交互に見て言った。

「タカミチ、少しこいつと戦ってみろ」

「え……？」

高畑は困惑した。当然だっただろう。彼の魔法を見せてもらった限りでは魔法学校を出たばかりの魔法使いという感じであったし、個人データや少し話してみた感じで

も、そう戦闘向きとは思えない。
少し違和感を覚える事はあったが……これからの方針としては戦力として見るより風属性に向いた諜報や移動、あるいは本人がこつこつした事が苦にならないなら魔道具関連に進むのもまた良いのではないかと考えていたのだ。その事を言うとエヴァンジェリンは気怠げな様子で小さく息を吐いた。
「悪い癖だなタカミチ。魔力や気の運用で戦闘者としての力量を判断するのは。いや、他よりはマシかもしれんが」
言ってからふむ、と顎に指を当て考える様子を見せると、自己完結するように呟いた。
「別の要因か。あの連中の中で育てば麻痺もするというものかもしれん……だが、そのままではお前、寝首を掻かれるぞ」
見ていろ、と一声言ったかと思うと、そんなやり取りの間もぼやーとしているようにしか見えない瀬流彦に向かい、突如――殺気さえ帯びた様子で瞬時に近寄った。
瞬動、と呼ばれる技だった。あまりに急に間合いに飛び込んできた殺意の塊に、瀬流彦の体が考えるより早く反応した。剣を抜き、首を裂き……次の瞬間、剣など持っていない丸腰だと気付く。そして、目の前の小柄な吸血鬼を見て、ため息を吐いた。
「驚かさないでください……」
心臓弱いんです、などととぼけた事を言う。

「なるほど、間合いからすると剣か。足運び、足音から何かやっているだろうとは思っていたが……」

反応させられてしまいました、と頬を掻く瀬流彦。

エヴァンジェリンはくく、と小さく笑った。

「半信半疑ではあったが、この通り引き出しが多そうだ。タカミチ、戦闘向きでないからと言って戦闘をこなせないとは限らない。アルが良い例だ。お前は咸卦法を習得したが油断できるほどに強くなったわけでもない。人はすぐに死んでしまうものだ、気をつけろ」

そこまで言ってエヴァンジェリンは自嘲するように肩をすくめた。

「らしくもないな」

ナギめ、という小さな呟きを残し、きびすを返したエヴァンジェリンを高畑は複雑な顔で見ていた。やがて気分を変えるように煙草を取り出し、火をつける。空に向かい、紫煙を吹いた。

「瀬流彦君は武術でも嗜んでいたのかい？」

「ええまあ、見様見真似ですが、それなりには」

瀬流彦は何とはなしに風に吹かれて消えてゆく紫煙を目で追いながら答えた。ここで言う見様見真似というのは嘘ではない。ただ見本がかつての自分というだけで。

「そういう事ならエヴァの薦め通り、ちょっと立ち会ってみようか」
「はあ……」
　エヴァンジェリンが言うには下の倉庫に幾つか武器があるらしい。連れられて行ってみると、様々な武器、中には古くさい鎧なども無造作に積まれている。どうも長い年月の間に襲ってきた連中から剥いだ身ぐるみなのだとか。
　丁度良さそうな細身の剣があったので、それを手にとろうとし……
「あ、いえ、こんな刃物を振り回してしまっても良いものでしょうか」
「……む？　ああ。そういえば基礎教本までは魔力強化は知らんのか。説明してもいいが、やってみれば判る。タカミチに魔力も通していない剣など木の枝のようなものだ。傷一つつかんさ」
　そういうものですか、と細剣を手に取る。鞘から抜こうとしたが抜けない。
　エヴァンジェリンが鞘に指を触れると、表面に一瞬さざなみのように文字が走り、するりと剣が抜けるようになった。
「年代物だからな。保護していただけだ」
　こんな魔法もあるのかと内心驚きながら、抜き身の剣を見る。まるで寸前に手入れを施したかのようだった。
　瀬流彦が剣を持ち、表に出ると、それに気付いたのか高畑はジャケットから携帯灰皿

を出し、吸っていた煙草を潰し入れた。
「お待たせしました」
「なに、さほどでもないよ。しかし、それはレイピアかい？　やっていたのはフェンシングかな」
「ええと……そんなようなものです」
高畑は自然体でポケットに手を入れ、広間になっている空間の中程にゆっくり歩いた。
瀬流彦もまた、剣を鞘から抜き、それに向かい合う。
（しかし何をやっているんでしょうか、僕は……どうにも流されやすいですねえ）
そんな事を思い内心で苦笑した。
高畑は高畑でこの状況でどう動くべきか、少々困惑していた。攻め手に迷っていると言っても良い。
相手が麻帆良によくいる類の、力の使い方を勘違いしてしまった跳ねっ返りや、魔法を使えるという事で特権意識を持ってしまっているような若者だったら対処は簡単だった。
また、武術の道を進まんとする者や、明らかにこちらに敵意を持つ者であるならさらに対処は楽になる。

しかしこの相手、瀬流彦君は……どうにもやりづらい。先程のエヴァへの対処を見れば判る。あれはかなりの修練を積んだものの動きだ。しかしその割に、こう前に立っても戦意、そして勝とうという気がまるで感じ取れない。感じ取らせない……とでもいうのか。魔法の確認をした時と同じように、こうして前にたつ瀬流彦君は戦闘などの生臭いものからは程遠い、非戦闘系の魔法使いにしか思えなかった。

高畑は考えても仕方無い、と一つ息を吐く。もとより自分は戦士。下手の考え休むに似たりというものでもあるのだろう。

「瀬流彦君、まずは一つ」

そう前置きをして得意の居合い拳を放った。

拳圧が飛び――あっけなく避けられた。

高畑は驚き目を大きく開いた。威力は加減し、精々一般人を鎮圧する程度だったが、速度は通常と変わらない。否、彼の手札においてこれ以上予備動作も小さく、最速で撃てる攻撃など無い。

「まさか、無詠唱で風を纏わせている？　それで察知か」

あれほど一属性に特化しているならそれもまた考えれる事だ。魔法世界にはそういう類の種族もまた多い。

ならば、と連撃を繰り出す、多角的に威力もそれぞれ変え、察知されようが問題ない

よう、檻に閉じ込めるがごとく居合い拳を放つ。
魔力で速度も強化された連撃はほぼ同時に１２発、その一撃目は避け、二撃目を何と剣で打ち払い、軌道を変え、残りが当たらないわずかの隙間に身をよじり、全てを回避してみせた。
凄いな、と呟き、一瞬の溜め。身をよじり、回避できる体勢ではない瀬流彦に向けて、本来の威力の居合い拳を放った。
「風楯（デフレクシオ）」
左手に持った杖を前に突きだし、防御魔法で居合い拳――原理の判らない瀬流彦からすれば遠距離からのの不可視の攻撃を捌いてみせた。
高畑はおお、と驚き。次に一つ頷いた。
「なるほど、確かにエヴァの言う通り。君みたいな人も居るんだな……これは勉強になったよ」
究極技法とも言われる技を習得し、魔法使い達から賞賛され、らしくもなく舞い上がっていたのかもしれない。確かにここまでやらなければ相手に戦力があることすら見抜けない。そんな目で戦場に出ていればいつ寝首を掻かれるものか判ったものではなかった。まだまだ、修行が足りない。
色々と暖まってきた高畑とは逆に、瀬流彦は内心どうしようかと冷めた思考で考えて

いた。
（途中で何発か不自然でないように当たってＫＯされた方が後腐れがないでしょうか）などと不真面目な事をちらりと考えていたりもする。
「瀬流彦君、エヴァも言っていたかもしれないけど、その状態の剣でならどうにかなることはないし、遠慮なくかかってきてくれ」
はあ、と瀬流彦は相変わらず、気のない返事をしたものの、確かに何もせず受け身でばかりいるのもかえって失礼かと思い、攻撃に出た。
「風よ（ウエンテ）」
精霊に呼びかけ、かつての自分が魔術の道具に頼りやっていたように自らの推進力とし、一息に間合いに飛び込んだ。剣を振るう。念のため皮膚を切る程度の軌道で。
しかし、それは何かに阻まれている感覚に捉えられ、傷一つつけられなかった。まるで堅い液体を切ったような不思議な感覚。
「なるほど、それが魔力による強化というやつですか」
確かにこれならいくら切りかかられたところで問題ないだろう。
そして高畑は瞠目していた。剣速があまりに迅く、しかも軌道が読めない。居合い拳が回避されていたので、意趣返しにこちらも避けてやるつもりでいたのだ。それがどうか。もしこの剣に防御を貫くだけの魔力ないし気による強化があったらどうなるか

……

その後１０合程も剣と拳を交わしただろうか。

高畑の攻撃はひらひらと揺れるように躱されあるいは魔法で防がれ、直撃は一発もなく、瀬流彦の攻撃は当たれど当たれどダメージとはならない。

頃合いを見計らい、高畑は間合いを広くとった。

「よし、じゃあそろそろ終わりにしようか。今後は一緒に仕事をすることになるかもしれないし、最後に僕の技を見せておくよ」

そう言って何か集中するかのように目を細める。

やがて拝むかのように両手を合わせると、風が渦巻いた。いや、気というものを知らない瀬流彦にも感じ取れるほどの濃密な何かの気。それが高畑を中心に渦巻いているのだ。

「これは……」

「未だ未熟だからね、そう長時間持つものでもないのだけど。まあ、見ててくれ」

そう言って高畑は塔の外縁部に歩み寄り――

豪。

音にすればその一文字だろう。

モーションは今まで瀬流彦が受けた居合い拳と変わらない。いや、むしろ威力を高め

るためか、大きな動きにすらなっている。
だがその威力たるや……
海が割れていた。
無論「別荘」とやらの世界なので、現実でも同じようになるかは判らないが……
やがてその割れていた海は音をたてて、幾多の渦を作りながら元に戻る。
瀬流彦はそのあんまりな威力に口の端をひくつかせていた。
「モ、モーゼごっこが出来そうですね……」
「はは、今のが現時点で僕の出せる最大威力の攻撃、豪殺居合い拳なんて呼ばれてるよ」
高畑が説明するに、気と魔法を合一させた咸卦法というものらしい。
瀬流彦はため息をついた。かつて小さな魔女が見せた魔術も自然を操るという意味では凄まじいものがあったが、人が自らの力で奇跡を起こすという部分においてはこの世界の魔法はとてつもないものがあるらしい。
「かなり手軽に見せてしまっているが、これは究極技法とも言われている技だからな。威力が出るのは当たり前だ。むしろタカミチは持続時間を長くするのと、隙を小さくするのに費やした方がよかろうよ」
気付けばエヴァンジェリンが近くまで来ていた。
気怠げに瀬流彦に顔を向ける。

「おい、あの時鬼を切った魔法は見せないのか」
高畑もまた興味を惹かれたようだった。
「そういえばエヴァの出した報告書だと鬼を倒したとしか書いてなかったけどどんな感じだったんだい？」
「……ん、そうだな。それなりの上級の鬼だったが、腕と首をばっさりだ。凄まじい切れ味だったぞ、切れてから盛大に血が吹いたからな」
どうやったのか気になるな、と口の端を上げて瀬流彦をちらりと見る。
瀬流彦は髪を掻き、先程の手合わせの間に穿たれて砕けてしまった床石の破片を拾う。
「こうです」
一言言ったかと思うと、その破片をぽんと投げ杖を振りながら「風よ」と呼びかけた。
宙にある石が一瞬揺らぎ、地面に落ち、その拍子に二つに割れた。
高畑が不思議そうな顔をし、エヴァンジェリンは瞬間驚きの色を浮かべた後、納得したように頷いた。
それはただの言霊による呼びかけ。「火よ灯れ（アールデスカット）」に代表されるような基本的な魔法だった。
「真空の刃とかかい？」

二つに割れた石片を手に取り、高畑が言う。
エヴァンジェリンは違う、と一言で否定した。
「あれは石を切れるようなものにはならない。というか、そんな言葉が出てくるとはこの学生たちにでも毒されたかタカミチ。魔法で真空の刃を作るくらいなら逆に圧縮空気の刃を作った方が早い。威力の程もそちらが上だ。高密度の圧縮空気などというものは一種の爆弾のようなものだからな」
じゃあ、あれは……とますます不思議そうになる高畑に、エヴァンジェリンは、神多羅木の魔法に近いものがあると言った。恐らくは……と顎に指を当て、休憩所のようになっているテーブルでリンゴを貪っている妖精に声をかけた。瀬流彦への印象を聞けば「友達」らしい。
エヴァンジェリンはやはりな、と一言呟き納得した様子を見せた。ふと時間を確認する。すでにもう別荘内では夜にも近くなっているのを確認すると、瀬流彦を呼び寄せた。
「そろそろ夕食の支度を頼む。キッチンは2階下だ」
◇
瀬流彦は、何だか自然に従ってしまっている自分がつくづくアレだなあと思いながらも食事を用意した。

この別荘とやらはなかなかに調理器具や食料も備蓄されていて、とても便利である。冷蔵庫に入っている卵などを見れば生産日が一月前のものだったりもするが、割ってみれば新鮮だったりした。エヴァンジェリンに聞いてみればこの冷蔵庫もまた保存用の魔道具の一種だそうで、どれほど便利なのかと突っ込みたい気分になったのは無理からぬ事だったろう。

「病み上がりにはやはりお粥でしょうか」

こちらの母から教えられたので、勿論日本の料理もしっかり作ることが出来る。粥……というと今ひとつ美味しくない印象も持たれがちだが、しっかりした手順で作ればそれは美味しいものなのだ。

コツもそう難しいものではなく。熱湯の段階で米を入れる事。米もまたしっかり研いだものよりは水ですすいだくらいのものを使うと粘りが出すぎない。優しくかき混ぜ、締めに蓋をして蒸らせば良しだ。

今回は出汁を取り、軽い塩味を最後に加えた。

付け合わせに、とろみを付けた炒り卵、蒸したササミの胡麻和え、梅干し、青菜のもみ漬け、茄子の味噌炒めなどを用意し、さらには白身魚のすり身団子の蒸し物、刻み柚子を乗せ出汁醤油をかける。

栄養バランス的には青物やキノコ類がもう少し欲しいところだったが、あまり時間を

かけてもあのお嬢様めいた吸血鬼が文句を言いそうだ。両手に盆を持ち、器用に料理を運んでいった。

「早川は……」

行儀悪く木のスプーンで指し示し、エヴァンジェリンは何か言おうとしたが、瀬流彦は手で止めた。

「名前で呼んでもらった方がありがたいです。母方の苗字ですが郷里では僕も母もあまり良い目を見てなかったので」

「……む、面倒臭い奴だな」

「すいません」

瀬流彦は、と言い直した。

「極めて古いタイプの魔法使いだ」

「古い？」

「ああ」

はも、とふわとろ炒り卵が乗った粥を口に入れる。

「私の生まれた頃には既に宗教に追いやられ、異端として小さな隠れ里に細々住んでいたような連中、魔法使いとは原点を同じくしながら次第に分化していったシャーマニズム的な一派、その連中に似ている。まあ、大きな目で見れば西洋魔法使いと言えるさ」

八百万の神々を引き合いに出すまでもなく、日本という土地は元より人でない存在に対して寛容だった。さらには熊野という場所は世界的に見ても一級の霊地であり、そこで継がれてきた血と魔法世界に住んでいた魔法使いの血、それが合わさった事を考えればそんな形になるのもまた道理……と食べながら説明する。

「魔法使いというより精霊使いと言うべきか。日本語にすると妙に陳腐な響きになるが。旧世界ではひどく珍しいタイプだろう。タカミチ、戦力として育てるつもりなら魔法使いとしてより戦士として育てた方が良い。現代の魔法は根本的に向かん。ある意味詠唱のできないお前にぴったりの変わり者の後輩だよ」

その言葉に高畑は疑問を顔に浮かべた。石を切った時の威力を見ても、呼びかけのみであの威力が出せるなら成長させれば十分魔法使いとしても戦力に数えられると思っていたのだ。もちろん本人が研究系を選ぶならまた違う思案もあるのだろうが。

その様子を見て取り、エヴァンジェリンは魚のすり身団子を箸で小さく割りながら、捕捉するように話した。

「魔法使いは精霊を使役し使い潰す事も可能だが、こいつにそれは出来ん。精霊に手伝ってもらっている都合上な。つまるところ現代の魔法の在り方ではまず本来の威力を出せない。頼みは精霊召喚くらいか……しかしそう考えると、学園長はいい加減食わせ物だな。ある程度方向性を見抜いてお前に任せたのだろう。他の魔法先生に預けれ

ば本質を見抜けず、相当歪んだ形の魔法使いにしかならなかったかもな」
「いや、しかし僕もまた瀬流彦君の本質を見抜けていたとはまず言えないと思うのだけど」
「……私に相談することもまた折り込み済みという事だろうさ。まさか即日とは思わなかっただろうがな。一石で二つも三つも波紋を広げようとする。まったくあのじじいは……」
　そんな会話を聞きながら、瀬流彦はお茶をすすった。どうもこめかみを冷や汗が一滴流れる。
（高畑さんが責任感が強いのは判りましたが、どうも流されるままだとばりばりの戦士にされてしまいそうです）
　はっはっはと笑いながら滝でも切り裂く己の姿が浮かぶ。似合わない、恐ろしく似合わない。
　瀬流彦からすればとても善良な人ではあるのだが、それだけに何か期待してくれているのなら、その期待を裏切るのは少々申し訳ない気分にもなりそうであるし、困ったものだった。
　一晩泊まった後、高畑が黙々と修行をするのをぼうっと見物しながら、自分の先行きを考え……考え……考え……ため息を吐いた。

かつての自分は生きるのに精一杯であり、唯一できた大切な存在を守る事に精一杯であり、あの煉獄の業火のような男に影響されながら、流れのままに流されながらも、どこか縛られていた。

今の自分は逆だ。生きるだけなら過分に過ぎ、大切な存在は肉親ただ1人。それも自分の守りなど必要とはしていない。糸の切れた凧、そんな気もするのだ。

昨日見た技が面白く思えたのか、使い魔の妖精が『いあいけん！　いあいけん！』とはしゃいでいる。

そんなのを見ているとおかしみがこみ上げて来て……ふと、流れのままに流されるのもまた良しかと思い、力が抜けた。

瀬流彦が別荘から出て、エヴァンジェリン宅から帰ろうとした時、少々の目眩を感じた。

周囲は多少暗くなり、夕焼けが橙色に風景を染めている。

「これが時差ボケというものですか」

それこそどこかとぼけた事を呟き帰ろうとする瀬流彦はエヴァンジェリンに引き留められていた、高畑が帰るのを見送った後、にやりと笑い、言った。

「お前の魔法使いとしての存在が古めかしいのはともかく、剣術もまた相当に古めかしいものだったな。あれははるか昔に廃れた剣術だ。タカミチはフェンシングなどと

思っていたようだったがそんな優しいものではないだろう。数百年ぶりに見かけたぞ？」

相変わらず気怠そうに、小さな吸血鬼はくく、と小さく笑う。

何かを話そうとした瀬流彦の口の前に指を出し、言葉を止める。

「何も言うな。どうせ私は時間を持て余す身だ。謎解きくらいはさせろ」

それだけだ、ではな、とまるで犬でも追い払うかのようにしっしっと手を振る。何とも失礼なものだった。

瀬流彦は頬を掻き、ぶーぶーとわめき立てる妖精を肩に乗せると、のんびりとした様子で帰路につく。

歩きながらぽつりと呟いた。

「どうにも参りました。母……といい、ガッツさんといい、小さい魔女さんといい……今度は吸血鬼さんですか。僕はどうも抑圧される少数派に関わり合う事になってるようです」

『んーピコリンは？』

「僕は大衆迎合派です、長いものには巻かれる主義ですよ」

言葉の意味がよく判らなかったのか、瀬流彦の頭の上で妖精はぱたぱたと飛び回った。やがて頭の上に着地し、足を組む。

『よくわからないけど、うそつき』
「嘘じゃないです」
『きつつき』
「きつでもないです」
『きつってなあに？』
「さてなんでしょう」
そんな何でもない会話を交わしながら夕日の中を歩く。
春の風がさわさわとそよぎ、瀬流彦の髪をわずかに揺らした。

三話

春の陽気は段々と暖かくなり、時にはもう暑いと言い換えられそうな季節となった。
瀬流彦は相変わらず場違いな気がして少し居づらく、足早に女子中等部の校舎を出る。
学園長に呼び出されて行ったのだが、思いもよらぬ事を依頼された。いや、取りまく環境を考えれば当然のことだったろうか。
学校の裏門から出た所で、学校に張られている結界の効果範囲外になったのか、鼠を相手に遊んでいた使い魔が『ご用事済んだ？』と言いながら肩に飛びのってきた。
「プーカ、君は猫ですか……妖精にウイルスだの細菌は関係ないと思いますが、帰ったらちゃんと手を洗ってくださいね」
『にゃー』
猫の真似をする使い魔を何となく指でつつきながら、瀬流彦は先程交わされた学園長室での会話を思い出していた。
「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの監視役……ですか？」
「うむ、あくまで表向きじゃがの」

もとより高畑・T・タカミチがその任にあたっている……という形を外に示していたらしい。

闇の福音という魔法世界においてはトップクラスの知名度を誇るエヴァンジェリン。彼女が麻帆良の地に封印されているという情報は魔法使い達の中でも情報深度は深く設定され、知っているのは他組織においては、メガロメセンブリアの元老員議員とそれぞれの組織のトップくらいのものだと言う。

そして高畑がここのところNGO団体「悠久の風」に所属し、海外や魔法世界で活躍するにつれ、麻帆良の闇の福音に監視役不在という事実を政敵を蹴落とすために利用しようという動きが元老員議員の中であるらしい。当然ながらそんな動きに頭を痛めている議員もいるらしく、大事にならぬ前に麻帆良に対応を要請してきたという。

「まあ、こんな事は割と日常茶飯事じゃがのう」

フォフォと学園長は笑ってみせ……ようとして失敗したようだった。ため息を吐き、瀬流彦に真面目な目を向ける。

「一介の生徒である君を巻き込んでしまって申し訳なくも思うのじゃが……他に人が居なくての。次善の策もある事はあるが、今の落ち込んでいる彼女にはちと酷になる。曲げて頼まれてはくれんか?」

(相変わらず政治の世界は迂遠ですねえ……)

そんな感想を抱きながらも瀬流彦は承諾する。
「うむ、すぐにと言うわけではないが、いずれは高畑君と共に本国の方にも面を通しておいて貰う事になるやもしれん。その心構えはしておいて欲しい」
学園長はすまなさそうに言って頭を下げた。
ここの所、連日のように高畑はエヴァンジェリンの「別荘」を使用していた。
守らねばならない者があり、亡くなってしまったものとの約束があり、手を伸ばせば助かる者たちがいる。
その為にも高畑は誰よりも強さを求めていた。
ダイオラマ魔法球を用いれば、長い時を生きる吸血鬼ではない高畑は当然ながら周囲より早く年を取る。大学に在籍しているものの、同い年の生徒達は皆一回りも二回りも若く見えた。
寂しさを覚えなかったわけではない。ただ、遙かに遠く見える背中。自分の憧れた英雄に一歩でも追いつくため、ただひたすらに走り続けていた。
それでも――
「まいったな」
瀬流彦から学園長の言伝てを聞き、高畑は苦笑した。
ナギ・スプリングフィールドが行方不明になる以前までは、封じた本人が不在だろう

と監視役が居なかろうとメガロメセンブリアは一切手出しをしてこなかったのだ。
「というわけでエヴァンジェリンさん、今日から監視役となりましたので、よろしくお願いします」
「……堂々と言う奴がいるか、そういうのは監視対象には黙っておくのが普通だろう」
エヴァンジェリンも瀬流彦のそのとぼけっぷりには流石に呆れた様子である。
高畑は煙草に火をつけ「別荘」の中ゆえか霞む海平線をぼんやりと眺め、ぽつりと呟いた。
「やっぱり僕ではなかなかナギさんのようにはいかないね」
耳ざとくそれを聞きつけたエヴァンジェリンがにやりと笑った。
「ほうタカミチ、お前がそんな気持ちだったとはついぞ知らなかったぞ」
「ん……え、いや、意味が違うよ、ナギさんの代わりにエヴァと居るってわけじゃなくてね、あ、いやどう言えばいいか……」
エヴァンジェリンは高畑の腕をぺしりと叩いた。
「判ってるさ。からかい甲斐のない奴だ。真面目すぎる」
気怠げにため息を吐いた。
髪を鬱陶しそうにかき上げると何か思いついたように、ふむ、と一言呟いた。
塔の、舞台のようになっている部分より一段高い場所にテーブルや椅子などが設えて

ある休憩所のような場所があり、そこに高畑と、先程からの一連の流れが判らずぽかんとしている瀬流彦を招き、椅子に腰掛けさせた。

不思議そうな顔をする2人をよそに、エヴァンジェリンがぱちんと指を鳴らすと、魔法陣が床に浮かび、魔法の縄めいたもので拘束される。

「エヴァ……！　何をするっ」

と驚く高畑、万年閉じているような目を開け状況を冷静に把握しようとしている瀬流彦。

2人を前に、小さな吸血鬼は、それはもう世紀の大悪人であるかのようにくつくつと笑った。

「これは戯れであり、八つ当たりだ。監視役というなら知っておくがよい」

そう言って視線を媒介とし、自らの記憶の中に2人を引きずり込んだ。

◇

それは始まりの記憶。

エヴァンジェリンは幸せに育った。

無論、それは偽りの幸せ。厳しい現実を大人達に隠されていただけ。

ただそれでもなお、幼い子供から見ればそれは幸せだった。

父はエヴァンジェリンが物心つくか、つかないか、そんな頃には政争に敗れ、海の向

こうの国に追放されていた。
かねてより立場に危険を感じていた父は腹心とも言える領主マクダウェル家に、数年前より出産後の容態が思わしくないという名目をもって妻と子を預けている。
大人達の間では熾烈な争い、それも親類が骨肉相噛むような争いがあり国は乱れていたが、幼いエヴァンジェリンはそんな事を知るよしもなく、何不自由ない暮らしの中ですくすくと成長していった。
マクダウェル家の者達はその当時珍しく、後世において人格者と呼ばれるような者が多かった。驕り高ぶらず、貴族の名誉を大事にし、領地と領民を大切にした。そして共に預けられていた母は、五男三女を産んだにも関わらず、なお元気であり、趣味の刺繍や裁縫などをしながら穏やかな日々を送っていた。
やがて骨肉相噛むような熾烈な戦いが終わると、エヴァンジェリンの父が実権を握り王となった。
病気療養とされていたが、あまりに長く預けられていたので、世間には忘れられ死んでいるがごとき扱いを受けていた母にもまた、王妃となり、名誉を取り戻すよう王となった父は望んだ。しかし、母は権力よりも今の穏やかな生活が気に入っていたようだ。それに、重責を担い、国そのものと言っても良い立場になった夫が1人の人間で居られる場所でありたいとも望んだ。その優しさに触れてか、王となった父は静かに涙を

流し、折々マクダウェル家を訪れるようになった。

「お前を日の当たる場所に連れていけぬのが残念だ。が、いずれは良い縁を探してきてやるとしような、この父が引き受けるのだ。楽しみに待っているがよい我が小さな姫よ」

そんな演技がかった様子で、抱き上げられたエヴァンジェリンは言葉をかけられた。それを見た母もまた「ふふ、調子が戻ってきましたわねヘリフォード随一の伊達男さん」と楽しげに笑う。雰囲気の柔らかくなった両親に感化されてか、まだ幼いと言えるエヴァンジェリンも、明るい笑い声を上げた。

時折、母の元に良家の子女や息子と思わしき子供達が遊びにくる事があった。遊猟や避暑のためという名目である。

王の息子や娘達、エヴァンジェリンの兄姉達だった。活発ではしっこく、元気で人なつこい。そんな子供であったエヴァンジェリンは家族からは、遠い南の国に嫁いでいった叔母の名前を取った幼名、その愛称としてキティ（子猫）と呼ばれ、可愛がられていた。彼女のお気に入りは長兄である。生真面目でいつもしかめ面しい顔をしているが、その実情に厚く、優しい。脈絡もない、幼稚なエヴァンジェリンの話を根気強く聞いて、真面目に答えてくれたものだった。後世の戯曲家には無頼放蕩の人物にされてしまったが。

穏やかだった生活は、エヴァンジェリンが１０歳になった誕生日に脆くも崩れ去った。

何時からだったのだろう。素顔もろくに見えない、フードを被った魔法使いがマクダウェル家を出入りするようになっていたのは。気付かなかった。誰も気付く事ができなかった。

誕生日の朝、起きたら人ではなくなっていた。

魔、そのものになっていたエヴァンジェリンはそれを頭で理解するより先に、魂で理解していた。

戻れない、もう人の身には戻れないのだと。

ふらりと歩き出す。城に人影はなかった。当たり前だ。自らをこうするために捧げられてしまったのだから。それもまた、当然のように理解できていた。

虚脱した心に真っ黒な水が注がれる。

憎悪。

あいつだ。

あいつがこれをした。

憎悪。

あの魔法使いが、こうなるまで気付けなかったあいつが私を城を母様をこうした。

憎悪。
エヴァンジェリンは真っ黒に心も魂も塗りつぶされていくのを感じた。
魔法使いは一室で書を読んでいた。何ほどの事もなかったかのように。
それは歩くエヴァンジェリンを見て、驚きの声をあげた、もしかしたら予想の外の事だったのかもしれない。
憎悪を体現するような笑みを浮かべ襲いかかった。
魔法使いは強かった。幾度も幾度も消し飛ばされ、焼かれ、貫かれ、潰された。だが、憎悪の炎だけは消えなかった。
やがてその魔法使いの胸を貫き、引き裂き、自らの血と肉と魔法使いの屍の上で、世界一幼い不死者はただ1人慟哭した。
城に住んでいた者の屍は残っておらず、埋葬すらできなかった。
一晩泣き続け、麻痺した心のまま、エヴァンジェリンは血まみれの服を着替え、何か情報でもあるかと、魔法使いの持っていた何か難しい事が書いてある羊皮紙を手に取り、雑嚢に無造作に入れ、城の外にふらふらと歩き出した。
時節は冬。
城も森も雪に埋もれている。
旅は楽だった。

人でなくなったその身には寒さなど何ほどの事もない。また、生存の本能ゆえか飢えた狼さえも襲ってくる事はなかった。

辛かったのは太陽、そして川。血への餓え。

太陽に当たれば文字通り焼け、この世のものとは思えぬ苦痛を味わった。悔しさから我慢しつづけた時などは完全に燃えかすとなり、灰となり、復活には7日7晩もかかった。

そして流れ水を吸血鬼は渡れないという俗信の通り、まず泳ぐ事はおろか、橋の上を渡ることさえ難しかった。海を渡る事などとうてい出来ず、限られた範囲を幽鬼のようにあてもなく夜をふらつく日々が続いた。

凡そ人ではなくなってしまっても、世間知らずの少女である事に変わりはなく、人の悪意にはそれまであまり触れた事もなかった彼女はその当初「これが洗礼だ」とでも言うかのように、人々の悪意をその身に受けた。

当時集落を離れ、1人で旅をする事そのものがとても珍しい。人は故郷の集落からせいぜい行って隣の集落程度。生涯、生まれた場所より5、6リーグほどですら離れる事が少ない時代。そんな時代に幼い少女が1人で、しかも旅装束でもなく歩いていればどうなるか。馬車から逃げ出し、あてもなく歩く売られた娘とでも思われていたのだろう。騙され、売られた。

やっと騙された事に気付いたのは枷を嵌められ、足の腱を切ろうと男がナイフを足に当てた時。

吸血鬼としての力の使い方など何一つ知らなかった。ただ、力で枷を外し、乱暴に殴りつけただけ。男は倒れたが、武器を持ったその仲間達が襲ってきた。2，3人は倒したものの、一時の興奮が去った身は傷を負えば痛く、すぐに塞がるものの、それは徐々にエヴァンジェリンの戦意を削いで行く。既に男達は相手を何かの化け物にしか思っておらず、槍を数本突き立てたまま、渓谷に落とした。

似たような事は何度でもあった、悪意の水を被るたびに心を冷やしていき、エヴァンジェリンはいつしか「またか」という諦念しか感じなくなってきた。

憎悪でなく人を殺める事になったのはいつの頃だったろうか。

生き血をすする事に抵抗がなくなったのと同じ頃だったかもしれない。

相次ぐ戦争によって人の心もまた荒みきっていた。町から外れた街道を歩いていれば野盗に襲われる事などもそう少なくはない。痛みにも慣れ、自分の人外の膂力もやっと使えるようになってきた頃には、そんな連中を逆に襲い、金目のものを巻き上げ路銀とするような事もしていた。

傭兵崩れなど、ある程度の組織になっているものの中には女子供を拐かし、筆舌に尽くし難い事をする連中もまた少なくはない。いや、当たり前ですらあった。自分に重ね

たか、昔好きだったおとぎ話の騎士でも思い出したのか、そこは本人にも定かではなく、あるいはただの感傷であったのかもしれない。そんな光景を目にした時は野盗を皆殺しにした時すらあった。

在り方を変えてしまったエヴァンジェリンにとって、食事や水を取らなくても行動に差し支えはない。ただ、習慣的なものなのか、飢えの苦しみは感じる。それに何より寂しかった。人の中で暮らしたいという欲求は日に日に高まる。

諸問題を解決するために修道女を装うようになった。この頃の女子修道院というものは、貴族の娘、それも嫁ぎ先がない者や私生児などが言わば口減らしや醜聞が表に出ないように放り込まれる、そんな側面もあった。当然のことながらそういう場所は風紀も乱れ、掴ませる金次第では様々な融通を効かせてくれる。

百年ほど前に作られたものらしい荘厳な聖堂で、金さえあれば神さえ売り渡す背教の修道院長に、神を呪った吸血鬼は修道名を与えられた。アタナシア。聖人アタナシウスより取られた名前。意味は不死、不滅。院長はエヴァンジェリンが吸血鬼であることなど知らない。どこかの訳有りの少女であるとしか思っていないはず。

神とは諧謔もまた嗜むものか。あまりに皮肉の効いた名前にエヴァンジェリンはたまらず笑いがこみあげた。

5年も放浪した頃には世故にも慣れ、余裕も出来てきた。

ある時、辻占いの者達が大勢たむろっているような場所で一冊の本を見つけた。分厚い装丁に装飾された文字に見覚えがあり、目が離せない。持ち主は恐らくそれをどこからか盗んだものだったのだろう、価値も判らずペニー銀貨一枚で譲ってくれた。ねぐらにしている廃屋でそれを紐解けば、見覚えがあるはずだった。自らを吸血鬼にした魔法使い、あれの持っていた羊皮紙に書かれた文字とひどく似ている。それは古ラテン語で書かれており、その時のエヴァンジェリンにはまったく未知の暗号だった。段々使い勝手も判ってきた魔の眷属である自分の身体、蝙蝠などに変身、分化できる能力を生かし、あるいは修道女の装いと視線を通じた暗示で修道院に入り込み、蔵書を片っ端から読みあさり、それを読み解く。

魔法、そう言われるものだった。

エヴァンジェリンが手に入れたそれは教本とするにはいささか難しすぎたが、しばらくの間、むさぼるように読み解いた。知識欲もあったが、それよりも自らを不死者に変えた魔法について知りたかった。

放浪し7年も経った頃、父である王が病で倒れたという噂が市井を飛びかった。回復の見込みはなく、後継を巡り再び骨肉の争いが起こるのではないかと皆不安に怯えている。遠征より凱旋した時、表に出てこなかったのはそのせいなのだろうか。

いてもたってもいられなかった。

国で一番大きな教会、戴冠式も行われる荘厳で冷たい教会、その奥まった一室に王は静かに横たわっていた。

蝙蝠と身を変え、王の枕元に忍び込み　独学で覚えた眠りの霧の魔法を限定的にかけ、付き添いの者を眠らせる。

父は痩せていた。闊達で豪放な笑みを浮かべていた顔も、今は影もない。手を握った。あれほど大きく暖かだった手は冷え、かすかに震えていた。

しばらくそのままで居ると、束の間の眠りから覚めたのか、わずかに父の目が開いた。朦朧としているようで、その焦点は結ばれていない。

「お……お、おおキティや……そんなに泣きはらして……どうしたのかね」

しゃがれた声で途切れ途切れで言った。

「お……父……さま」

「可愛い顔が……ぼろぼろではないか。悪い夢でも……見たのかな」

父はゆっくりと震える手を動かし、エヴァンジェリンの髪を撫でた。

「さ……この父が撫でてやろう。我が手にかかれば……悪しき夢魔など疾く疾く退散してしまうわい」

「父様……」

再び眠りについたのか、ゆっくり目を閉じる父の手に縋り、エヴァンジェリンは静か

に涙を流していた。
時は過ぎ、そんな彼女の係累もまた年老い、1人1人と減ってゆく。
人の命の短い時代だった。エヴァンジェリンが生まれ、半世紀も過ぎた頃には彼女の最後の係累も政争に敗れ、静かに消えて行った。
さらに6年もすると、長きにわたって続けられていた戦争がエヴァンジェリンの故国の敗北に終わり、引き上げてきた者達の不満もまたあったのだろう、今度は内乱の気運が高まっていた。またこの頃にはさすがに「長年にわたり姿を変えぬ童姿の魔女がいる」という噂も広がり、本格的な追っ手はまだないものの、人里には住みにくくもなっていた。
太陽はさすがに克服できなかったが、流れ水の上を船で運ばれる程度ならば何とかなるようにはなっている。独学で覚えた魔法もまた数を増やし、船に密航し大陸に渡る事はそう難しい事でもなかった。
大陸に渡った後はまた拠点を定めず、転々とする生活をした。
エヴァンジェリンにとってその時点の唯一の目的は不死化の魔法の解明であったが、これは遅々として進まない。
あの折に回収してきた羊皮紙には断片的な情報が書きつらねてあったにすぎず、それでも独自の魔法の雛形のようなものの参考にはなったのだが、肝心の魔法の把握には到

らなかった。

時代は後にルネサンスとも呼ばれる時期に入っていた。

古き叡智を掘り起こし、再構成し、あるいは新たな観点からの発見をし……

そんな流れに伴い、ちらほらと占星術や魔術に関するものもまた掘り起こされる事があり、それを目当てにエヴァンジェリンもまた地中海の北岸、ある都市に身を潜め、知識を蒐集し、魔法の研鑽を積んでいた。

魔法使い達や古くから伝わる秘術を扱うものたち、そんな世から隠れ住んでいる者達と会ったりもした。無論自らの特殊性は理解しており、何度も会うような事はなかったが。

何かの折に聞かされ、もっとも最初は世迷い言とも思っていた。もう一つの異世界があるなどと。魔法の知識を深めれば深めるほどそれがどれほど有り得ないかと理解する。むしろ何も知らない無知なままの方が、北のおとぎ話に出てくるティル・ナ・ノグなどを信じられるのではないだろうか。ただ、複数の書に断片的ながら同じ事を記述しているものがある。

幾多の魔法の書を読み解いたエヴァンジェリンはそんな情報を頼りにある場所を割り出していた。興味本位といえば興味本位なのだろう。

彼女の叔母がかつて嫁いだ先の国、その境あたりにその山はあった。

ビュガラッシュ、地元の民からはそんな名前で呼ばれている。ふもとには集落もあるが、１００人にも満たない小さな村。切りたった殺風景な岩だらけの山であり、進んで行くと地元の人間でさえ方向を見失うという。そんな場所に一年ほど居を構えた。己を偽るという特性から程遠いエヴァンジェリンは、あまり得意ではなかったものの、この頃には幻術魔法もそれなりに上手くなっており、本物の魔法使いなどを除き、そうそう正体を知られる事もなく、ただ人の間に紛れて生きるだけならば難しくもなくなっていた。

山を歩き、調査を続けるうちに、魔法により認識が狂わされている事を理解した。それに恐らくは方位も。掴んでしまえば後は紐解くのみ。魔法により人の目から隠された場所は山の小さな盆地にあった。巨大で年月を経た大岩が中心に置かれ、要の役割をしている。

「異界への門……これが」

どうやらそれは一定周期で起動し、異界へと繋がるようだった。世界を生物として捉えればそれは呼吸のようなものかもしれない。数週間待っているとどうやらその周期が来たようだった。面白い、とエヴァンジェリンは躊躇いもなく踏み込んだ。

殺風景な光景が広がっていた。

転送された場所は魔法陣こそ刻まれているものの、余分な装飾など何もない大理石の

台の上だった。かなりの高台に設置されており、四方は切り立った崖になっている。
集落が遠くに見え、まずは情報を集めるべし、とエヴァンジェリンはその身を蝙蝠に変え、異界の夜闇に紛れ飛び去った。
この世界の者達はつながっているはずのもう一つの世界の事をほとんど知らないようだった。それはエヴァンジェリンが後にしてきた世界でも同じ事、互いが互いをおとぎ話のようなものだとしか思っていない。世界に対する疑問を深めながら各地を回った。
この時代、栄えていたのは最も古い都であるウェスペルタティア王都、オスティアだった。
人、物資、知識、様々なものが行き交う都市。彼女はそこでまたさらに興味の赴くまま、かつての世界では決して知る事も考えつく事もできなかったであろう魔法の理論に驚き、またそれまでほとんど見る事もなかった数々の魔法具にも惹かれ、自ら製作するほどにまでなった。古い魔道書にあったドール契約というものを試してみたのもこの頃である。元々趣味だった人形作り、それが高じて人形繰りの技もまた得意としていたのだ。最初にドール契約を結ぶ人形は小さく単純な仕組みのものにした。実験的な意味もあったが、何よりその人形は作ったものの中では一番古く、人とは同じ時を過ごせない自分と長きにわたり一緒に居た人形だったのだ。

そして初めての従者が出来た。前に居た世界において、アラビアより入って来て物議を醸し出し、言ってみれば当世の流行でもあった概念上の数字のゼロ。始まりの意味を込めてそう名付けた。

この世界には亜人も多く、魔族や竜種なんて存在まで居る。長命種もまた多く、中にはアルビレオという本を媒介として存在しているかのような、不思議な男もいた。エヴァンジェリンのどこを気に入ったのか、時折ふらりと現れては妙に絡んでくる「他人の人生の蒐集を趣味にしている」などと公言している趣味の悪い男だった。

魔法を使う者も決して珍しいものでなく、ここではあまり己を偽らずとも暮らす事ができた。それゆえに気が緩んでいたのだろうか、あるいはエヴァンジェリンの知らぬ魔法具でも知らぬうちに使われていたものか。

真祖の吸血鬼という事が知れ渡ってしまった。

不死の秘技は存在だけはまことしやかに伝わっていたものの、その具体的な方法についてはこの世界にも存在しなかった。

また、吸血鬼という存在そのものが、かつて不死の技を求める権力者達が研究し、暴走させ、いわば「吸血鬼もどき」を大量に作り出し大規模な被害が出た事もあり、忌避されていたのだ。

知識の無いものからはそんなもの達と一緒くたに捉えられ忌避され、知識のある権力

者達や研究者は、不死の秘技の一端を知ろうとエヴァンジェリンに賞金をかけ、追い求めた。

長い、長い戦いが始まった。

それまでに手を汚さなかったわけではない、戦乱のまっただ中に生を受け、荒んだ人々の間を生きてきたのだ。だが、かつてここまでの凄まじい敵意に襲われた事はなかった。

隠蔽を重ねて誰にも知られぬように動いても、この世界の賞金稼ぎ、追補の者達は恐ろしく追跡能力に優れていた。

そして、エヴァンジェリンはこれまであまり力を持った者との戦闘というものをしたことがなかった。吸血鬼の能力を用い、初歩的な魔法を使えば十分対処できる事態にしか襲われる事もなかったのだ。

苦戦した。

僥倖があるとするなら、それは追っ手が真祖の吸血鬼の不死性を甘く見ている事の一点のみ。

幾度も灼かれ、切り刻まれ、氷付けにされた。

不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトゥ）などという捻りもない二つ名が知れ渡ったのはこの時だった。自らも死に続けながら屍を作りつづけ、実戦の中、本来研究者的で

あったはずの彼女は戦いの力を身につけていった。
闇の魔法（マギア・エレベア）もこの時期に形になった。自らの存在の特性、そして自らをこのような存在にした魔法使いの残した不死の秘技の一端、そこから作り出した固有技法。手っ取り早く強さを得るには良い魔法だった。
人形繰りの技も絡め手から来る追っ手には有効だった。ただの力のごり押しではどうにもできない、そんな敵もまた多かったのだ。人形が段々性格が荒く、物騒になっていくのはやはり戦闘に使い過ぎ、血を浴び過ぎたせいだったのだろう。
賞金稼ぎや追補のものを倒す度に賞金は跳ね上がった、怨嗟による襲撃もまた増え、1カ所に留まる事などできなくなっていた。
ある時など、エヴァンジェリンを殺すためだけに潜伏していた村ごと焼き払われた事もあった。とりたてて守るつもりもなかったが、巻き込む気は毛頭なかった人々。身を焼く炎の中、久しく感じた憎悪に身を委ね、それを行った魔法使いに報復した。
時代が変わり、権力者も交代すればいつかは忘れられ、追われる日もなくなる。エヴァンジェリンはそんな淡い期待をしたこともあった。叶う事はなかったが。賞金額は上がり続け、また不死に執着する者達は後を絶たなかった。
女ゆえに命までは取らず逃がした賞金首、それに戯れに話した闇の魔法の事でも広まったのか、いつしか闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）などとも呼ばれるようになっ

ていた。最早こちらの亜人や長命種の居る世界にすら居場所はないと実感し、物憂げなため息を一つ漏らすと、かつて背を向けた世界。生まれ育った世界に戻る事にした。

時は16世紀、半世紀ほど前に、ある異端審問官が書いた論文「魔女への鉄槌」の普及をきっかけとした魔女狩りの風潮が広まっていた。

魔女であり吸血鬼でもあるエヴァンジェリンには生きにくい時代。

とはいえ身を隠す術は十分に心得ている。まず見つからないはずだった。相手が一般人のみならば。

この期に及んで、とも言うべきか……やはり油断ではあったのだろう。世界を越えてなお追ってきた魔法使いがいたのだ。異端審問官になりすまして。

既にして賞金稼ぎ達や闇の福音の首を狙うものたちには知れ渡っていた弱点、エヴァンジェリンの唯一のこだわり、女子供に甘い事を見透かされ、町一つの子供達を人質に取られた。

甘い自分に自嘲の笑みを浮かべ、魔法使いが備えて用意してきたのだろう束縛の魔法をその身に受ける。魔法使いの目は怨嗟がとぐろを巻いていた。

魔法使いは優秀だった。エヴァンジェリンは魔力を封じられ、ただ不死で力が強いだけの少女にされ、当時急速に発達を遂げていたあらゆる拷問にかけられた。怨嗟をたたえた目は少女の苦しむ様子を見ては復讐の愉悦に酔い知れ、執拗に嬲り回した。

その魔法使いもようやく飽きたか、あるいは異端審問という形を取っているだけにそれ以上の時間を取る事ができなかったのか。半年ほどで火計に処された。

十字架に打ち付けられたエヴァンジェリンの足元に火を放ったのは、皮肉にも魔法使いが人質として取っていた子供たち。特殊な魔法薬を振りかけられていたのだろう、通常では有り得ぬほどに燃え立った炎の中、乾いた笑いを漏らした。

エヴァンジェリンは灰にされ、聖水を染みこませた土と混ぜ合わされ、川に流された。

１０日も過ぎた満月の夜、再び肉体が再生し、復活した。煌々と照らす大きな月を仰ぎ見て嘆息を漏らす。前もって隠しておいた荷物を取り、従者の人形を連れ、当てもなく南に行く事にした。魔法使いは、あれで吸血鬼を滅ぼしたと思ったのだろう。その後姿を見せることはなかった……が、元の世界に戻って闇の福音を滅したとも言う事もなかったらしい。南の大陸に着くまでに熱心な賞金稼ぎが追ってきたのだった。掴まえて情報を聞き出してみれば、エヴァンジェリンを追っているうちに見つけ出された世界間の「門」それの研究が始まっているのだとか。なぜか、通り抜けられる者と通れない者が居るらしいが……すでに小規模ながらこちらの人々との交流も始まっているらしい。

エヴァンジェリンはこれからの面倒事が増えそうな予感に深く息を吐いたが、同時にこちらの世界ではもう生きられぬ者達、旅の合間に出会った土地の神や精霊を信仰する

者、村に1人はいた呪術者たちに逃げ場が出来たという事でもある。
「それはそれでよしとすべきか」
多少は気分が良くなり、その賞金稼ぎは見逃した。闇の福音がこちらに来ている事、それが伝わればさらに多くの賞金稼ぎや怨嗟の色を纏う者達が追ってくる事だろう。
だが良い。これから足を伸ばすのは暗黒大陸。
近頃ではポルトガルが、長らく伝説の類だと思われていたプレスタージョンの国と外交を持ったのだと伝え聞いている。
幾度も消滅したゆえか、この頃には太陽も克服しており、地中海を南下しアレクサンドロス由来の都市からさらに南に行ってみるのもまたよかろう、と思っていたのだった。
暗黒大陸などと仰々しい名前で言われていたが、行ってみれば良い場所だった。
エヴァンジェリンの故郷と違い、川沿いは年中暖かく湿潤だ。ほとんど人の手の入っていない原生林が生を強く主張している。
遙か南に下るとこれまでに見た事のないような荒い、激流と言ってもよい川にぶつかった。ほう、と感心し川沿いにのんびり下ってみると、段々と川幅は広くなり突如切れた。
広い滝だった。1マイルほどもありそうな幅に大小様々な滝が見える。その光景を

見て最初唖然とし、次にほくそ笑んだ。
「よい場所だ。美しく、心地良く、守りやすい。ひとつ住み処を作ってみるか」
これまでエヴァンジェリンは転々と旅をしてきた。倉庫代わりに小型のダイオラマ魔法球を使っているものの、本格的な拠点を設けた事はない。よい機会なのだろう。もう逃げ回ることにも飽きてきたし、世界を隔てた事で賞金稼ぎの数もかつてよりずっと減った。魔法使いの一端として拠点を作ってみるのもまた一興かと思ったのだ。
本来有り得ない工法も魔法次第では何とでもなる。そして何かを作る事にかけてエヴァンジェリンは一流とも言える存在だった。
後にレーベンスシュルト城と命名される拠点はそうして出来ていった。
時が経ち新大陸へ人を運ぶ奴隷狩りがこんな内陸にまで近づいてくるようになると、エヴァンジェリンはこの拠点の周囲に隠匿の魔法をかけ、自らは南洋に居を移した。
そんな辺鄙な場所に居を移すと流石に暇を持て余してくる。どこから嗅ぎつけたのか時折襲いにくる賞金稼ぎ共が唯一の慰み……というのもまたもの悲しく思い、北にある島国、日本に行ってみる事にしたのだった。
存在だけは知っていたが、未だ踏んだ事のない地だった。他の国との外交の糸が乏しく、情報が少ないのだ。言語もまた広く外に伝わっているようなものではなく、難しい。当時英国の租借地となり、貿易の中心となっていた香港にまず渡り、言葉を理解する者

を探し習得するのにもかなりの時間を要した。

日本は活気に満ちていた。数十年ほど前に長年続いた政権が交代し、外の文化を取り込み、激しい変容の最中だった。

エヴァンジェリンが気に入ったのは古い存在を否定しない、否定しないままに激しい変化を受け入れるその人々の在り方だったのかもしれない。彼女もまた既に古い存在になっていたのだから。そしてさらに気に入ったのは京の都だった。華やかで美しく優しい、そのくせあまりに内向的で、一皮剥けば長い歴史だけあって魑魅魍魎、怨嗟や悪霊が渦巻いている。そんな両面性が自然とあるべきようにある。

そして京都神鳴流――

「魔力を抑えておいて正解だったな」

魔力封じの指輪を見ながら独白する。

戦えば負ける気はさらさらない、しかし楽に勝てるとも言えなかった。何せこちらは魔で相手はそれを退けるものだ。相性が悪い。

気を用いる剣術、島国にこれほどの退魔組織があった事にも驚いたが、京の都の歴史を思えばそう不思議でもないのかもしれない。そしてその京の都のお家芸とも言える呪術、独自の発達を遂げていたその術に惹かれぬでもなかったが、下手に関与して敵を増やしても面白くない、それについては渋々諦める事にするのだった。

魔力を抑えているということは幻術も使えないという事である。
エヴァンジェリンの容姿はひどく目立っていた。御雇い外国人の子供とでも思われていたのだろう、宿などは十分な金を払えば、触らぬ神に祟り無しといった具合で理由も聞かず泊めてくれたが、その宿からでも話が漏れていたのかもしれない。金の臭いを嗅ぎつけたのか、はたまた珍しい異人の子でも売って一稼ぎしようとでも思ったのか、ごろつきにはよく絡まれた。勿論吸血鬼としての力はそのままに残っている。自分の手を振るう気もせず、適当に躱していたのだが、ある時人数を連れてきた事があり囲まれてしまったのだ。面倒に思いながらも、痛い目に合わせておくかと一歩を踏み出した時だった。
「にしゃらあ、何やっとる?」
声がかかったと思うと、ぽんと人が飛んだ。
エヴァンジェリンも、囲んでいる男達もまた驚き見れば、がっしりはしているものの小柄な男が居た。
一瞬遅れ、仲間が投げられた事に気付き、気色ばんだ男達が殴りかかると、するりと懐に入りまた人が飛ぶ。
次々と投げ飛ばされ、ごろつき共は恐慌に陥ったのか、事もあろうかその場にまだ立ちすくんでいると見える異人の少女を人質に取らんと後ろに回り込み、首に手を回し

た。

「む、こう……か？」

エヴァンジェリンはその手を掴み、小柄な男の真似をして投げ飛ばしてみる。

男が吹っ飛び、民家の納屋の上に落ちた。ごろつき達も、小柄な男も呆気にとられ、静寂が広がる。

「……こりゃたまげたわ、力任せたぁなんちゅうおなごか」

まず先に気を取り直し呆れた声を出したのは、その小柄な男だった。

呆れてはいるが恐れはない、その表情が気に入り、自らもおどけてみせた。

「くく、なに、京の都のあやかしさ。血を吸い、人を襲う鬼よ」

「鬼の子か！　かはは、そりゃ良い、また一つ土産話が出来たわ」

剛力、そして人では有り得ぬ牙を見、ごろつき共はおののき、逃げていった。というのに、この小柄な男は相も変わらず恐れの色を出さない。心底楽しんでいるようだ。

その男はマサヨシと名乗った。偽名だろう？　と聞けば「鬼に本名など教えてたまるかい」とまた笑う。

既に齢４０を数え、妻子がありながらも合気柔術を広めるために全国行脚しているのだと言う。

エヴァンジェリンは京以外を巡る良い機会だとばかりに、しばらくその行脚を共にし

た。ふらりと離れて名所を見、土産の地酒を片手にふらりと合流。
「取っ憑かれた気分じゃのォ」
そんな剽げた事を言いながらも男は酒を受け取り、代わりに幾つかの技を教える。
不思議な旅がしばし続いた。
力を超える理。気でも魔力でもない、純然たる技。この男は吸血鬼の膂力さえ受け流し、捌いてみせる。エヴァンジェリンにとってその理は衝撃ですらあった。
やがて日光街道を抜けさらに北へ行くとその男の家があった。古い平屋であり、里の中の高台に位置している。
「けえったぞ、元気にしとったか」
「あ、とうさま、お帰りなさい」
そう言ってぱたぱたと出てきたのは、１０歳を過ぎたか過ぎないかに見える少女だった。癖のない黒髪を長く伸ばし、どこかぼうっとした目をしている。
「娘の茶々じゃ、こっちゃ鬼っ娘のえばんぜり……相変わらず言いにくい名前じゃのォ」
エヴァンジェリンは中途半端な紹介をする男に一発ゲンコツを入れた。
この茶々という娘もまた親に似てというべきか、非常に変わり者だった。
家は寂しく、娘が1人だけ、里から世話をしに来る女中と老爺が居るのみだった。
少々腑に落ちないところもあり男から話を聞いてみれば、茶々は若死にした親戚の娘

らしい。なかなかの資産家であり、困った事に本家の中からも付け入ろうとする者があり、自分の養子にし、このような形にしているのだとか。

またもう一つ、あまり人に知られたくない事情もあった。

人の見えぬものが見え、人が見るものが見えない。

少女の感じる世界は常人のものとはかけ離れていたのだ。

「おれらの祖父様が陰陽の術って奴をやっとったからの、その血かもしれんなぁ」

陰陽師の名門、土御門家。安倍晴明の流れを組むその家とも関わりがあったのだと言う。

ただ、その事を差し置いても変わり者だったと言える。

このような山奥にあって、趣味は礼法に茶の湯。どうやらがさつな育ての親を反面教師にしていたらしい。お手伝いに来る老爺に書物を読んでもらい、独学で習い覚えていたようだった。

事情があるとはいえ、やはり寂しかったらしい。茶々は懸命にエヴァンジェリンを引き留めようとする。

誰にも忌まれた吸血鬼を引き留めようとは……そんな妙なおかしみを感じ、しばしの間逗留した。従者の人形ゼロを携帯している「倉庫」から出し、茶々に紹介しておく。魔力が供給されていないので動く事はできないが、喋る程度はできるのだ。物騒な目的に

使い、血を浴びすぎて乱暴な性格になってしまった人形を、茶々はなぜかとても気に入ったようだった。始終側に置き、何故か酒など飲ませている。一体どの世界にあんな物騒な人形を抱き枕に寝る娘がいるというのか。エヴァンジェリンは呆れた。

人形の名前の由来、ゼロという名前がただの数字を意味するものだと知った時など「それは寂しいです。私の名をあげましょう」とニコニコして言った。

「……だそうだゼロ。お前茶々の名前でも貰うか？」

「ケケ、ゴ主人ガ良イナライインジャネーカ？」

変わり者も度が過ぎると驚きより呆れになってしまうらしい。やれやれと嘆息し茶々の淹れた茶を飲んだ。

この家の一応の家主、地元では小天狗などと呼ばれてもいる男はしばらく実家、本家の方に戻るらしい。ならば、とエヴァンジェリンは話相手として人形を置いて、気儘に旅の足を伸ばしていた。

やがて時が過ぎ、日本と北の大国との戦争が始まると、金髪に白い肌という判りやすい見た目をしているエヴァンジェリンはさすがに気軽に出歩くわけにもいかずにふて腐れていた。

暴漢に絡まれる程度ならともかく、農村部では子供が馬の糞などを投げつけてくる。半ば遊び感覚なのだろうが、さすがに勘弁願いたいところだったのだ。

そんな折、変わり者の茶々にも縁談が舞い込んできた。ふと気付いて見なおしてみればエヴァンジェリンからすれば須臾の間であっても、茶々は少女から大人の女性になりかけていた。未だに感じてしまう羨望と寂しさを感じながら、また一つ所に留まりすぎたな、とも感じている。

かねてから作っておいた簡易的な魔法具を茶々に渡した。

「お前はこの世ならざるものとの境界線に少しだけ足を踏み入れている。それだけによからぬモノもまた招きやすい。それはこの地の土地神である老木の枝から作ったお守りだ。身につけていれば土地との縁が切れる事はなく、この地に居る限りはなまじの魔のモノは寄せ付けんだろう。もっておけ」

行くの？　と茶々は寂しそうな顔をする、しかし内心で判っていたのだろう。この吸血鬼がいつまでも留まる事はないと。

エヴァンジェリンはその夜のうちには日本を去っていた。

雲海の上で魔力の封印を解きながら真祖の吸血鬼は密かに笑う、過ごしやすい国だった。振り落ちる満月の明かりの中、次はどこの国に行こうかと悩んだ。拠点に引きこもっている生活が長すぎたようだった。それはそれで悪くはないが刺激が足りない。

「そういえば……」

北極、南極なんてものがあるらしい。

エヴァンジェリンもかつては地球が丸いというだけで驚いたものだったが、特にこの所数世紀の発見の連続には驚くものがあった。

「世界が狭くなった気さえするな」

ぽつりと呟き、満開の星空を見上げた。

激動の時代だった。

戦争に次ぐ戦争。日本と北の大国との戦争もまた関係していたのだろう、地中海の火種から端を発した戦争は世界を巻き込んだ大戦に姿を変えた。

そんな世情を嫌い、また、自らの首を狙ってくる賞金稼ぎ達もこの所減っているので様子を見る事も兼ね、エヴァンジェリンは再びもう一つの世界に行き、最初の従者であり、最近名前を新たにしたチャチャゼロを伴い放浪していた。

ここ１００年余の間に両世界間の交流は深まり、魔法世界と旧世界という呼び名も出来ていた。恐らくは旧世界からの移民が増えたゆえだろう。

また、かつてエヴァンジェリンが見つけ出した『門』は不安定なものだったようで、既に姿を消していた。ウェールズにある巨大なゲートを密かにくぐり、言わば密入国した形で魔法世界に来ている。かつて通ったか細いゲートとは違い、随分整備された立派なものだった。

魔法世界において、エヴァンジェリンの悪名は留まる事を知らず、罪状には明らかに

なすりつけられたようなものもあり、ほとんど魔の王扱いされていた。
「賞金額も膨らみに膨らんだものだな、まったく妙な事になっている」
「ケケケ、ゴ主人、魔王扱イハ嫌カ？」
「過大評価だが悪くない。それだけの数は殺してきたしな、巻き込んだ者も考えれば正当な評価かもしれん。いささか話が膨らみすぎではあるが」
賞金首の張り紙を丸めて捨てた。
幻術で大人の姿を取り、魔法世界を巡った。数百年前から見れば変化は大きく、一番は北のメセンブリーナ連合と南のヘラス帝国、そんな両陣営に分かれて対立していた事だろう。かつてエヴァンジェリンがこの地に居た時は、メガロメセンブリアなどという都市はなく、地図に記された町があったのみだった。訪れた事はなかったものの、恐らくエヴァンジェリンが来る以前より、知る人ぞ知るような形だったのか、あるいは迷い込んだだけなのか、旧世界人達はこちらで根を張っていたということなのだろう。
古い時代からあるものとして、失われ行くものには同情にも似た感情を抱き、各地を放浪しながら、そんな古い知識、廃れ行く技術などを集め倉庫代わりの魔法球に保管していた。
やがて魔法世界においても戦争が始まった。対立していた北と南が本格的に戦いを始めたのだ。

どこに行っても戦ばかり、よくも飽きないものだとエヴァンジェリンは嘆息し、つまらぬ小競り合いに巻き込まれないよう遠く離れた場所に拠点を作り、静かに息を潜めていた。

戦渦のかからぬ場所に居たとしてもまったく情報が入らないわけではない。紅き翼（アラルブラ）とかいう大戦の英雄達の噂も耳にした。さらっと古馴染みのアルビレオ・イマが入っていた事には少々驚いたが、相変わらずさほどの興味は湧かなかった。

しばらく後にさすがにエヴァンジェリンも顔色を変える情報が飛び込んだ。

王都オスティアの崩落。

「何が起こった……」

かつてはそこに居を構え、様々な知識を得た地だ。最も古き空中の都市。戦争には関わらない、と自らで決めていたものの、流石にその時ばかりは虚しさを覚える。自らを守り、行動の自由を束縛されぬためには誰よりも強くある必要があった。しかしその蓄えた力を自らの事のみに使っていて良いものなのか。そんな考えが湧いてきてしまい、振り払う。だが力に対する寂しさはその後も付きまとった。

戦争が終わり、ひとまず世界が落ち着きを取り戻した頃を見計らい再び旅に出た。

だが、エヴァンジェリンは戦争というものをある意味舐めてかかっていたのだろう。広範囲に渡った大戦により魔法はより戦闘向けに形を変え、魔法具の作成やエヴァン

ジェリンの使用しているドール契約などの技術は廃れ、消え去り始めていた。
彼女からすればひどく久しぶりな感がある。賞金稼ぎ達のグループに襲われた。どうやら一つ所に留まっていた事で特定されてしまったようだった。
賞金稼ぎ達は強かった。
使う魔法がさほど強いわけでもない、ただ使い方が上手い。そして連携が凄まじく巧妙だった。
自らが追い詰められる程でなかったものの、チャチャゼロが損傷を受けた。エヴァンジェリンもしばらく本格的な戦闘などしていなかったせいか腑抜けていたのかもしれない、その事に気を取られ、しまったと思った時には敵方の魔法が既に放たれ――
「雷の斧（ディオス・テュコス）」
中級魔法のクセに馬鹿げた威力の雷がそれをまとめて術者もろとも薙ぎ払った。
何事かと見れば赤毛の若者が居た。妙に存在感が強い。エヴァンジェリンは新手の賞金稼ぎでも来たのかと一瞬身構えたが、様子を見るとどうも助けに入ったもののようだった。
それ自体は珍しいものではない。よく居るのだ、女と見ると助けに入る者が。尤も、助けた後で名前を告げれば大抵及び腰になり去ってゆく。
ともあれ、助けられた事は事実だった。どこか小面憎い、自慢げな笑みを浮かべてい

る男に声をかけようとした時だった。
「……ただで、やられるかァ！」
襲撃してきた賞金稼ぎ共の1人が跳ね起き、魔力を手に集め、地面を叩いた。
「む、捕縛結界か」
予め罠を張っておいたらしい、しかしそれだけでは終わらなかった。
「下は吸血鬼の大苦手……流れる川だァ、一緒に……落ちろやッ」
エヴァンジェリンの足元が急速にひび割れ、崩れ落ちた。落下しながらちらりと見れば確かに下方にはかなりの勢いで流れる川がある。共に落ちている賞金稼ぎの男がにやりと笑った。
抜け出すのは簡単だった。捕縛魔法は強力ではあるが、それを力任せに破る手段は存在する。川に落ちても既に流れ水は克服している以上問題はない。
エヴァンジェリンは表情を変えぬままに、さてどうしようかと少し首をひねる。
次の瞬間、がくりと落下が止まった。
腕を掴み、引き留めていたのは赤毛の男だった。そして失礼にも言ったのだ「危なかったなー、ガキ」などと。
エヴァンジェリンは不服だった。
この男、全く自分を恐れない。緊張すらしない。あげくには本当に子供扱いし、時に

はひどくからかったりもする。
闇の福音であり、６００年近くを生きた不死者であり、狩れば一生遊んで暮らせるほどの賞金首であることを知ってなお、全く扱いが変わらなかった。
「なんなのだ、お前は。本当に……」
それは嵐のごとくエヴァンジェリンの心をかき乱した。それを不思議と心地良いと感じてさえいた。戸惑ってもいたのかもしれない。
不思議な男だった。
言葉は乱暴、がさつで適当、大雑把でいたずら者。ただ、底抜けに明るく、真っ直ぐで、陰湿さが無い。
男は人助けを旨にしているようだった。
大戦により治安は悪化し、盗賊は横行、小規模な戦いはあちこちで続いており、戦争の爪跡は深い。そんな中で男は飽きる事無く一々関わり、お節介に、そしてお人好しに人々を救っていた。
この男が動くと意気消沈していた人々も活力を取り戻し、やがては笑いを取り戻す。
不思議な男だった。
エヴァンジェリンはその訳のわからなさに惹かれ、行を共にしていた。
ある時、いつもの調子で男が助けた子供、その破れてしまっていた服を不器用に繕お

うとしていて、あまりの出来の悪さに見るに見かね、つい手を出してしまった。
妙に感心した様子の男につい良い気になってしまい、いつしかエヴァンジェリンもまた男のやることに手を貸すようになっていた。チャチャゼロに「ご主人ガネエ」などと呆れられる。ナギ・スプリングフィールドという男に惹かれゆく己を認めないわけにはいかなかった。
ただ、エヴァンジェリンはこれまで本当の意味で男を好きになった事などない。当然だっただろう。１０歳の身でこのような身体になり、敵意と殺意の渦の中を這い回ってきた。穏やかに暮らすためには己を偽るか、人々から遠ざかるしかない。長い生の中では己の素性を知った上でさらに平然としている男に会った事はないでもないが、そこまではっきりと惹かれるものを感じるのは初めての事だった。あるいはかつては、よくある物語の中の吸血鬼のような退廃的な振る舞いを真似てみたこともあれど、何が楽しいのかさっぱり判らない。暇つぶし程度にしか感じていなかった。
だからこそ、惹かれてもどうアプローチすれば良いのかなどはまるで知らず、読み解いた幾多の本の知識を当てにせざるを得ず、さらには長年生きてきた矜持がその知識を当てにすることさえ拒絶させ……
「おい貴様、私のモノにならんか」
などと愚にもつかない言葉を吐いてしまったりもした。言って後に恥ずかしくなり、

その夜は幕舎で赤面する。これではまるで初心のねんねという言葉のままではないかと自嘲の笑みを浮かべながらも、どこかそれを楽しんでいる自分さえ居るのだった。本当に困ったものだ、とエヴァンジェリンは自嘲の笑みを浮かべながら、どこか嬉しそうだった。

エヴァンジェリンがナギ・スプリングフィールドという風変わりに男に付きまとい半年ほども経った頃。

この頃になるとさすがに男の事も判ってきた。彼の仲間達とも合流し話を聞き出す、なぜ結びつかなかったのか自分でも不思議な程だった。

紅き翼のサウザンドマスター、大戦の英雄。

「なるほど、この私が欲しいと思うわけだ」

呟いたそんな言葉を旧知であるアルビレオに聞かれ、その後はことあるごとにからかわれる事となった。

筋肉ダルマとしか思えぬジャック・ラカンとも合流した後は一段と騒がしい。青山詠春は神鳴流剣士であり、魔のモノにとってはあまり好ましい存在ではないはずだったが、日本の話に乗っているうちにいつしか打ち解けていった。

悪くない。こんなのも悪くない。

エヴァンジェリンはそうも思うようになっていた。

ナギ・スプリングフィールドと行を共にするうちに、何時しか旧世界に、大陸を渡り海を越え、再び日本の地を踏む事となった。

麻帆良の地は日本における魔法使いの本拠地とも言える。明治の時代にはまだ小さな町だったが、それは今は巨大な都市となっているようだった。

さすがに麻帆良の地に悪名高いエヴァンジェリンが入る事は難しい。ナギとはしばし離れる事となるだろう。

ここ数ヶ月、練りに練って細部まで完全再現の、もはやオリジナルスペルと言っても差し支えないほどの幻術を用い、自らが大人になればこのようになるだろう姿に化ける。

前日に「驚かせてやる」とも言っておいた。約束の場所に赴き、歌劇じみた口調で誤魔化しながらも本音を混ぜる。ナギの血肉、心全てを我がモノとしたかった。

その芝居じみた台詞もまた面白いと思ったのか、当意即妙、ナギもまたそれに合わせ、ノリの良い事を言う。

演技のままに襲いかかり、捕縛の魔法を手に溜め解放しようとしながらも、エヴァンジェリンはナギが「美貌」と言ってくれた事のみが頭を占めていた。時間をかけて幻術を練った甲斐がある。

そんな興奮も長く続かなかった。

落とし穴にはまり、泣きたい気持ちになる。というか泣いた。いろいろ悲しゅうて泣いてしまった。

これはない。本当にない。有り得ない。

恐らくそれはエヴァンジェリンが「驚かせてやる」などと言った事で「よし俺も」などと対抗意識でも湧いたものだったのだろう。

幻術が解け、慌てるエヴァンジェリンに登校地獄というふざけた魔法をかけ……

光に生きてみろなどと言い残し、去っていったのだった。

小さな吸血鬼を麻帆良の一生徒として残し。

◇

高畑と瀬流彦は言葉を失っていた。

場面場面しか見ていないものの、６００年にもわたる記憶である。

その魔法から解放された後も時間の感覚が混乱し、二人して頭を振っていた。

やっと落ち着きを取り戻してからも高畑は高畑で何やらショックでも受けているらしく、口の中で「また王家……姫様とか……ナギさん妙なフェロモン出ているんじゃないのか」などと実はかなり際どい事言ってないかと、瀬流彦が思わず首を傾げるような事を呟いていた。

瀬流彦は瀬流彦で、どこか懐かしい気分にも浸っている。

（歴史で知ってはいましたが……血と鉄の時代はどこか似通ってきてしまうものですね、人の営みなどどこでも同じという事でしょうか。あの世界、懐かしいと思うには酷いものでしたがそれでも……）

そんな瀬流彦をどこか観察するような目で見ながらエヴァンジェリンは口を開いた。

「どうだ、６００年の記憶は重かろう。少しは私が恐ろしくなったか」

一拍の間の後、瀬流彦は鼻頭を掻き言った。

「いやその、大変申し上げにくいのですが、最後に持っていかれてしまってどうも……」

エヴァンジェリンはナギの馬鹿と繰り返しながら床をゴスゴスと小突いた。

しかし、と高畑はどこか困惑した様子で口を開いた。

「良かったのかい、僕らなんかに記憶を見せてしまって」

エヴァンジェリンはため息を一つ落とす。

「たわけ、ナギに見られるならともかく、お前らのような小僧っ子に見られても恥ずかしいようなものではないわ。それにじじいならまだしも、お前らでは私の記憶にある魔法の深奥などまず理解できんだろう。いささかの痛痒も感じぬさ」

とはいえ、とエヴァンジェリンはニヤリと笑みを見せた。

「外に漏れれば話は別だ。研究好きの魔法使いなら垂涎ものの知識も含まれていたからな。口外どころか記憶を見られる事すら出来ぬように魔法で縛っておいた。悪く思う

な」

いつの間に……と高畑は冷や汗を流す。

「しかし、解せん」

エヴァンジェリンは行儀悪くテーブルの上に座り足を組む。頬杖を付き瀬流彦を見下ろした。

「幾多の戦争、血に濡れた記憶だ。腐った死体の臭い、脈打つ臓物、文字通り人が人を喰らい合う事さえあった。そんなモノを見せられれば、今の時代、平和に生きているものには精神への攻撃とさえ言えるだろう。タカミチは場慣れしているから理解できるが……瀬流彦、貴様はなぜそう平然としていられる?」

「……あー、やだなァ、ほら表に出にくいだけです、怖くて震えてますよ」

瀬流彦はぷるぷると手を振るわせて見せるが、あまりにわざとらしかった。

「突っ込む気力も失せるわ、やめろ、まったく」

エヴァンジェリンはため息を吐いた。

ここで重荷に感じる素振りでもあれば、記憶を消すこともできた。学園長には監視役としては不適切とでも言って突っ返す事だって出来ただろう。

「……私の事情に学生を巻き込ませようてか、まったくあのじじいは本当に喰えん」

ぶすっとして口の中で呟いた。

しばしの沈黙を破り、瀬流彦は気になっていた事があったので率直に聞いてみた。
「ところで、サウザンドマスターはその後どうしたんです？」
空気が凍った。
やがて口を開いたのは高畑だった。
「ナギさんは……彼は三年前を境に行方をくらませているんだ。その後は……」
言いかけた高畑を手で止め、エヴァンジェリンは言った。
「あの馬鹿はな、卒業の時には来るなどと言っていてが結局来なかった。大方忘れていたのだろう、それは構わん、そんな奴だったしな」
そう言って虚脱感を滲ませため息を吐く。高畑を見て言った。
「タカミチ、私の前とはいぇ言葉を濁すな。奴は死んだのだろう。じじいからも聞いたさ」
その言葉に高畑は応えず、俯いて視線を逸らす。
「……ふん、まったくな……ナギの馬鹿め」
ぽつりと呟く。２人に背を向け、舞台上に静かに歩き、空を見上げたかと思うと飛び立った。
瀬流彦は思う。
記憶消去の魔法は勘弁願いたいが、背を向ける前に一瞬だけ見たあの泣き顔だけは忘

れておきたいものだと。

四話

あれは何だったのか。

意図は判らないでもない。瀬流彦はそう思いながらも考えあぐねていた。

記憶を見せる前に本人が言っていたのだ、戯れと八つ当たりであると。そして後に、言い加えるなら自らのプライドだとも。

「じじいはこう踏んだんだ。お前という存在を私に付ければ重しになると。私自身の持つ自尊心からして大きな動きは出来まいと」

当然面白くない。なまじ当たっているからこそ面白くない。関わればこうなるのだと見せつける事で、瀬流彦が自分から監視役などというものは辞退するように仕向けようとしたのだ、と。

そして腕を組み、偉そうにひとつ鼻で笑い、言い放った。

「お前も多分舐めてかかっているのだろう、が、まあいい。あれを見て恐れの色が出ないのは若さ故の蛮勇という奴か、それともお前の持つ『読めん所』か。どちらにせよ形としても警告はしたわけだし、好きにすればいいさ」

しかし瀬流彦の先輩であり、直接面倒を見て貰っている高畑・T・タカミチから言わ

せれば、それは本音ではないらしい。

「エヴァはそうそう判りやすい事は言わない。特にああいった時は絶対に内心を漏らすような事はしないよ。多分だけど、あれはエヴァ一流の曲がりくねった優しさみたいなものだろうな。勿論……ちょっと強引だったにしろ、警告の意味もあったのだろうけどね。記憶を見せるにしては戦闘の場面がやけに多かったと思わなかったかい？　僕らみたいな融通の利かないタイプは絡め手に弱い。戦術を知る事、知識そのものが身を守るのに重要になってくるんだ、正当な魔法使いでないだけに尚更、ね」

とも言う。そういう見方もあるのかと瀬流彦は感心した。

折々、高畑のスケジュールに合わせて「別荘」内でトレーニングをしている。

故郷でも鈍らない程度には体を動かしていたし、剣の使い方を身体に染み付ける程度には馴染ませていた。が、かつての……セルピコと呼ばれ、平時であっても常に死が近くに潜んでいる世界、あの時の感覚までは取り戻す事が出来ない。それは魔法を傍らに学びながらも平和な国に育った瀬流彦とすれば当たり前とも言えるものだっただろう。それで十分だと思っていた。

だが、その意識はエヴァンジェリンの記憶を見せつけられる事であっけなく崩され、嫌が応にもかつてを思い出してしまっていた。思い出したと言うと語弊があるのかもしれない。

あまりに現実的で生々しい血と鉄の臭い、散る火花、硝煙の臭い。
セルピコにとっては慣れた世界、瀬流彦にとっては慣れぬ世界。
何の情緒も感慨もなく、気付いたら感覚が切り替わっていた。
身体の基礎はすでに出来ている、以前と似たような動きも出来るだろう。ただこれまで身体に染みつかせていた守りばかりの型ではない、新たな動きを加え、反復練習により身体に染みつかせる。腱を斬り、急所を突くための最小限の動き。これまでの瀬流彦には必要の無かったもの。護衛をするだけだった身にも必要の無かったもの。
あの過酷な旅路の中で状況に合わせ、剣の振るい方もまた変わった。人ならともかく、それ以外のモノたちは頭を貫かれた程度で死んでくれるとは限らない。といってあの剣士のように巨剣を振るう膂力は持ち合わせていない。魔女から賜ったシルフェの剣がなければ早々に戦線離脱をしていた事だろう。
今はシルフェの剣の代わりに魔法というものがある、あの時、渦に取り込まれようとした時、最後まで共にいてくれた精霊達、彼等もまた共にいてくれる。
ただそれを以てしても、こちらの世界の魔法……特に魔法世界のでたらめな戦闘にはなかなかついて行けそうもなかった。
瀬流彦は剣を振る腕を止め、空を見上げため息を吐く。
「戦いを前提としているなんて……らしくないですねェホント」

ぼうっと思考をさまよわせ、何となく心当たりとおぼしきものに思い至った。
あらためて思い出してみれば自分は未だ16歳。血気に逸るのも道理かもしれない。
誰が見ているというわけでもないものの、何となく恥ずかしさに似たものを感じ、頬を掻いた。
記憶を見させてもらった事については、魔法に縛られ学園長に言う事はできない。どのみち言うつもりもなかったのでその事は伏せたのだが。
エヴァンジェリンが瀬流彦が監視役として付くことを認めた旨を報告すると、学園長は柔和に微笑み、そうかそうかとゆっくり茶をすすった。
(悪い人ではなさそうですが……何を考えているか判ったもんじゃないですね)
「で、文句は言っておらんかったかの?」
「……不満そうではありました」
「ふむ、まあご苦労じゃった。ところで」
『魔法を解くなら頷きなさい』
瀬流彦の脳裏に学園長の念話が響く。
「あー、いや、結構ですので」
首を振ると学園長は顎髭をゆっくり撫で、拗ねたように口を尖らせて言った。
「なんじゃい、だとすると隠し事か。ええのう若いもん同士で……」

「さすがに若いもん同士というにはちょっと」
「……そうじゃった、そうじゃった。考えてみればとんでもない婆さんじゃったわい」
と、本人に聞かれたら命は無いような事を言い、呵々と笑う。

◇

闇の福音の監視役……と言ってもその実体は、二日に一度訪れ、茶飲み話をする程度である。
さらに言えば、その茶を淹れるのは決まって瀬流彦であったりもした。お茶うけのお菓子などを用意する事もまた。
高畑も日本に居る間は決まって夕刻にここを訪れ「別荘」でみっちり鍛錬をしていく。
この数ヶ月というもの、エヴァンジェリンもまた緩やかに変化している事に瀬流彦は気付いていた。
皮肉やからかうような物言いが増え、日頃の学校生活への愚痴も多くなる。それは会った頃の、物憂げでどこか常に気力が無いような感じとは違い、どちらかというとエヴァンジェリンの記憶の中で見た彼女、その姿に近いものだった。少なくとも表向きにはそう見える。
（立ち直りかけている？）
不思議に思った。

……存外、あれは己を見直し立て直すための一連の儀式だったのかもしれない。ふとそんな考えが脳裏に浮かんだ、自分や高畑は本当の意味でついで……あるいはきっかけに過ぎなかったのではないかと。

当の吸血鬼様はN社が満を持して発売した最新のゲーム機で何やら遊んでいる。64ビットらしい。3Dが凄いらしい。コントローラーにかじり付いて熱中している姿は見た目通りの年齢にしか思えない。

瀬流彦は軽くため息を落とし、蒸らしたお茶の葉が撹拌されるようゆっくりお湯をティーポットに落とした。長い年月を生き抜いた吸血鬼の心中を推し量るのはとても難しいようだ。

気付いていたのはエヴァンジェリンの変化だけではない。

高畑もまた、あれ以来どこか様子がおかしかった。

エヴァンジェリンと話す時だけ、どこか後ろめたいような、含みがあるような、微妙なものがあるのだ。特にナギ・スプリングフィールドの事に関しては妙な遠慮がある。そんな印象を持っていた。

あるいは……高畑もまた見せられた記憶の中で何か思う事でもあったのかもしれない。

高畑・T・タカミチ、先輩であるとはいえ、彼もまだ成長途中の若者である事は間違

いなかったのだから。

知れば知るほど、厄介だと思う。

闇の福音という名前、その存在が内包している政治的な問題は根深く、そして執拗だった。

賞金はすでに取り下げられているものの、その知名度は魔法世界トップクラスと言ってもよく、もし討伐さえ成功したならばその者の名声は莫大なものとなる。さらに犯人の判らない犯罪、あるいは政治的に隠されてしまった犯罪、そういった類の――罪のなすりつけのようなものも始終行われており、未だに恨むものは後を絶たない。

言ってみれば概念的な「悪」の象徴として祭り上げられており、エヴァンジェリンが時折思い出したように自らを「悪」だと言うのもそんなところを含めて言っているのかもしれない。偽悪的、あるいはそんなモノさえ飲み干してみせるという気概であるのかもしれないが。

深度の深い情報と言えど、完全に情報を隠すという事は不可能だ。散発的にだが、エヴァンジェリンを標的とした襲撃はあった。中には背後に組織めいたものが見える襲撃者もまた居たりする。

闇の福音を擁するという事はそんな厄介事も抱え込むという事であり、一部の魔法先生が苦虫を噛みつぶし、危惧してしまうのもまた無理のない事だっただろう。そのリス

クは何ら関係のない一般生徒にまで飛び火する可能性だってあったのだから。

ナギ・スプリングフィールド、英雄が健在の頃は良かった。闇の福音すら超える勇名であり、魔法社会の中では絶対的な正義と同一視されていると言ってもよい。「マギステル・マギ」とはそういう存在なのだ。周囲の魔法先生もまた一致団結の心構えで協力する事もできた。

しかしその存在はもう無い。高畑・T・タカミチがその背中を追いかけるように今現在破竹の勢いで名を上げているが、大戦の英雄のようにはいかない。

三年間。

麻帆良の長である近衛近右衛門は、失われたナギ・スプリングフィールドの名声の代わりに策を用い、謀を以て闇の福音を擁する状態を維持してきた。高畑・T・タカミチの成長を待った。麻帆良よりさらに新しい魔法界の拠点とも言えるアメリカのジョンソン魔法学校とも関わりを深め、味方にしていった。その虚実定かならない動きが西の者たちにとって「近衛近右衛門、信ずるに足らず」などと言う印象になってしまったのは片手落ちだったのかもしれないが、あまりに不安定な状況下、責めるのもまた酷だったかもしれない。

秋口にもさしかかった頃、高畑から提出された瀬流彦の魔法生徒としての定期報告書を読み、学園長は独りごちた。

「本当に助かったわい……あの手はさすがにのう」
次善の策はあった、だがそれは学園長を主、エヴァンジェリンを従とした仮契約の締結。表向きだけでも良い。自ら手綱を握る形にしておけば、さらにあと数年は時間が稼げると踏んでいた。
しかしそれは、学園長が学生を従者としてしまうなどの教育者としての倫理的な問題もあったし、何より当のエヴァンジェリンの意に沿う事ではなかっただろう。何とか丸め込むための話も用意はしてあったものの、問題点は多かった。
そんな折に、瓢箪から駒が飛び出すような形で瀬流彦という存在が明るみに出てきたのである。
魔法学校などで育っていない分、彼は必要以上に闇の福音という名前を恐れない。さらに言えば彼の性格によるものか、エヴァンジェリンもまた毒気を抜かれてしまっているようだった。
目論見通り、瀬流彦は魔法使いとしては異端であり特殊でもあった。いやそうでなくてはなるまい。学園長は校舎に巡らせた結界に弾かれうろうろしていた風の妖精を思い出す。
「よい具合にまとまったようじゃが……そうじゃの、あと一手が必要か」
普通の魔法を扱えるだけの生徒であるなら、別の手段を用いるつもりだった。しかし

数ヶ月間瀬流彦を高畑に任せ、上がってくる報告を読むともう一つの決断をするには十分な要素を持っていた。

戦闘者であっても戦士ではない。知性は高くても研究者ではない。魔法を使えても魔法使いではない。掴み所が無く、どこか計りきれないところがある。そんな前置きがある報告書。

高畑は高畑の計りで人を計るしかない。少年のうちより過酷な経験をしたからか、その視野は同世代よりずばぬけて広い。それだけにまた、どこかドライに自分も含めて「無理なものは無理」と規定してしまうところがある。それだけに初の教え子とも言うべき瀬流彦に対してもどこか一歩を引いた視点で見ているようだった。

「……じゃがそれだけではいかんのだがのう」

本来なら図書館島の地下に居る彼の方が相性は良いのだろう。古くから伝わる知識の伝授という意味でもある意味エヴァンジェリンより遙かに適している。

だがあえて、高畑に瀬流彦を付けたその意味。自分とはまるでタイプの違う者を教えるという経験を通し、高畑にはもう一枚、麻帆良所属の魔法使いとしてではなく、人間としての成長をしてほしい。そんな思いもあった。無論、目論見は一様ではないが。

学園長にとっては、高畑・T・タカミチもまた教え導く生徒である事は変わらない。

◇

ある日瀬流彦は学園長に呼び出され、とんでも無い話を聞かされた。
翌週、エヴァンジェリン――闇の福音の首を狙い、襲って来る魔法使いが来るというのだ。それは召喚の魔法を得意としており、下手をすると一般生徒にまで被害が出かねない、それほど無秩序な攻撃を仕掛けてくるものらしい。
普段、警備にも当たっている魔法先生達は本国への出向により数を少なくしており、間隙を突かれた形で襲って来る……
「という予定じゃ」
学園長は飄々とした様子で言った。
瀬流彦はこめかみに指を当て、ぐりぐりと押す。
突然呼び出されたと思えば、どういう意図があってそんな事を言うのか。
無言でため息を吐く瀬流彦をちらりと眺めやり、学園長は茶を一口含み続けた。
「そして当日、警備の魔法先生達は応戦するものの一般人への被害を防ぐ事に手一杯で、受け持っている一画を突破される。弱体化しておる闇の福音では抗し得ず、タカミチ君も間に合わん。そこを瀬流彦君、君が派手に蹴散らすというわけじゃ」
何となく読めてきたものの、瀬流彦は呆れたようにもう一つため息を漏らし言った。
「なんですかそれは……」
「何、箔付けじゃよ箔付け。闇の福音の抑えを任されるほどの者、学生ではあるが何かの

『理由』があると思わせるためじゃ。この際、邪推されればされるほどよろしい」
「マクダウェルさんが呆れてましたよ、学園長は策を弄しすぎると」
学園長はフォフォフォと愉快げに笑った。
「何の何の、今はまだ策を用いねばならん時期じゃよ、やっと伸びてきた新芽も摘まれかねんからのう。大戦からそう時間も経っとらん、本国の殺伐さはこちらとは比べものにもなるまいて」
「本国ですか……というと、もしかして」
瀬流彦は頬を掻いた。
「うむ、察したようじゃな。この事を少々寝かせ、メガロメセンブリアで噂にさせるには程良い期間じゃ。冬休みになったらちょっとした旅行などどうかの？　行き先は君のお父さんの故郷じゃ。名目も立つ」
「……一介の生徒を悪巧みの舞台に乗せる時はせめて、役者に配役をばらさないものです」
「何、おぬしなら大丈夫じゃろ。組織の長なんてもんは人を見るのが仕事のようなものだからの、報告書にもあるが本当に高校生とは思えんよ。さらにもう一つの意味にも気付いておるのではないか？　ちなみに言えばもう一枚裏もある。こう言えば概ね見当は付くじゃろうな」

何の事やら、と瀬流彦はとぼけて見せる。

……とはいえ薄々察しはついていた。いや、直感的に思いついた事だったのかもしれない。

校舎を出、待ちくたびれた使い魔を肩に乗せる。

「権力争いですか」

脈絡もなくぽつりと出した言葉に肩に乗っている妖精が不思議そうな顔を向ける。

恐らくその召喚を得意とする魔法使いとやらは、捕まれば背後に居る誰かの名前を吐く。そしてそれを裏付けるだけの証拠は既に用意されているはず。出された名前は、数ヶ月前に闇の福音を引き合いに出し、政敵排除を目論んだという議員の名前なのだろう。

学園長とメガロメセンブリアの議員の一派は結びつきがあり、今回の舞台は両者によって整えられたものなのだろうとも。さらにその先にも思考は回りそうにもなったが、これは止めた。タチの悪い事ばかり浮かんできそうになったのだ。ヴァンディミオンでの日々はそんな策謀をそれこそ日常茶飯事のように――

『ピコリン顔が暗いよ!』

空気を読まないプーカはどこからか拾ってきたドングリを瀬流彦の鼻の穴に刺した。

ふんが、と声にならない瀬流彦のあまりの間抜け面に大声で笑い転げる。

（何ともまあ……）

ふん、と思いのほか奥まで行ってしまったドングリを鼻息で押し出しながら瀬流彦は脱力した。

舞台の上で役者は演ずる。

それはどちらかというと深刻な色合いをしているものの、本質は喜劇だったのだろう。

瀬流彦が意外に思ったのは、召喚された悪魔が思ったよりも強力だったこと。

もっともそれは標的である彼女の実力を考慮しての事だったのかもしれないし、あるいは麻帆良とその同盟者、その関わりもまた緊張感あるものだったという可能性もある。

どのみち舞台上に上げられた役者でしかない瀬流彦には伺い知れない事だった。

そして――

「仕込みの襲撃……とは、本ッ当ーに、舐められたものだな私も！」

どの時点から気付いたのかは判らない、あるいは薄々奇妙なものを感じ取り、瀬流彦が駆けつけた事で確信に変わったのかもしれない。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは少々……安易な表現をするならば、キレ気味であった。

「瀬流彦！」
ギロリと漫画的な効果音が見えてしまうほどの迫力で吸血鬼は睨んだ。
睨まれた瀬流彦は冷や汗を一筋流すと、あっけなく白旗を上げる。
「……学園長です」
（骨は拾います。どうか安らかに）
祈る神はいないものの、せめてもと学園長のいる方向に向かって拝み、それを隙と見て襲って来る悪魔の攻撃を躱し、至近からの一撃で始末した。
翌日、珍しく学園長が休んでいたのは言うまでもない。さらに翌日にはいつもどおりの姿を見せており、何かあったのかもまた謎のままだった。
◇
もしかしたらこちらにはこちらの宗教があり、礼式があるのかもしれない。
そんな事を思いながら、瀬流彦は一つの墓の前に日本でよくあるように手を合わせ拝んでいた。
ウィル・フェネグリーク。名前しか記憶にない父の墓。メガメロセンブリアの郊外にある公共墓地、13年前の大戦の折散った者達と共に葬られていた。
瀬流彦の心情は複雑なものがある。
かつての自分の父は父とは到底思えなかった。今生の父は物心つく前に亡くなった。

父との縁が薄い。

少し寂しい思いもあるが、同時に安心する自分もいる。もし父が生きていたとしたら今の自分は全く違うものになっていたのだろうか。

黙祷を終え、高畑との待ち合わせ場所に行く。彼は彼で祈りを捧げる者達が多いようだった。合流場所に指定された休憩所には誰の姿も見えない。

ベンチに腰を下ろす。場の空気を読んだのか、静かにしている妖精の頭を撫でた。

麻帆良にも雪が一度ちらつくことがあった。

冬が訪れ、年末年始の忙しさと冬休みの計画に高校生達は沸き立つ。そんな中、瀬流彦は高畑と共に長期の休みの一日目から空の旅を経てウェールズへ、翌日には丁度ゲートポートが開く時期に当たっていたらしく、魔法世界の地を踏んでいた。

訪れる名目は、亡くなった父の故郷を訪れるため。内実は、いつかも言っていた本国の政治家、麻帆良側と協力体制にある議員への面通しの為だった。

名目とはいえ、おろそかにするわけでもない。最初の1日は墓に花を供え、故郷であるメガロメセンブリア内にある鄙びた村を巡る。母に聞いた通り係累はもう無く、かつて父と母が住んでいたらしい家には別の住人が住んでいた。村の年寄りに父の話を聞く事ができたものの、やはり瀬流彦に実感は湧かない。

（寂しい……のかもしれないですねこれは）

わだかまるような諦念のような、不思議な感覚を抱き、村を後にした。
取り扱う情報の性質からも公には出来ない事だったのだろう。
若い身ながら元老員の議員であるクルト・ゲーデルに招かれたのはひっそりとした裏路地のパブだった。
高畑・T・タカミチとクルト・ゲーデル、２人は旧知の仲であるらしく、瀬流彦もまた高畑から軽い説明くらいは受けている。
紹介される形で瀬流彦も挨拶し、２、３の当たり障りの無い問答の後、クルト・ゲーデルは突然にやりと、極悪とも言ってもよい笑みを浮かべ言った。
「君はタカミチとは違い、腹芸にもなかなか長けているようだ。どうかな、共にこのメガロメセンブリアを、いやゆくゆくはメセンブリーナ連合を我がモノにする、そんな夢を追ってみないか？」
まさか本気で言ってるわけではないだろう。瀬流彦が高畑の顔を見れば「また始まった……」とでも言いたげに呆れた様子を見せている。どうもこれは悪癖とでも言うべきものらしい。
のらりくらりと躱していると飽きたのか「才覚を眠らせるのは罪だよ君」とつまらなさそうに呟き、エールをあおる。
しばしの歓談の後、話は学園長とこのクルト・ゲーデルの一派が共謀した麻帆良への

襲撃についての事となった。
「……ではタカミチの奴は知らされては」
「ああ、そうだよ悪いかクルト」
軽く酔いでも回ったのか旧知の友が居るからなのか、高畑は普段は見せない、どこか子供っぽい不満げな顔をする。
「いいや、お前は大根役者だしな、学園長が知らせなかったのも当然だろう」
「むう……」
高畑は言い返せない様子で、焼き付けられたソーセージにフォークを立て誤魔化すように食べ始めた。
クルト・ゲーデルはそんな様子をどこか愉快そうに見ていたが、ふと瀬流彦に視線を戻した。
「そういえば――」
何気ない仕草。
瞬時に溢れた殺意の気。
凄まじい速さで気を纏ったフォークが瀬流彦の首筋目がけて突き出された。
「……物騒な冗談です」
クルト・ゲーデルの手にあるフォークは瀬流彦の首に触れるか触れないかの所で止

まっていた。それをゆっくり離し、何事も無かったかのようににこやかな笑みを浮かべる。

「いや、すまないね。あの折は私の予想より遙かに学園側の被害が小さかった。近衛学園長が何か手を入れたのかとも思ったが、うん。なるほど」

そんな事を言いながら興味深げな目で瀬流彦を見た。

「これでもね、京都神鳴流を囓っているんだ。寸止めしたとはいえ相応の力を込めた一撃。しかし、微動だにしないとはどういう事かな、まさか硬直していたなんて事はないだろう。いや、硬直と言えど微かに動きはあるものだ。殺意は本物に感じたはず、感じられねば僕の立つ瀬が無い。剣士の看板を下ろさざるを得ないというものだよ。それに君の目は観察者の目だった……ならば奥の手があるのだろう。あの状態からでも抜け出せる一手が」

「悪趣味過ぎるぞクルト」

ごん、という重いものがぶつかるような音と共に言葉は不意に途切れた。

「……ツッコミに居合い拳って大丈夫ですか？」

「ああ、こいつは丈夫だからね」

「大丈夫じゃない、舌噛んだろうが……」

おお、と瀬流彦は驚きを口にする。加減はしてあるとはいえ、高畑の居合い拳がアッ

パー気味に顎を打ったはずなのにピンピンしていた。
再びエールを飲み「しみる」と顔をしかめ、おもむろに瀬流彦を見て口を開いた。
「麻帆良という組織、近衛学園長という長にとって、タカミチが太刀とするなら、さしずめ君は懐刀だな」
訝しげな顔になる高畑に、クルト・ゲーデルは目を向け「お前の苦手な話さ」と小さく笑う。
「少なくとも議員である私はそう判断し、扱う。この際年齢や学生である事などは関係ない。懐刀は抜かない事に意味がある、懐中にある切り札、そう思わせる事が役割というものだ」
だが、と瀬流彦を見てにやりと笑った。
「だが、切り札が常に懐にあるとは限らない。刀によっては思わぬところで振るわれる事もまたある。なるほど面白い。近衛学園長はこれまでタカミチという大太刀、そして頭の堅い取り巻き、敵味方定かならない者達しか持ち得なかった。君はさぞかし便利に使われる事になるのではないかな」
見定めはこれで終いさ、後は普通に飲もうか。などと腹の底の読めない若手議員はぬけぬけと言い、クックックと、それはそれは悪役のように笑うのだった。
◇

瀬流彦が魔法世界での滞在を終え、旧世界に戻った後、日程に余裕があったので、丸1日ほどウェールズで観光に費やす事となった。

高畑は古い友人と会って来るらしく、瀬流彦とは別行動をとっている。本来、高校生をただ1人で単独行動させるというのは引率役としては失格なのだろうが、瀬流彦の年齢には見合わぬ落ち着いた様子、英語もかなり話す事が出来、自衛のためなら十分すぎるほどの直接的な力もある。心配はないと踏んだのだろう。

『駄目だったよ、わとそんくん、ぱたりんの後追ってったけど街道の途中で足跡が途切れてしまっているね』

「何でも呼び名にりん付ければ良いってもんでもないんですよ」

『じゃあタカティミー』

「……ノーコメントで」

妖精にはイングランドとウェールズの違いなどはどうでも良い事なのだろう。

（ベーカー街はロンドンなんですけどね）

有名すぎる探偵の格好に衣装を変えた使い魔を見てぼんやりと思った。

現在居る場所はカーディフ、ウェールズの首都である。

別行動をとった高畑を好奇心で妖精が追っていったようだが、小さな村が見えたあたりで見失ってしまったらしい。

何かありそうだな、などと小さな疑問が浮かびながらも、瀬流彦は観光案内所で貰ったパンフレットを開き、まずは有名所へと向かう。

「……これがカーディフ城ですか。さすがに昔の形は留めてないようですが、名残はかなり残ってますね」

懐かしむだろうかとも思い、写真を撮る。

エヴァンジェリンの記憶の中、旅の最中にちらりと出てきたカーディフ中心部にある古城。砦の姿はあまり変わっていないようだった。イングランド王ウィリアム一世の長子、弟により目を潰されたノルマンディー公が死ぬまで幽閉された砦……とガイドブックにはある。

分厚く荒々しいその様相は、冬の風が吹きすさぶ事もあり、どこか寒々しいものを感じた。

なにより、その戦いを前提とした作りの砦は否応もなく昔を思い出してしまう。そんな自分に対し、どこかおかしみのようなものさえも……

ふっと力を抜くように息を吐く。気温は日本と同じくらいだというのに、雨が多いせいかどこか湿気をはらみ、身を切るような寒さは感じない。

１９世紀に建てられたというゴシック様式の建物も外から見て回る。安いチケットで入場したので、中までは見ることが出来ないのだった。こんな時期というのに観光客

はそう少ないわけではなく、石造りの城門を子供連れの親などもちらほら通っていた。
「さて、そろそろ行きますか」
『え、もう?』
プーカが意外そうな声を上げ、瀬流彦の肩に座る。
「有名所くらいは抑えておきたいんですよ。次は国立博物館です」
こういうのが好きな者には怒られてしまう。そんな見方をしている。
我ながらどうかとも思いながら観光を続けた。一階は博物館、二階は美術館になっておりどちらも良質の展示品が並んでいる。瀬流彦は良し悪しがわかるほどの美的センスを持ち合わせていない。どこに何があるか、頭に目録を作りながら見て回ったようなものだった。
その後も有名所をちょこちょこと回った、麻帆良では時折感覚の鋭い人もいるようで、プーカがいると違和感を感じる人もいたのだが、ここに来てからはまったくそんな事はない。本当に誰にも気付かれない。普段とは変わらないように見せながら、この妖精もちょっとばかり寂しい様子だった。
ウェールズから日本への直通便は無い。ロンドンを経由して日本へ。
長い旅を終え、麻帆良に着いた。ひとまず荷物だけ置き、旅の埃をはたく間もなく帰着の報告へ行く。

二人が学園長室に入ると、学園長はエヴァンジェリン相手に将棋をしているようだった。休みの間は家にでも篭もっているかと思っていたので、瀬流彦は少々意外に思う。
「なに、色々と企んでくれた学園長に少しばかり意趣返しをな。んむ、これで詰みだ。じじい、確か限定醸造の古酒を持っていただろう、アレで良いぞ」
「なっ……何でそれも知っておるんじゃ？　あれは勘弁してくれんかのう、年間３０本しか造られん珍しいものなんじゃ」
「ほほう、私にそれを言うという事はさらに隠しているものがありそうだな」
やいのやいのと言い合い、最後には学園長が折れた。悲しげな表情になり何やらサラサラと紙に書いてエヴァンジェリンに渡す。
さて、と気分を切り替えるように一言呟き、二人に向き合う。
ねぎらいの言葉をかけ、高畑より報告書を受け取る。うむ、と頷いた学園長は瀬流彦に言った。
「さて瀬流彦君、長旅ご苦労じゃった。そしてこれはお願いなんじゃが……このごうつくばりの吸血鬼を家に送り届けてはくれんかの、冬期休暇で暇なのは判るが、わしの秘蔵のコレクションがこれ以上減らされるのは勘弁願いたいのじゃよ」
「うむ、昨日は良い魔法具をぶんどってやった。東洋のものはなかなか手に入りにくいから良い収穫だ。しかしじじい、碁もちょっとアレだったが将棋は輪をかけて弱いな」

エヴァンジェリンはニヤニヤと笑いながらいたぶるように言う。
学園長は参ったようにため息を吐き、自らの肩を揉んだ。
「じじぃ、じじぃと言うなら労ってほしいもんじゃわ」
「なぁに、私の事をババァ呼ばわりするじじぃには丁度よいだろう？」
学園長はいつかの言葉を思い出し、思わず瀬流彦に誰何の目を向けた。
無論、瀬流彦はそれを馬鹿正直にエヴァンジェリンに伝えた覚えはない。違う、違うと顔の前で手を振る。
「ほう、やはりそんな事を言っていたか」
空気が冷えた。
ぎぎと首から音がしそうなくらいにぎこちなく学園長は幼い吸血鬼に向き直る。
――余程命が要らぬとみえる。
そんな言葉が伝わってきそうな存在がそこにあった。
蛇に睨まれた蛙のごとき、学園長はそんな思いを抱いた。大きな額から汗が流れる。
「ふん、まあいい。事実だしな」
圧迫感は数秒で消え去った。ニヤリと笑って見せる。冗談だったらしい。
「いやはや、何とも老体には応える威圧じゃわい」
「女に年齢の話というものは常にタブーさ、じじぃになってようやく学べたな」

エヴァンジェリンはそんな軽口を叩き、傲然とした口ぶりとは反して、丁寧に将棋の駒を木箱にしまう。
「さて瀬流彦、行くぞ。駅前の酒屋にこれを預けてあるらしい。お前は荷物持ちだ」
先程学園長が何やら書いた紙をぴらぴらと振り、学園長室をさっさと出て行く。瀬流彦は一つ頬を掻き、小さくため息を漏らした。学園長に挨拶し横暴な吸血鬼の後を追う。
エヴァンジェリンはのんびり歩いているようだった、廊下ですぐに追いつく。
冬休みで生徒の姿は無い、廊下に漂う静かな空気を壊すのが忍びないかのように、しばらく無言で歩いていた。
日が傾くのも早い。時間は午後三時を少し回ったほどだったが、既に夕焼けの茜色に廊下は彩られている。
ふ、と何気ない様子でエヴァンジェリンが言った。
「妙に感じたか?」
「……僕にもエヴァンジェリンさんにも言えない事なんてのは結構あるんじゃないでしょうか」
「だろうな、タカミチが修行に来た時にでも口を割らせてみるか……」
にぃと笑い口の端を上げる。満月が近づき尖った犬歯が見えた。

（また物騒な事を……）

と瀬流彦は思い、どこか魔法世界で会ったクルト・ゲーデルと被るものを覚えた。ひねくれ具合……比べるものでもないのだろうが、いい勝負かもしれない。

ふと窓の外を見ると輝くものが舞っていた。

「雪ですか」

積もりそうな雪ではない。多分風に吹かれてきたものだろう。エヴァンジェリンも外に目をやり、やれやれと呟く。

「暑いよりはマシだが、今の身には寒さもちょっと厳しいな。じじいの秘蔵酒、生原酒だけに冷やが一番とも思うが……人肌程度に燗をして飲むとしようか。あては白身魚の煮付けがいいな、薄味でさっと煮付けたものを頼む」

「……えーと、一応地球半周する旅から帰ったばかりなんですが」

ロンドンから東京までの直通便でも半日乗りっぱなしなのだ。動くのとはまた違う疲れがあった。だが、この小さな暴君はそんな事はまったく斟酌する必要はないと考えているようで。

「文句は一人前になってから言え」

「……はあ」

条件反射で従ってしまうのはどういう事か。

瀬流彦は人生に対して深淵な思いを抱かずにはいられなかった。

◇

紆余曲折の日々だったと言わざるを得ない。

あの時、鬼に襲われていた吸血鬼をつい助けたりしなければ、こんな風にはなっていなかったのだろう。

もしかしたら魔法を使える事さえ忘れ、何でもないただの一般人として生きる道もあったのかもしれない。

瀬流彦は何となくそんな事を思い、それはない、とも考え直した。

精霊との親和性が高いゆえか、あるいはかつての記憶のためか。あまりに力を振るう事への忌避感が薄い。無論それは好戦的などとは程遠いものだったが、必要になれば躊躇する事なく使える力は使う。使ってしまえる。はたしてそれは一般的と言って良い感覚なのかどうか。

もしあの時エヴァンジェリンを助けるために力を振るわなかったとしても、魔法関連に関わる事は時間の問題だったのではないか、そんな風にも思ってしまうのだった。

高校生活はやはりクラスメイトとは微妙な距離感を抱いたまま終わった。勿論ある程度までは親しくなった者もいる、ただやはり彼等に言わせれば瀬流彦というクラスメイトはどこか「深く付き合いにくい」相手だった。

知識は幅広く、スポーツの成績も良い。困った時に相談すればまず良い知恵を出してくれる。頼めば何かと気軽に動いてもくれる。

そのくせ、何かに対する執着も見せず、弱音や本音というものを表に出さない。見た目もまた、どこかぽやぽやとした坊ちゃん然としていながら、根本的な部分で雰囲気が違ったりする。

掴み所が無い、とはこの事だろう。

クラスの中に浮いてもいない、ただ溶け込めない。結局卒業するまでそんな調子だった。

早春、桜はまだ蕾も小さいが、木々は色づき、若い葉が凄まじいエネルギーで一生懸命に伸びている。

瀬流彦は卒業証書を収めた筒でぽん、ぽんと肩を叩いた。

季節柄、使い魔はまたぞろ「良い気分」になっているのか、空でふわふわと踊っている。

ぽんと、意味もなく筒で頭を打ち、学生寮に向かった。

寮内に据え付けの電話で母に連絡をする。つつがなく卒業できた事。形式的なものかもしれないが、報告はしておかねば……と思ったのだ。

母は卒業式に出席したがった。止めたのは瀬流彦である。さすがに距離がありすぎ

るし、魔法関連と関わっている事は言ってあるとしても、エヴァンジェリン――闇の福音との関わり。それに麻帆良とメガロメセンブリアの駆け引きのゲーム、その盤面に上げられた形になっている現状は知らせていない。そんな事で心配してほしくなかったという気持ちがあった。

進路は麻帆良国際大学教育学部である。

エスカレーター式とはさすがに言うことはできないが、おそらく他の受験生と比べれば大学に上がるのは楽をしたのかもしれない。ネットで情報を漁っているとそんな事を思わないでもない。

教育学部に入ったのはそんな強い動機ではなかった。強いて言うならば、高校時のクラスメイト達、小さな事にも奔走し、狭い世界ながら何かに希望を燃やし、熱中する。間近で見続けていたそんな姿が、ひどく眩しく映ったからかもしれない。

おぼろげながらも、将来というものは見えてきている。

それだけでもかつての瀬流彦からすれば大幅な進歩と言えるだろう。安穏と将来の事など考えている事なんて出来ない、どこかそんな感覚を引きずったままであったのだから。

麻帆良とメガロメセンブリアの関係については、現在は安定している。それには瀬流彦も一役買ったものだったが、何よりも高畑・T・タカミチの存在が大きくなっていた。

魔法世界より帰り少々経った頃、何かがあったらしい。瀬流彦は何も聞かされなかったし、聞くような雰囲気でもなかったのだが……一ヶ月ほど学園長と高畑が暗い顔をしていたのを覚えている。元より並外れた努力家であった高畑がさらに鬼気迫る勢いで自己鍛錬を始めたのはその時からだったかもしれない。

勿論厳しく鍛えれば良いというわけではない。体を壊し、本末転倒になってしまう例などざらにある。実際、途中で何度か再起不能になりかけた。それでもなお立ち上がり、一回りも二回りも大きくなっていったのは、周囲の助けもさることながら、本人の決して諦めない根気があったのだろう。

正直、その一個人としての楽しみすら捨て去ってしまっているような高畑の変容には、瀬流彦も、またエヴァンジェリンも首を傾げざるをえない。

ただ成果は出た。

「ようやく無音拳と呼んでも良い、そんな技ができるようになってきたよ」

少し含羞のこもった笑みでそんな事をこぼしたのはいつの事だったろうか。

ここ一年の間で、魔法社会の中でも高畑は急速に名前を上げていた。魔法使い達で構成されているＮＧＯ団体「悠久の風」の中でも実力は一つ抜きんでた存在と見られている。大学卒業のための必要単位分はどうにかして取ったらしく、瀬流彦が大学に進学すると同時に高畑は卒業する形になるようだ。その後は麻帆良で教職に就く事が内々に

決まっているとのこと。

火種として燻っている形の闇の福音の件についても、時折どこから嗅ぎつけたのか名を上げようなどという者が麻帆良の警備をくぐり抜けてきた事もあるが、頻繁では無い。ある程度落ち着いたと見て良いようだ。

国内での西の勢力との関係はあまり良いものではなかったが、それこそ終息させるには時間が必要となるのだろう。急激に終息させては歪みもまた大きい、それに西側にはかつての魔法世界の大戦に「巻き込まれた」という意識もまた強く、学園長は時間をかけ、緩やかな形で互いの矛を収めさせる腹づもりのようだった。

ひっくるめて見れば段々状況は落ち着いてきていると言っても良い。

名目上、瀬流彦が監視役となっている真祖の吸血鬼、エヴァンジェリンもまたこの頃はすっかり調子を取り戻してきたようだった。少なくとも、周囲にそう思わせる程には調子を取り戻してきていると言えるだろう。この頃は登校地獄の呪いをどうにかするために研究にも取りかかっている。ナギ・スプリングフィールドの喪失感から立ち直ると、今度はがんじがらめに縛られている現状にあらためて不満を感じてきたものらしい。

ちなみに、その事、解呪の研究を始めた事については高畑も瀬流彦も知っている。学園長も知っているかもしれない。エヴァンジェリンは隠そうともしなかった。

「無理矢理解く方法ならある、だがやらん。それをじじいも知っているからな、何も言わんさ」

とのことらしい。

何かの図式をノートに書き終え、エヴァンジェリンは自分の肩を叩いた。

「手頃な方法、そうだな……ナギの血がカップ一杯もあれば簡単なのだが、そうもいかんか……」

「……手頃なんですかそれ？」

定期訪問日だった。従者めいた事が板についてしまっている瀬流彦は紅茶を淹れ、頃合いを見計らって出す、カップを差し出しながらつい口も出てしまった。

エヴァンジェリンはペンをくるりと回し、空いている手で紅茶を受け取り、一口含んだ。うむ、と小さく呟きながら言う。

「半ば魔法生物である私は吸血した際、対象者の魔力と混じった状態になる。呪いの精霊への命令権を持つものと認識されれば解くのは簡単だ。まあ私にしか出来ない芸当だろうが」

どこか遠い目をした。右手に持ったペンを無意識の癖のように指の間でくるくる回す。

「……ま、望むべくもない、正面から切り崩すさ」

どこか空虚なものを漂わせ、次に、そんな自分に気付き、誤魔化すように小憎らしい笑みを浮かべる。

瀬流彦は早春の空気に大きく息を吐き出した。

なべて世は事も無し、頭を空っぽにするとまず浮かんできた言葉。こんな時にも神に関する詩句の一節が浮いてくるとはどういう事だろう。

ただ、その感慨はごく一部の人間以外は共感し得ない感慨だったかもしれない。かつて集会の時に紹介された麻帆良で同期の魔法生徒などは目を剥いて「どこがだ！」などと怒鳴り返してきそうでもある。

何とも言えないものを感じて頬を掻いた。詩句の前部分を浮かべ、空を見上げ、小さく呟いた。

「神は空に知ろしめし」

神とは何なのか。

あれほど神の手先と自負するものたちとも触れ、あれほど世に有るべからざるものたちとも触れ、一度は転生者の末路である巨大な渦、地獄とも呼ばれるものにも触れた。

それすら神の一端。海面にある小さなうねり。

（あの小さな魔女さんなら答えを持ち得ていたのでしょうか）

そんな事も思う。

持ち得ないだろう。
同時にそうも思う。
「私は」
と言いかけ、かつての自分の自称に戻っている事に気付く。苦笑いを浮かべた。
瀬流彦はセルピコであってそうではない。当たり前のことを忘れそうになっていて、またそれに違和感も感じなかった。
「本当にふらふらしてますね」
それで良いのだろう、同時にそんな声も自らの内から聞こえた。

五話

街灯に照らされた木の葉がどこか気怠げに舞い落ちている。そよかぜに揺られ、右に左にふらふらとしながらゆっくりと。

秋も深まり、紅く、あるいは黄にも染まった枯れ葉が目立つようになった。北からの冷たい風が吹き抜け、地面に落ちかけた葉を巻き上げ運んで行く。服を突き抜けるような寒風に瀬流彦は一つ体を震わせた。

「とと……さすがに涼しくなってきましたね」

独りごち、日も暮れ、とっぷりと暗くなった商店街を歩く。

返答はない。使い魔の妖精は気紛れだ。今頃はどこか興味と好奇心のままに遊んでいるのだろう。

商店街とはいえ、時間が時間、それに急にきた寒気もあり、人影は少ない。

瀬流彦は慣れた足取りで小さな文房具屋の裏路地に入り、さらに数度ほど建物の間にできた小さな交差路を決まった順序で曲がる。突き当たりの壁に指を押しつけ何事か呟くと、ただの汚い壁だったそこが木製の扉に変わる。

扉を開けると、きい、とわずかに軋む音がした。

軽快なジャズが漏れる。

「ほう、いらっしゃい」

初老の、上品な口髭を蓄えたマスターが声をかけてくれた。

既にカウンター席に陣取っていた高畑・T・タカミチがグラスを持ち上げ、挨拶の代わりとする。

一般人は迷ってしまい、たどり着く事の出来ないバー「a―ｄｏｗｎ　a―ｄｏｗｎ」ネーミングはマスターの趣味らしい。悲劇の姫君の絵もまた店内に飾られている。魔法関係者のよく集まる場所で、マスターは引退した元麻帆良所属の魔法使いでもあった。内部には結界も張られ、多少派手な事があってもびくともしない。勿論声が漏れる心配などはなく、魔法関係の事を話すにもまったく遠慮がいらなかった。

アールデコ調の装飾で統一された店内は古めかしく、どこか新しい。マスターの趣味によるものか、その日はグレン・ミラーの真珠の首飾が店内に流れている、瀬流彦には知るよしもなかったが。

高畑の隣に座り、とりあえず「同じモノを」と芸のないオーダーをした。

「ボウモアのストレート、よろしいかな？」

「……水割りでお願いします」

瀬流彦はへたれた。高畑がグラスを揺らし言う。

「ストレートが美味しいよ、きつかったらチェイサーで割ればいい」
「あなたと一緒にしないで下さい。最初から割ってしまう事になるので野暮です、誰もが鉄壁の肝臓持ちと思わないでくださいよ」
ぼやき、次いでチーズの盛り合わせでもお願いしますとマスターに頼む。
出された水割りを手に、お互いの無事を祝い、グラスを合わせる。涼やかな音がした。
瀬流彦も既に大学の最後の年を迎えている。法的にも堂々と飲酒ができる年頃になっており、高畑よりこのバーを紹介してもらってもいた。
ここの所お互い忙しく、なかなか会う機会もなかったのだが……仕事が一段落したらしい高畑に誘われ、久しぶりに杯を交わす事となったのだ。
瀬流彦が近況を聞くに魔法世界を転々としていたらしい。一応教師でもあるはずなのだが、時には学園長お手製の身代わり符を頼る事もあり……教師としては問題有りであるかもしれない。それだけ必要とされている人材とも言えるのだが。
かつての大戦時、紅き翼（アラルブラ）とも敵対していた組織、完全なる世界（コズモエンテレケイア）という組織がある。秘密結社と言ってもよいのかもしれない、魔法世界の権力中枢と密接な関わりを持ち、また旧世界の組織にすら影響力があった。紋章は翼のあるウロボロス、この頃には瀬流彦もまた麻帆良の外で活動する事が多くなり、聞きかじった事のある名だ。

そんな組織との対決もようやく一段落ついたらしい。
聞いてみれば麻帆良とは盟友関係であるクルト・ゲーデル元老員議員が計り、中心となって構築した大がかりな包囲網、その一翼を担ってきたのだとか。
「退路を用意して追い込むのは戦術の基本だけど、そんな事百も承知の相手を意のままに動かすというのは……癪だけどやはり凄いなクルトは。僕には真似の出来ない事だ」
「その退路に待ち受けて殲滅戦をこなす高畑さんも大概ですけどね」
追い立てられた方からすれば、少人数の弱兵と思いきや、とんだ修羅の出迎えだったというわけだ。
分厚い包囲網に包まれ、隘路で本来の戦力を発揮できないところに絨毯爆撃のように降り注ぐ高畑の攻撃、たやすく阿鼻叫喚の光景が想像できてしまい、瀬流彦は嘆息を隠せなかった。なぜ対軍最終兵器の様な存在が平和な日本で教師をやっているのか。
「はは、師匠にはまだまだ及ばないよ、ナギさんにもね」
笑い、琥珀の液体を一口含む。大きな仕事を終えたせいか、近頃にしては珍しいくらいに肩の力が抜け饒舌だった。
瀬流彦もまた麻帆良での時事などを話す。
例えば葉加瀬聡美という学生が最近噂となっている。元より天才児として有名ではあったが、とうとう人型ロボットの開発にまで乗り出したらしいのだ。

「おお、人型というと……ええと機動兵器とか？」
高畑もどうやら麻帆良に毒されていたらしい、学生時代に染められたのだろう。日本文化の浸透力に瀬流彦は苦笑する。どちらかというと等身大のアンドロイドに近いのだと言うと、高畑は自らの額をぴしゃりと叩く。
「少年のロマンは達成ならずか、いやそれでも凄い事だな。エヴァは変わらないかい？」
「ええ、まー相変わらずです。面白い程起伏のない生活ペースというか、多分僕らとは時間の尺度も、感じ方も違うんでしょう。もしかしたらナギさんの事で落ち込んでいたというのがとてつもない程の異常事態だったのかもしれません」
高畑は無言で肩をすくめた。女心は計り難いとでも言うように。
あ、と瀬流彦は声を出す。関連して思い出した事があった。
「そういえば、超鈴音（チャオ・リンシェン）という名前に聞き覚えはないですか？」
「チャオ？　いや、中国系の人かい？」
「さあ、ただエヴァンジェリンさんが唐突にその名を知っているかと聞いてきた事があったんですよ、漢字では超えるの超に鈴の音と書くようですね、知らないならいいって言ってましたけど……なんだったんでしょう、一応調べてみましたけど麻帆良の学生ではないようでしたし」
高畑はグラスをまた傾けた。空になっている事に気付いたらしい、マスターに声をか

け、次はロックでと指二本を掲げて見せる。丸く削られた氷がグラスに入り、その上を滑らかに琥珀の液体が滑る。そんな様子を眺めながら「そこまでこだわる程の事かい？」と不思議そうに言った。

「いや、まあ、その時のエヴァンジェリンさんの顔がですね、こう……とても面白いものを見つけたというような笑みだったので」

瀬流彦は思い出す、あのいかにも悪巧みをしているかのような、よい暇つぶしを見つけた時のような笑みを。

高畑もまた何か思い巡らせたのか、舐めるようにウイスキーを飲み、苦笑しながら言った。

「なるほどそれは大変危険だね」

「ええ、危険です」

何が危険なのかを曖昧にしたまま、二人の意見は一致した。もちろんそれも冗談ではあったが。

◇

月日は巡る。

大学を卒業した瀬流彦は、新任教師として麻帆良女子中等部の社会を教える事になっている。

瀬流彦だけではなく、この女子中等部には教職にありつつ魔法使いである人の割合が多い。おそらく地理的なものもあるのだろう。空からの鳥瞰写真を見るとよくわかる。学園都市全体の最奥に位置し、魔法的な要所である図書館島と世界樹にも近い。川を堀に見立てるなら、それはもはや城の造りにも似ていて、表の顔である学園都市とは違う一側面、その司令部としての役割を果たしているようだった。

社会の教科担任とはいえ何しろ麻帆良の学生数は多い、教師もまた多く、瀬流彦は二年のAからCの3クラスの受け持ちとなった。そして研修も兼ねているのかもしれないが、三年F組の副担任としても担当する事となっている。

『んーフフー、どうよどうよピコリン、初めての先生サマの気分はわわー』

一足早く春の陽気に当てられて頭の中も容姿もお花畑状態になっている使い魔がふわふわと漂いながら言う。瀬流彦はまるで綿毛のようだ、と思い、軽い苦笑を浮かべる。

(相半ば……ですか)

思い描いた通りに進み、自らが教え導く立場になった事を喜ぶ気持ち、同時に自分のような存在がそんな立場に居てよいものかと、自らにそんな資格があるものかと思ってしまう気持ち。

頬を掻く。自分が人を、それも子供を導けるような人間なのだろうかと自身に問いかける。同時にその懐疑は多かれ少なかれ教師なら誰でも持ってしまうものなのだろう

ともまた思っていた。そう判断できるだけ自分は少々冷めているのだろうかと思わないでもない。

小さな真祖の吸血鬼、エヴァンジェリンの監視の任は瀬流彦が教職に就く時期に合わせ解除されていた。

魔法使い達にとっての本国――メガロメセンブリアの方で現在麻帆良と同盟関係にあるクルト・ゲーデルが中心となりまとめた一派が力を増している。政情も落ち着きを見せはじめ、闇の福音という存在の政治的な価値もまた下がり、一頃に比べて身辺は落ち着きを見せていた。その意味から言っても監視という名目そのものもまた不必要にはなっていたのだ。

もちろん瀬流彦とエヴァンジェリンの交流が途絶えたわけでもなく、暇が出来た時など、ふらりとご機嫌伺いに行く程度の付き合いはあるのだが。

今現在、エヴァンジェリンの興味はもっぱら新たな従者である茶々丸に注がれているようだった。

噂になっていた人型ロボット、否、ガイノイド。麻帆良大学工学部の生んだ科学の粋、それがなぜかマクダウェル家に居るようになっていた。

瀬流彦もまた、初めて見た時はそれはもう驚いた。玄関前で深々と頭を下げられ「いらっしゃいませ」と挨拶されたのだ。人形だとばかり思っていたそれが滑らかに動き、

喋った時の驚きをどう表現してよいものか。数秒、面白い顔のまま固まってしまっていた。普段あまり表情を変えない瀬流彦の、滅多に見れない間抜け面を見て、エヴァンジェリンは終始ご満悦だったものだ。

「今は色々学んでいる最中だ、あいつ自身が言うに状況判断というものは私が思っているより複雑らしくてな。ああおい、タカミチにはこの事は言うなよ、あいつも後で驚かせる」

「……はあ」

瀬流彦は生返事を返しながら紹介された茶々丸を見る。

身長は今の自分と同じくらいだろうか、耳にあたる部分からはセンサーのようなものが突き出ている。髪はエメラルドグリーンとも呼ぶべき淡い色、感情の表れない目もまた同じ色合いをしていた。家主の趣味なのか、妙に凝ったデザインの給仕服を着込み、やや堅い動きながらも正確な動作で緑茶をいれ、運んで来てくれる。

「どうぞ、粗茶です」

「ああ、これはどうも」

本当に機械なのか不思議な程の滑らかさで茶碗を置く。コトリとも音を立てない。

ただその動作とは別の部分でエヴァンジェリンは不満があったらしく、粗茶ですが、の使い方について細かく指導をしていたが。

一口飲むと、味もまた申し分無かった。もっとも瀬流彦は緑茶にあまり造詣が深くない、間違いなく美味しいとしか表現できないものだったが。

感心した様子を見たものか、エヴァンジェリンは自慢げに片方の眉を上げ、笑みを浮かべた。

「どうだ?」

「ええ、とても美味しいです」

恐れ入りますと、立ったまま待機している茶々丸が頭を下げる。

ただエヴァンジェリンの質問はそうではなかったようだ。やや不満げに瀬流彦を見やる。

「……そっちじゃない。明らかに有り得んだろう?」

そう言ってお茶をすすった。うむ、よい。と口の中で呟き、静かに頷く。

「超鈴音ですか」

瀬流彦がその名を口にすると、エヴァンジェリンは、にいと口の端を上げて見せた。

その口からかつてふと出た名前。瀬流彦は去年軽く調べた事があったが、該当する人物は浮かび上がらなかった。勿論、魔法関係者とはいえ生徒の身なので権限があまり無かったという部分もある。

名前が表に出始めたのは年を越してからだった。

麻帆良大学工学部、そして天才として知られていた葉加瀬聡美により発表されたガイノイド。発表時の製作協力に小さく超鈴音の名前が載った。そしてそれをきっかけとするかのように、次から次へと名前が出てくるようになってきたのだ。

例えば最近買い取られた旧型の路面電車、一体どうやって買い付けたものか、その所有者でもある。さすがにあちらこちらに頻発し始めた名前を怪しみ、麻帆良の魔法使い達が本腰を入れて調べ始めた頃には既に、表には出ない形ではあるが、様々な場所、企業のあちらこちら、学園内の多方面に株主として相談役として深く根を張っていた。

無論、それだけでは問題とはされない。麻帆良の魔法関係者が問題としたのは彼女が既に魔法について知っており、魔法と科学についての研究論文を非公式とはいえ提出してきたことだった。

本人の言によれば、魔法を知ったのは過去たまたま知った事らしい、麻帆良に来たのも偶然というわけではないそうだ。そして彼女は才能だけではなく用心深さの持ち合わせも有った、研究により自らに危害が及ばないよう、対策として麻帆良内で様々な繋がりを持ち、何かがあると麻帆良の運営そのものに影響が出かねない状況を作り上げたところで、名前を表に出すことにした……という事のようだった。

才能の宝庫である麻帆良においてもひときわ輝く才能の持ち主であることは間違いがない。しかし瀬流彦はまたその説明に対して違和感を感じないでもない。一応の辻

褄は通っている。通っているがやはりどうもすっきりしない部分をも感じる。
　思い返し、微妙な顔を浮かべている瀬流彦を面白げに見やり、エヴァンジェリンは言った。
「あいつは面白いぞ、何かがある。望みのたぐいかもしれん、それも渇の付く奴だ。いずれにせよ最近ではほとんど見る事のなくなった珍しい目をしていた、古臭いと言ってもいい」
「……やっぱり去年頃には既に接触してましたか」
　瀬流彦が小さくため息を吐いて言うと、合わせたわけでもあるまいがエヴァンジェリンは小鳥が鳴くように小さく笑う。
「じじいにも伝えておけ、超鈴音が関係し作られたガイノイドは、絡繰茶々丸という名を与えられ、この私の従者になったとな」
　意味するところは明白、超鈴音の伸ばした手をエヴァンジェリンが掴んだという事だろう。これでますます麻帆良側は超鈴音に手を出すどころか口出しもしにくくなる。誰しもが藪を突いて蛇を出したくないものだ。
（本当に一筋縄ではいかない人揃いです）
　若干ぬるくなってしまったお茶を頂きつつ、瀬流彦はそんな事を頭の中でぼやいた。もっとも、胃を痛ませているのは学園長と少々真面目に過ぎる一部の魔法使いでもあろ

うが。

◇

教職というものは常に言い訳の効かない仕事なのだろう。

もちろん言い訳の聞く仕事などというものは無い、それでもなお。教師という職は人の一生を左右しかねないものなのだ。覚える事は多く、学んだ方がよい事はそれ以上に多い。

新年度が始まり、瀬流彦が本格的に教師の職に就いてからというもの、とても気の休まらない日々が続いていた。

正式に麻帆良所属の魔法使いとして認可されたという部分もまた忙しさに拍車をかけている。学生であった時も魔法使いとしてはかなり便利に使い回されていた瀬流彦だったが、それでもやはり権限が違う、出来る事も活動範囲も大違いであり、本人の意志はさておき、さらに使い倒される事になるのは当然の流れだったのだろう。業界の人手不足は深刻だった。

瀬流彦は高畑・T・タカミチとは違い、直接的な武力が必要ではない場所で用いられる事が多い。

例えばアメリカのジョンソン魔法学校との交換留学の契約更新の際にも同行し、交渉の材料とされる、などという事もある。

たかが交換留学とも言えない。表向き以外の用件もまた含まれていた。学校という名前ではあるものの、麻帆良やジョンソン魔法学校というものは魔法使い達の拠点という側面もまた強い、それぞれ独自の技術もあれば、スポンサーとなっている関連企業同士が競争関係なんて事もままある、明日の敵とは言わないまでも、それなりに緊張感のある付き合いではあった。

特に今回の件に関して甘く見られる事は損失となる。麻帆良の質も落ちた、と思われればジョンソン魔法学校もまた立場を考え直しかねないのだ。

瀬流彦の役割は有り体に言ってしまえばイメージ戦略の一材料だったのだろう。学園長を「老獪である」と分かりやすく人に見せるための手駒である。

瀬流彦は持ち前の内面を読ませない表情を取り繕いつつ、内心ではため息を吐いていた。

（多分演出家としてはあの人も関わってますねェ……）

なんでも、噂があるらしい。魔法世界でまことしやかに流れている噂だ。

少し前にメガロメセンブリアで政変が起こった。按察官（アエディリス）の公金横領が明るみに出た事、さらにはそれと繋がりのあった法務官（プラエトル）の失脚、関係していた議員の数も多く、ほとんどがその議席から去ることとなった。その影に麻帆良の近衛学園長、その長い手が関係しているという噂だ。さてその長い手は誰ぞ、と。

関わっていないかといえばそうとも言えない。大分前の事だが、魔法世界に出向した時、瀬流彦はちょっとした使い走りのような事をした覚えはある。魔法世界においても隠密生の高い使い魔が妙な話を聞き込み、それをちょっとばかり親交のある議員に伝えた事もまたあった。しかし、そこまで噂になるようなものでもない。

誰がどんな意図で噂を流しているのか判ろうというものだ。

そんな噂をジョンソン魔法学校の校長もまた聞いた事があるらしい。ふと耳に挟んだ話として雑談のように言っていたが、目は瀬流彦を向いている。

もしかしたらエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、闇の福音の監視役にいつの間にか高畑とともに加わっていたもう一人の名前も併せて思い出したかもしれない。

表向きは新人ゆえに諸事経験を積ませたく、という建前で交渉役の明石教授に同行していた瀬流彦だったが、交渉の場であっても物怖じせず、年齢に見合わず落ち着いている、何よりも「読めない」ところが多分にある。こちらの校長を困惑させるには十分だっただろう。そして「この若いのはもしや噂の……」とでもちらりとでもよぎってしまえば近衛学園長の思う壺というものだったかもしれない。幾度も婉曲な言葉で探りを入れていた。

しかし、正体を掴もうとしても瀬流彦の持って生まれた性格からか、茫洋として掴み所がない。そして人は判らない相手を強く思うものだ。無論その虚像は虚と知れても

問題はない。そんな人材が居るという事、それを示す事そのものがまた交渉時のカードの一枚という事なのだろう。やがてこちらの校長は何か自分で答えを出したらしく、肩をすくめ大きな笑みを浮かべた。

「なるほど、よく理解しました。麻帆良には良い次代が育っている。もちろん私たちの組織にも良い若者が育っております、後で案内をさせましょう。しかし古い革袋に新しい葡萄酒を入れるなとも言いますが、私たちの世界ではそうでもなさそうですな、これからも良き友人でありたいものです」

そう言い、明石教授に握手を求める。さて、と前置きをすると細部についても話し合おうと、秘書に書類を出すよう指示をした。

「面倒臭い事をさせられてるねえ」

明石教授はひとしきり苦笑を漏らすとそう小さく呟き、瀬流彦は無言でため息を吐いた。

◇

（案外慣れてしまうもんです）

校舎の屋上でぼんやり夕焼けに染まった雲を眺めながら瀬流彦はそんな意味もない事を思っていた。

ちょっとした小テスト用の問題を作っていて、作り込んでいたらいつの間にか真っ暗

になっていたなんて事も、また休日に生徒が起こした騒ぎで対策に翻弄され、丸々休みが潰れる事にも。

そして麻帆良の魔法使いとしての仕事。先輩であり師でもある高畑とは逆、あまり表には出ず、どちらかというと暗躍という言葉がふさわしいのかもしれない。情報収集をする事もあれば、いわばはったり、ペテンのたぐいを用いる際の手先として動く事も多い。

そんな、親に知られたら泣かれてしまうような二重生活にもまた慣れてしまった。

（さりげに道を誤ったかもしれません……）

腕を組み、ふとそんな思いを抱く。教職は良いとして、魔法使いとしての自分の在り方には大いに疑問の余地がある。

「いや、学園長の打った手で実際揉め事は少なくなってるわけですが……」

ぼやき、何となく釈然としないものをため息と共に吐き出した。

エヴァンジェリンは策を弄しすぎるとも言ったが、瀬流彦は学園長を策士だとは思っていない。策士というより、人を用いる政治家という感がある。人間に対する洞察力がずばぬけており、どの人間をどこに行かせ、どう配置しておけば結果として上手く回るのか。そのあたりが恐らく学園長の真骨頂なのだろう。たまに荒唐無稽な事をやる事もあり、どこでどう関与してくるのか判らない部分もままあったが。

魔法先生なんて呼ばれる身ともなり、ある程度知ったからこそ理解できる事がある。

瀬流彦が生徒だった頃、麻帆良、いや魔法界は思ったよりずっと揺れていた。下手を打てば麻帆良そのものが接収される危険性すらあった。少なくともその案件はメガロメセンブリアの議会の場に上るところだったらしい。

何せ一級どころではない霊地を抱え、蔵書には魔法世界が大戦の最中失われてしまった魔法も大量に眠っている、少なくともそう見なされている。封じられたとはいえ魔法世界とのゲートも眠っており、さらには闇の福音という判りやすい弱点まで持っているのだ。狙われないわけがない。

そんな情勢の中で難しい舵取りを迫られた学園長は急場の対策に細かい様々な策も用いたものだが、基本的にそれは時間稼ぎだったのだろう。クルト・ゲーデルとの同盟関係しかり、メルディアナ、そしてジョンソンとの紐帯を強めたことの方が本命のようだった。学園長の構想には根本のところで人と人の繋がりがある。あえて確とした結果を狙って無さそうなのは、学園長の独特の色合いと言ったところだろうか。

湿り気を含む風を受け、ただ何となくというように瀬流彦は呟きを漏らした。

「あちらの英雄、ナギ・スプリングフィールドに子が居たようです。それもどうやら大人の事情から早くにこちらに来るみたいですね」

魔法使い達にとっては重要な情報を何でもないかのように言う。

「ちょっと小耳に挟んだので学園長に確認してみたところ、この時間、こんな場所でぼやいてみるのも良いだろうとか言ってました。まったく妙な指示だと思いません？」
「……まったくだ。その情報は私も別ルートで掴んだが、考えてみれば出所が怪しいな。じじぃはまた私を使うつもりか」
　返事は瀬流彦の位置からは見えない場所から発せられた。
　屋上に設置されているコンテナの陰、日差しでも避けながらサボっていたのかもしれない。風に吹かれた長い金色の髪が物陰からふわりと舞った。
「公的に闇の福音さんに頼むと色々揉めますからね。多分、使われるだけの代価は用意してるとも思いますが」
「奴の血筋というだけでも私にはメリットが大きい、襲うだけの筋はすでに通っているな。多分やることは瀬流彦、お前が当事者ともなったあれの再現だ。今度の私は当て馬ではなく踏み台なのだろう」
「英雄の息子が肩書きだけではない、という箔付けですか。まだ小さいはずなのに何とも苦労な事です」
　瀬流彦のため息に、一拍の間を置き、面白げに抑揚のついた声が返ってくる。
「くく、だから良いんだろう。私は女子供を殺さん、それは知れ渡っている事だけに後で企みが知れ渡ったとしても丸く収める自信があるのだろうさ、だが……」

ゆったりとした動きでエヴァンジェリンは瀬流彦の視界に姿を見せた。
妖しい微笑を浮かべたまま瀬流彦の立っている方の出入り口に歩き、すれ違いざまぼそりと囁く。
小柄な後ろ姿を見送りながら、瀬流彦は頬を掻いた。
「舞台には演出が必要……ですか」
厄介な事をしそうですねェ、と独りごちる。
瀬流彦にはエヴァンジェリンに伝えていないナギ・スプリングフィールドの息子、ネギの情報がもう一つある。
ネギが幼少時、故郷が襲撃を受け、ほとんどの村人が犠牲になってしまった事。
時期はかつて瀬流彦がまだ高校生であった頃、高畑と共に魔法世界に行った少し後の事だったらしい。当時瀬流彦に知らされる事はなかったのだが、その時期に前後し、高畑の様子が一段と厳しいものとなったのはそれが原因だったのかもしれない。
もちろん、その事件はすでに揉み消されていたが、一つの村が襲撃され、無くなるという事件は完全に揉み消せるというものではないのだろう。瀬流彦も各地に出向くようになり、とりわけ情報収集などにもあたったりしていると、自然とそんな情報は耳に入ってきていた。
その事を伝えればエヴァンジェリンもそう思い切った真似はしないだろう。基本的

に情の人だと瀬流彦は考えている。

「……とはいえ考えてても仕方無いですか」

瀬流彦は直接ネギ・スプリングフィールドと会ったわけでもないのだ。今はまだ情報でしか知らない。

生い立ちを考えれば魔物、あるいは吸血鬼にさえ憎悪をあらわにするかもしれないし、それとは分けて考えるかもしれない。あるいは少年の潔癖さでもって博愛という綺麗なものを貫くかもしれないのだ。

さらに考えるなら、学園長はお互い前情報の無いニュートラルな状態で2人を引き合わせたい、そんな目論見もあるかもしれない。

いずれにせよ何かを決めるのは早計であり、ふと頭の中によぎった案でしかなかったのだろう。

細く息を漏らし空を仰ぐ。風景を赤く染めていた夕日も沈み、薄闇のどこかしっとりとした風が吹いている。部活動で残っていた生徒もそろそろ帰る頃だろう。

瀬流彦は肩をすくめ、来年度あたりは顧問を持たされるかもしれない、などと考えつつ屋上を後にした。

◇

監視役の任は解かれているものの、それなりにエヴァンジェリンと瀬流彦は親交があ

る。足しげく通っているわけでもないが、当然、従者と言える茶々丸との親交もまたあった。

彼女、そう彼女と呼びたくもなる。姿形が人間にひどく似ているといったところもあり、逆にただのロボットとして扱うには抵抗すらあった。そんな茶々丸は日々進化している。

瀬流彦が行く度に違った面を見る事ができる。それはさながら赤子が大きくなる過程を見ているような気分であったかもしれない。

学園長に直接かけあったらしい。超鈴音や葉加瀬聡美の2人と共に中学に入学し、人間関係の中で経験を重ねるとそれはもう機械と呼ぶにはふさわしからぬ挙動すら見せるようになっている。ある日、瀬流彦は通りがかりに、ケーキ屋でショーケースの中をじっと見詰めている茶々丸を見かけた事があった。

「マスターはガトーショコラが良いと言われていましたが、それに美味しそうだと思うものがあればそれも含めて買ってこいとも言われました。私はこのストロベリーショートケーキの出来が良いと思うのですが……聞いたところ、今日の『444』一番の売りはフルーツタルトだと言うのです」

どうしたらいいのでしょうか、と言う。

主の命令を遵守するなら最初の命令通りに茶々丸が美味しそうだと判断したショー

トケーキを買えば良い。だが、ガイノイドたる茶々丸に味覚は理解し難い。専門家であるケーキ屋の店員の意見を求めたところ、自分の判断と食い違いが起こり、そこでいわば「迷った」ようなのだ。おろおろしている。

（専門家じゃないのでよく判りませんが、随分ロボットという印象からかけ離れてきてますね）

瀬流彦は感心する。クラスの中での受けもなかなかのものらしい。クラスに入る事について少々心配していたものの、麻帆良という土地柄か、はたまた日頃から色々破天荒な事に慣らされているせいか、すんなり馴染めてもいるようだ。ガイノイド、茶々丸の発表そのものは限られた中でしか行われていなかったのでクラスメイトには全く予備知識がないはずだったが、それでも普通に受け入れ順応しているあたり、柔軟だなと苦笑せざるを得ない。

そんな柔軟性から程遠いはずの教師が麻帆良には居た。鬼の新田とも言われる、自分にも他人にも、学生にも教師にも厳しい人だ。魔法関係とは程遠いものの、教師の見本とも言える人である。

意外な事に茶々丸という、いくら麻帆良とはいえ異常とも言える生徒に、もっとも理解を示したのがこの新田先生だった。何でも元教え子が組み上げたＡＩが茶々丸の基礎部分にあるそうで、意外な人間関係の繋がりがあったものらしい。

夏の終わり頃、瀬流彦は茶々丸を伴い麻帆良大工学部を訪れていた。バランサーを制御しているプログラム、その調整部分に不備があったのだとか。茶々丸が自己申告した事だったのだが、当然ながら主のエヴァンジェリンも、たまたま居合わせていた瀬流彦にも判る事ではない。こうした事はままある事らしく、その度に麻帆良大工学部の一室にある研究室にエヴァンジェリンが運んでいたらしい。やはりそれなりに重量がある茶々丸なので、丁度男の手がある、とばかりに運ばされたのだった。

「ごちゃごちゃしているけど、ゆっくりしていくといいヨ」

瀬流彦は教科担当なのでもちろん教えた事はある。目立たないわけがないのになぜか埋没している生徒、そんな印象があった。

超鈴音と間近で接するのはこれが初めての事かもしれない、相手が相手だ。瀬流彦が魔法使い側であることもまた知られていると考えるのが妥当なのだろう。

麻帆良大工学部に借りている研究室はそれはもう片付かない様子だった。雑然とした部屋の向こうではもう一人の天才児、葉加瀬がエヴァンジェリンの見守る中、茶々丸にコードを取り付け何やらキーボードを凄まじい勢いで叩いている。

（一応探りでも入れておくのが仕事熱心な魔法使いというものですかね）

などと思いつつも、瀬流彦はあまりその少女を疑う気にもなれない、葉加瀬聡美と難しい話に夢中になり、挟まれたエヴァンジェリンが目を白黒させている光景はどこか微

笑ましい。麻帆良の魔法使い達の態度が固いのは、自らの管理網を見事にすり抜けられた感もあり、超鈴音に対しては「負けた」気になってしまっているのだろう、と思っていた事もあり、どこか同情的なものもあったのかもしれない。

瀬流彦は肩の力を抜き、誰にも気付かれぬよう苦笑を浮かべる。教師であるべきか魔法使いであるべきか、魔法世界のしきたりの中などでは育っていない自分なのだ、最初から決まっていた。

雑多なものが積まれている研究室を見学でもする気分でのんびりと見る。

作業台の上には何か固定してあるプレートのようなもの、この時代にあっても手書きがやはり落ち着くのか、よく解らない数式を書き殴ったメモも大量に散乱している。振り返って壁際の棚にはさらに雑然とモノが積まれていた。ケーブル類はケーブル類、あるいは金属部分のものは材質などにより整理されているようだが、多分この整理の仕方は部屋の住民にしか判らないに違いない。

棚の中段、何かのサンプルをとったものか、ガラス瓶に入れられた土や砂、石などが並んでいる場所に目を移す。

「ええいッ！　いい加減私にも理解できる言葉で喋らんか！　どこの未来人で宇宙人だというんだ貴様らはッ」

とうとう最近の科学にはとんと疎い闇の魔王様が爆発してしまったようだった。超

鈴音が「だから火星人ヨ」などとふざけてもいる。瀬流彦はやれやれと頬を掻き、年甲斐もなく癇癪を破裂させてしまったエヴァンジェリンをなだめようと向き直る。

もう少し瀬流彦が興味深く眺めていれば、あるいは気付いたかもしれない。

偏った目、あまりに無造作に付けたとしか思えない口と鼻、あまりに奇妙な形のその石は、雑多なサンプルの中に混ざり、静かに、ただ静かに眠っていた。

◇

どこか湿り気を含んだ夜の闇に舞う白い肢体がある。

昼間あれほど騒がしかった学校もひっそりと静まりかえり、こればかりはいつの世、いつの時代でもなかなか変わらないものだ、とエヴァンジェリンは密かな感慨を抱く。人の世はどれほど進歩し、果てない宇宙にあってさえも人は闇を闇のまま克服できない。必ず光を当て侵略し征服する事しかできない。そんなとりとめのない思いが浮かび、くすりと笑う。

「光に生きろという言葉が私にとってどういう意味合いを持つものか、などと……あいつは考えていなかったのだろうな」

エヴァンジェリンは屋上のフェンスに身をもたせかけ、過去を思い出すように目を瞑ると、はにかむような笑みを浮かべた。

唐突に空間が揺らぐ。音もなく、何かしらの前兆もなく。

一瞬の後、変わった服を着た小柄な影、超鈴音がそこに居た。
「少し遅れたカ？」
「いや、時間通りだ」
短いやりとりを交わし、エヴァンジェリンは身をもたげる。超鈴音は月明かりに照らされたその姿を見て、たはは、と困ったかのように額に手を当てた。
「その姿はとてもとても青少年には見せられないネ、露出が高いにも程があるヨ」
「なに、久しぶりに良い夜だったからな、開放的な気分になっただけだ」
うそぶくと、どんな魔法か、エヴァンジェリンが纏っていた黒いローブが変化し、体に巻き付き、ドレスのような形に変化する。
「それで、どうだった？」
「ンー、解る事解らない事、半々と言ったところヨ、ひとまずラボで説明するネ」
そう言い、屋上の掃除用具などが入った倉庫の壁に手を当てると、絵の具が溶け出すかのように壁が滲み始め、数秒後にはぽっかりと空いた穴があった。
「……しかしわざわざこんな場所に作らんでも良いだろうに」
「木を隠すなら森ネ、それに、麻帆良大工学部は十分な監視システムを備えてる……と思ている、人がシステムに頼り切りの場所は逆に脆いヨ」
そう言い、躊躇いもなくその先の見えない穴に入り込んだ。エヴァンジェリンも続い

て入ると、またゆっくりと滲むように元の壁に戻る。
　むろん倉庫の中、というわけではない。いかなる技術によるものだろうか、二人は二十メートル四方程の白い壁の空間に居た。超鈴音がラボと言ったように、何に使うものか判らない機械が所狭しと並び、中央の作業台には何かを作りかけたものか、コードのはみ出た部品が無造作に置かれていた。
　超鈴音は作業台の上に乗っていたものを片付けると、懐から出した厳重に封じられた箱を開き、中からガラス瓶に入ったちぐはぐな人面を持つ奇妙な石を出した。エヴァンジェリンが小さく呻き、眉をひそめる。
「やはりな、歪みを感じる。この世界に来てずっと感じてきた違和感だ、だが違う。これは根本的なものではない」
「魔法使いの感覚で言うと?」
「強いて言えば……そうだ、毛細血管と言えば良いのかもしれん、大元より送られている微細な血、それがこの世界にとり歪みとなっている」
「なるほど……」
　超鈴音は真剣な表情になり考え込んだ。エヴァンジェリンもまたふむ、と小さく呟くと、独白するかのような調子で言う。
「なまじの人間の研究素材には分を過ぎた物には違いない。それは明らかに魔、あるい

は……私の一番嫌いな存在か。いずれにせよ事象の根幹に関わるものだろう」

「それは私を焚き付けてるネ」

超鈴音は不自然なほど明るく微笑み、エヴァンジェリンもまた、くく、と口の端を持ち上げ笑みを見せた。

◇

麻帆良女子中等部の職員会議は揉めていた。十才という子供、ネギ・スプリングフィールドを教師として迎える事を学園長が明らかにした為だ。もっとも十才と知っているのは魔法関係者だけだろう。労働基準法の絡みもあり、戸籍としては十三と誤魔化されていたりもするのだが。

ここでも意外な事に、受け入れに対して柔軟な姿勢であったのは新田先生だった。学校の色合いというものもあり、教育に多様性を持たせるのはそう悪い事ではない、という考えらしい。ただし、教師に必要十分な能力を持ち、十分なサポート体制を用意した上で、生徒にも、また若年の教師にも心身の負担を掛けない事が前提条件、とも言っていたのだが。

後日、不思議に思った瀬流彦が、学園長に呼ばれた際、何となく、というように会話の端にのせた事がある。

「しかし新田先生は意外でしたね、てっきりネギ君の受け入れには否定的になると思っ

ていました」

すると学園長は長い髭をしごき呵々と笑う。

「厳しいからといって頭が堅いとは限らんという事よ。昔はそうでもなかったようでの、自分でも頑迷過ぎたと笑っておったわ……じゃがまあ、考えてみい瀬流彦君、あの二年の学年主任をやり果せておるのじゃぞ？」

「はあ……なるほど言われてみれば」

たまたまなのか、あるいは学園長の迂遠な手回しか、麻帆良の中でも特に「濃い」生徒が集まっているのが現中等部二年の面々なのだ。あまりに個性的な者が多いゆえに1クラスにまとめてしまってもいるのだが、あれだけ揃うのはたとえ誰かの意図があったとしても奇跡の確率だった事だろう。

あるいは、と瀬流彦は考える。来年度はエヴァンジェリンを含むあのクラスがまとまったままでいる最後の一年。ネギ・スプリングフィールドという将来を嘱目されている子供に是非引き合わせてやりたいとも思ったのではないだろうか。

（となると、たとえネギ君が何歳だろうとこちらに来る事にはなったのでしょうねェ）

英雄の息子も楽ではない、と瀬流彦は肩をすくめる。

新年を迎え、厳しさを増していた寒さもほんの少しばかり和らいできた頃。瀬流彦は日本より遠く離れた地、四つの帝国の首都でもあった地、イスタンブールに出張してい

た。
　マルマラ海と黒海に挟まれたこの地は緯度で言えば青森やニューヨークと変わらないが、比較的暖かくもある。高い場所から見下ろせば、一際目立つ塔、所狭しと立てられた建物、赤煉瓦の屋根のものから石造りの角張ったものまであり。その向こうにボスポラス海峡を行き交う船もまた見える事だろう。
　海辺から吹く風にどこか気持ち良さそうに妖精のプーカが羽根を震わせている。季節感を表しているのか、白づくめ、どこか兎を連想させる白いドレスを揺らせ、こればかりは変わらない若草色の髪をなびかせながら、瀬流彦の頭の上をたゆたうように飛んでいた。
『ピコリーン、トールコアイス食べよぉー』
　妙に間延びした声で使い魔の妖精が声をかけてきた。歩いていた瀬流彦も足を止め、ふむ、と手を顎に当ててコートのポケットから手帳を取り出し、予定を確認する。
「一仕事を終えてからにしましょう、この時期です、屋台はありませんし店を探すのも手間ですよ」
『ううあ、けちー、アーイスあたーっく』
　間延びした声と裏腹に、突如として背中に妖精が飛び込んできた。氷を背中に落とされたかのような感覚に思わず硬直し、口の端をひくひくと震わせる。

「プ、プーカ、さん……なかなかもって、寒いのですが」

風の妖精の体温、体温などというものがあればだが、それはもちろん気温と同じなのだ。いい気になって背筋を冷やしてくるこの使い魔にどうお仕置きしてやろうかと悩みながら、瀬流彦はぶるりと一つ体を震わせた。

金角湾の北岸に位置する塔、観光名所でもあり、展望も楽しめるその塔には誰にも知られぬ地下階がある。特殊な認証用の魔法具であるカードを持っていなければ通れない場所だ。広さはもしかしたらイスタンブールの地下街と言って良い程に広大かもしれない。

イスタンブール魔法協会。極一部の人間、魔法使いとも呼ばれる者達にはそう呼ばれていた。

ここに瀬流彦が派遣されたのは三通りの理由がある。

表向きの理由である一つめは社会の教科担当である事もあり、日本の教科書においてあまり力を入れられていない中東の歴史、その研修だったりもする。そしてあまり表向きではない二つめは、この地の魔法協会において盛んな占星術の研修であり、全く表向きではない三つめはネギ・スプリングフィールドという子の情報に関連した仕事だった。

イスタンブール魔法協会は他の魔法使い達の拠点、麻帆良のような場所とは役割その

ものが違う。シルクロードの終着点であり、同時に西と東を結びつける十字路とも呼ばれ、交易の拠点であった地は、また魔法使い達にとっても重要な場所でもあった。

メガロメセンブリアとの直通ゲートポートを抱え、最近ではインターネットを模し、作られたまほネットの中枢設備も設置されている。情報の集積地であると共に、魔法界の物流の拠点。世界の大小様々な魔法使い達の組織が集い、あるいは支部を設置し、時には中世のギルド的なもの、秘密結社めいた組織が作られる事さえある。

もちろん麻帆良もまた支所を設置し、情報収集に向いた人材が出向している。本来、誰かが横から首を突っ込む必要もなかったのだが、今回については瀬流彦の特性が必要となった為に呼ばれる事となったのだった。

すでに麻帆良とメルディアナ魔法学校の間では話が纏まっており、本国への報告はネギ・スプリングフィールドが麻帆良へ移った後にする予定となっている。知る人ぞ知る英雄の遺児だが「いつの間にか」麻帆良に移っていたという形にしたいという事なのだろう。かつての襲撃事件の記憶も新しい責任者達から見れば、用心深いとも言えぬ当然の配慮だったかもしれない。今回の瀬流彦の仕事もまた、その情報操作の一環であり、ネギ・スプリングフィールドを気に留めている者が居た場合、正しい情報が得られないようにするという目的があった。

『精霊さん達にー噂を聞けばいいんだねー?』

「ええ、ネギ、あるいはスプリングフィールドの名前が出てきたら報告して下さい、面白おかしい事を吹き込んでもいいですよ」

『らじゃー』

地下階の一画、麻帆良の出している支所の片隅で姿も存在感も薄くしてゆく使い魔を見送り、瀬流彦は瀬流彦で長椅子に座り目を閉じ、ただ一言「風よ（ウェンテ）」と唱えた。その言葉はただの呼びかけに過ぎない。常に傍に居てくれる隣人達。風の精霊に呼びかけ、力を借りる合図。意志を沈ませ風に流し、没我の淵に留まり、精霊達に尋ねた。とはいえ精霊というものは確たる事を教える事はできない「赤毛の少年」「ネギ」「スプリングフィールド」「英雄の息子」「最近」そんなイメージや言葉を伝えると、それが伝わるごとに波紋のようなものが広がり、ゆっくりと、ゆっくりと絞り込まれてゆく。やがて切り抜かれた一場面とまるで合っていない音が共に瀬流彦に伝えられ、内心で苦笑する。それともこれか？　とでも言うように次々と場面は変わっていった。

やがて瀬流彦が一通りの情報収集を終え、静かに頭を持ち上げると、妙に心配そうにしている鼻髭、を蓄えた支所長と目が合った。一つ頬を掻き、口を開く。

「あのー、何時間くらい経ちました？」

「……三時間といった所ですが、大丈夫ですか？　あまりにじっと動かないので、どうしたものかと思っていましたよ」

「これはとんだご心配を。前もって言っておけば良かったですね」

瀬流彦は誤魔化すように髪を掻く。この魔法……魔法と言って良いものかも判らない。一級の霊地は精霊もまた濃い、その精霊溜まりのような場所は同時に膨大な記憶を留めている事があり、特に風の精霊と仲の良い瀬流彦は限定的ながら「教えてもらう」事が出来るようになっていた。それを見たエヴァンジェリンなどは、恐らく太古で遠見、あるいは巫女の予見や予言という形で人が知らず知らずのうちに用いてきたものだろうとも言っていたものだったが。

（無防備になってしまうのが残念なところです）

おまけに言えば時間感覚も失せてしまう。瀬流彦は凝り固まってしまった肩を揉みほぐし、何があったのか妙に上機嫌な感情を伝えてくる使い魔が戻ってくるのを待った。

イスタンブール魔法協会内でネギ・スプリングフィールドの話題あるいは写真などを持ち出したものは総数十四名。多いのか少ないのかはともかくとし、支所長が持ち出してきた登録者名簿と照合し、人物を特定する。

「それでは後の事をお任せします」

「ええ、任せておいてください、後はこちらの腕の見せ所です、これだけ人を特定されて攪乱工作の一つも出来ないようじゃスパイ失格です」

「……ダブル・オー・セブンと呼んだ方が？」
「残念ながら赴任以来ワルサーを抜いた事もないのですけどね」
　支所長は髭を捻り、一つ格好付けるように言うと、からからと笑った。
　二泊の滞在の後、ごった返す空港のロビーで搭乗予定の便を待ちながら、ぼうっとした表情で紙コップのコーヒーを啜る瀬流彦の姿があった。この場に見える人はまず居ないだろう風妖精が頭の上に胡座を組み、どこか主に似た様子でぼうっとしている。
『あとは弐集院先生のお仕事って？』
「……気が緩んでました」
　ぼんやりと考えていた事が使い魔に伝わってしまったらしい。瀬流彦は苦笑を浮かべ、コーヒーを煽って空にする。二泊三日の滞在でそこまで歴史だの占星術だのを調べる事など出来ようはずがない。本や役立ちそうな資料を片言のトルコ語で買い回り、宿に戻っては読む日々だったのだ。痛切に睡眠不足を感じていた。一応研修旅行の体を取り繕っているので報告書は上げないといけない。
（キョフテでも手土産にまた別荘でも使わせて貰いに行きますか……）
　店で食べたトルコ風ハンバーグの味を思い出しながらそんな事を思う、必要なミックス香辛料のキョフテバハルはしっかり購入済みだ。
「帰る頃には丁度、噂の彼とぶつかるかもしれませんね」

何とも無しにそう言い、瀬流彦は思い返した。写真でならば見た事がある。純朴そうで、いかにも少年らしい真っ直ぐな瞳。あの過去があり、この目をできるならばきっとそれは環境が良かったのだろう。何となくかつて共に旅をした、とにかく生きる事に貪欲な少年を思い出す。併せて、荷物持ちをさせるつもりで荷物を盗まれてしまった事を思い出してしまい、苦笑を漏らした。

静かだと思って確認してみれば、使い魔の妖精はすっかり眠りこけていた。瀬流彦は苦笑を深め、冬眠ですか、と小さく呟く。猫のように丸まり寝ている妖精をコートの内ポケットに入れると、空港内にアナウンスが響きわたる、待っていた便が若干の遅れを伴い出発するようだった。

六話

少女は暗闇が怖かった。

それは少女の手で触れるにはあまりに多くの物を含みすぎ、混然とし、自らもその一部になってしまいそうで。

逆に自らもその一部となり、混ざり合い、率いてしまえば楽になるのかもしれない。それは大きな誘惑であり、いつかどこかで感じたような既視感もまたあった。

しかし祖父は言う。大好きな祖父は言うのだ。苦や楽、そんなものは置いておき、知りなさい、と。色を付ける前の色を知りなさいと。そして決まって、難しい言葉にきょとんとする少女を抱え上げ、膝の上に座らせ、大きな暖かい手の平で少女の頭を撫でるのだった。

幼稚園で怖がりだと囃したてられ、泣き出してしまった時も、小学校の友達にお祭りで肝試しに参加させられてしまい、半ベソをかいてしまった時もまた、父と母は仕方無いなあという顔で慰めるものだが、祖父は違った。少女の背中を優しく撫で、臆病さについて語る、生命としてはむしろ当たり前の事だと、人一倍臆病なのは強く生きようという表れなのだと。これを誤魔化し、強がるものこそ己の感受性に蓋をしているに等し

いとも言う。

少女にとって祖父は大きな存在だった。苦しい時、悲しい時、嬉しい時、楽しい時、少女は祖父の揺らす安楽椅子の手すりに腕をかけて精一杯背伸びをした言葉使いで話しかけていた。一つ出来事を話すと、祖父はそこから思いついた蘊蓄を語り、時には自らの考えを語ったりもする。ぽんぽんと飛び出してくる人名を頼りに本を読み、祖父の話に懸命に付いて行こうともする。時には付け焼き刃の知識を披露し、からからと笑われてしまう事もあったが、少女にとってその時間はかけがえのないものであり、日々の一番の楽しみでもあった。

濃いめのアールグレイ、変わったお菓子好きの祖父が取り寄せた地方のB級お菓子を一緒に頂き、舌鼓。同年代からは少しばかり浮いているかもしれない落ち着いた口調で祖父と話す。少女が小学校高学年にもなった頃、もう暗闇は怖くなくなっていた。

自動販売機で指が彷徨う。右に行き、左に行き、また右へ。

少女は眠そうな目を左、右と移しながらどちらにしようか悩んでいた。

「ゆぇー」

とことこと、どこか小動物めいて見えてしまう親友が歩いて来る。よし、と左のボタンを押した。

少女は無表情の中に好奇心を煌めかせ、紙パックのジュースを取り出す。パッケージ

には軒並みミックスハワイアンという文字が椰子の木と共に印刷されている。のの字しか合ってませんが、と頭の中で呟き、親友に振り返った。
「のどかが来たので決まりました。そろそろ発表の時間ですか」
「うんー、でも私が来たからって？」
「これです」
少女がこれぞ、とばかりに突き出した今日の獲物に、親友はやはり困ったような笑みを浮かべて返すのだった。
綾瀬夕映という少女が大好きだった祖父を失い、二年が経った。一時は落ち込み、色の褪せたように感じていた世界も、今では宮崎のどかという親友を得て、元の色合いではないにしろ、世界は新しく鮮やかな色に満ちている。また、早乙女ハルナという何しろノリの良い友人もまた、諸事あまり積極的とは言えない二人にとって、ぴったりだったかもしれない。さらに少し天然の入った、おっとりとしたムードメーカーの近衛木乃香を加えれば一日図書館に篭もっていても飽きる事はない。
図書館探検部という部活もまた持ち前の知識欲、好奇心を満たすには良いものだった。ほのかに刺激的で穏やかな日々、寮に戻れば自分好みに馴染んだ部屋、何故か買ってしまったおかしな兎のぬいぐるみ。
時にはどこかで何か物足りないものを感じもしたが、何不自由もなく、日々を楽しん

でいた。

変化が起きたのは年を越した後。色々な意味で大らかであると言える麻帆良でも、大丈夫なのかと突っ込みを入れたくなるほどの子供が担任として赴任してきた時。

ネギ・スプリングフィールドという少年は不思議な存在だった。いつもこの少年を中心に騒ぎが巻き起こる。短いながらも図書館島の地下で共同生活などした際、その一端を伺い知る事はできた。

いつから始まったものなのか、もはや定番と化している成績順位の発表。一度は最下位になり、また一悶着があったものの、結果的に学園で唯一の子供先生が居なくなるという事態は避ける事ができ、この時ばかりは、綾瀬夕映も親友のほのかな感情を慮り、心底安堵のため息を漏らしたものだった。

新年度も始まり、初日から大騒ぎをしている三年A組の喧噪、身体測定にかこつけて良いようにからかわれてしまう子供先生をどこか微笑ましくも思いながら、綾瀬夕映は何となく図書館島での一件、考えてみると色々不思議だった事を思い起こしていた。

「まほう、魔法……ですか」

はてと首を捻る。友人のこのかに借りるオカルト系の本にでも影響されてしまったかと。どこか惹かれる言葉のようだった。魔法の本などどうせよく出来た参考書、プラセーボ効果が見込める程度の物、などと考えていたと言うのに。

その独り言を聞きつけた隣の席の長谷川千雨が肩を落とし「ブルータス、お前もか」と口の中で呟いたが、それは幸い誰の耳にも入る事はなかった。

◇

今年の桜は早咲きの割に長く保つ。

春の風に浮かれて花びらと共に舞う使い魔を視界の端にとめ、瀬流彦はぼんやりとした顔で桜並木を眺めていた。

今年度より瀬流彦は教科担当のみを受け持つ事が決まっていた、魔法世界が落ち着きを見せてきた事もあり、魔法使いとしての活動はむしろ減っている、副担任としての仕事も無くなると、逆に余った時間を持て余すようにさえなっていた。

日が落ち始め、茜の色に桜が染まる。自らの影が長く伸びるのを眺めながらふと口に出した。

「春の陽気に誘われましたか、それともローラでもお探しで？」

「……私に同性愛の趣向はない」

ひどく憮然とした声が桜の木の裏から返る、日を避けていたらしい。いかにも魔法使いらしい格好をしたエヴァンジェリンが顔を覗かせた。

「貴様、副担を外されたとはいえ、さすがにまだやることが残っているだろう、サボっていていいのか」

「ええまあ、すぐ戻りますが、しかし随分めかし込みましたね」
「ふん、伝統的な魔法使いの衣装という奴だ。中々似合うだろう」
「ええ、さすがの演出です、生徒の襲撃もその一つですか」
　エヴァンジェリンは半眼になると右手で追い払うようにしっしっと言いながら振る。
「小言なら間に合っている、若造は戻って仕事でもしてこい」
「あーいえ、ネギ君の一件に関してもある程度魔力が必要なのは判ります、ただ一般人の血では効率が悪いんじゃないかなって思いまして」
　瀬流彦が表情を変えずにそう言うと、エヴァンジェリンはまじまじと見詰め、次いで吹き出した。
「くく、今更正道の魔法使いを目指せとは言わんが、生徒を心配するくらいはしろ、教師のくせをして」
　それもそうです、と瀬流彦は頬を掻く。エヴァンジェリンは小さく笑っていたが、ふと笑いを納め夕闇に少しの諦念を混ぜたため息を吐き言う。
「まさか学園の中で堂々と吸血できると本当に思っているのかお前は。見かけだけだ。魔力が必要なのは確かだがな、そっちはタカミチから搾り取っているさ」
「ああ、どおりで最近げっそりと……さすがになんです、僕も献血でもしましょうか？」
「ぬかせ、貴様はたまに私に誰かを重ねて見てるだろう、そんな奴からは頼まれても血な

ど貰わん」

話は終わり、とばかりにエヴァンジェリンは木々の上に飛び上がる。見抜かれていましたか、と呟き、苦笑いを浮かべる瀬流彦のみが残された。

ネギ・スプリングフィールドという少年の印象は一言で言って、育ちの良い少年だった。写真の印象とあまり変わらない。ただ実際に見ているとその内面に何かがあるようだったが、彼の過去の出来事を知ればそれもまた当然だと思える。

驚いたのはむしろ風の精霊への影響力だったかもしれない。まさかくしゃみと共に暴発した魔力で風の精霊が暴走するなどとは想像の外だった。余程の高魔力と属性への高い親和性が産み出した事なのだろうが、まず普通は有り得ない現象だ。

「お株を奪われちゃいましたかねェ」

サンドイッチを手に屋上で呟く。むしろ早く成長して大いにお株を奪って貰いたいものだ、などと思ってしまうあたりは少し困ったものかもしれない。

そんな事を思いつつ昼食を取っていると、使い魔の妖精がどこか情けない感情を垂れ流しながら戻ってきた。

『うえぇーん！　助けてピコリン、白い悪魔が！』

「白い悪魔？」

瀬流彦はとうとうこの使い魔も日本のカルチャーに浸透されたのかと一瞬思ったが

どうやら違うものらしい。
若草色の髪を荒れさせ涙ぐんでいる。桜イメージなのか薄桃色のドレス姿で、なぜか服が一部はだけていた。妖精にとって服も体の一部のはず、はてと首を捻る。
突如、フェンスの後ろから白い小さな影が飛び出し、恐ろしく素早い動きで瀬流彦の方に向かってくる。
「おっ嬢さぁーん！　妖精のよしみで俺っちとしっぽりぬっぽりお茶しようぜ！」
『来たああーーッ！』
頭にしがみつくプーカに飛び掛かってきた影を瀬流彦は無造作に掴み取った。ぶらぶらと揺れるそれを眺める。
「何です……イタチ？」
「へへ……やるねぇ兄ちゃん、こりゃ餞別だ、とっときな！」
身代わりの術とでも言うべきなのだろうか。瀬流彦が一瞬まばたきをしたその隙に、手の中の白いイタチらしき動物は、白い布きれに変わっていた。
『ひやああーーッ！　近寄るなぁ、変態変態変態ぃーー！』
「最ッ高の褒め言葉だぜお嬢さんよーー！」
騒がしく追いかけっこを続けながら遠ざかる使い魔とイタチらしき影を眺め「賑やかですねェ」と呟く。取り立てて危害を加える類の存在ではなさそうだとは判断してい

た。恐らく学園に居る魔法使いの誰かが使い魔として慣らそうとでもしたのだろうとも。ただ、少々手癖は悪いようだ。

（このパンティはどうしたものでしょうか）

握らされていた白い布、おそらくシルク。明らかに女モノのそれを何となく丁寧にたたみながら瀬流彦は途方に暮れた。

◇

エヴァンジェリンは上機嫌だった。表面には出さないが。

露天のカフェで冷めてしまったコーヒーをすすり、内心でほくそ笑む。

ネギ・スプリングフィールドという少年、かつて永遠を生きる少女が欲した男の遺児。実際に会ってしまえばどう感情が動くのかエヴァンジェリン自身にも判らないところがあり、柄にもなく不安を覚えていた時期もあった。実際に見てみれば父親とは正反対の大人しく、純朴そうな子供。見た目と持って生まれた魔力量はやはりと思うものもあったが、些か拍子の抜けたような感覚を抱いたのは確かだった。

新年度を迎え、学園長の目論見通りに動かされる事に……ちょっとした苛立ちのようなものはあったにしろ、舞台に上がる前の仕込みとし、夜な夜な生徒達に「吸血鬼に襲われた」暗示をかけるなどという、子供の悪戯めいた事もまた退屈しのぎにはなった。無論、悪戯も時には少々手を加える事もあったが。

一つ変化がある。

従者である茶々丸の情動の成長にでもなれば、と裏の事情についてエヴァンジェリンは伏せていたのだが、果たして面白い事になった。ネギに襲撃された事を隠した、ネギを庇い、嘘をついたのだ。その時の様子は学園長の式神により確認している、いざという時の転移符でたとえネギが魔法の射手を戻さなくとも無事ではあるはずだった。無論その場合学園長が待ったと言おうが見切りを付け、その日のうちに全てを済ます腹づもりでもあったのだが。

エヴァンジェリンはカップのコーヒーを干し、葉加瀬のメンテナンスを受けている己が従者を見やる。心の中で語りかけた。茶々丸、初めてお前は自分の思考から「嘘」をついたのだ、と。

子が育つのを見るような感覚すら覚え、失笑する。かつてチャチャゼロが情動を得たのは血と鉄と炎の中だった。このような平和の中で育つ従者も悪くはない、とも。

その夜、ネギに助言者がついた事で念を入れ、茶々丸に持たせる当座の護符に魔力を消耗し過ぎてしまい、おかげで風邪を引き込んでしまったのは、長年を生き抜いた闇の魔王としては少々格好の付かない話であったかもしれない。

舞台は調い役者は揃う。台上を彩るは魔法の光、踊るは二人の魔法使いと一人の少女。

しかし当然ながら舞台の下で支える存在もまたあり、瀬流彦はそんな役割のようだった。

「誰か倒れてますね。あー、これは……困った格好です。源先生に来て貰って良かったですよ」

「ふふ、本当ですね。じゃあ瀬流彦先生はそのまま向こうを見てて下さいね」

暗闇の中、裸で倒れていた二人に向かい、源しずなは念のためにと持ってきていた服を着せてゆく。

瀬流彦は若干の気まずさを感じながら、闇夜に向かい一つため息を吐いた、ネギ・スプリングフィールドを追い、鼠を狩る猫のように夢中になっているであろうエヴァンジェリンに文句を言う。もちろん囁きを風の精霊に伝えてもらい。

黙殺されるかと思いきや返事はすぐに返ってきた。

『文句はあの坊やに言え、なぜああも武装解除が強力なんだ。言っておくが私は服を着せてやった側だぞ、こやつら停電だというのに暢気に風呂に入っていたんだ』

どうやらエヴァンジェリンとしても一言物申したい気分だったらしい。魔力が戻っているためか少々手間のかかる遠距離の念話も易々と使えるようだ。

しかしまあ、と瀬流彦は苦笑を浮かべる。停電時に風呂とは何ともあのクラスらしい。

『そんな事より守りは大丈夫だろうな。呪いは解いてないんだ、面白いところで侵入者対策に駆り出されるのは御免だぞ』
「ええまあ、この時を狙ってくる方々には外縁部でお引き取りを願っています」
『貴様は働かんのか？』
「やだなァ、索敵はしっかりしてますって」
（もっとも精霊さん頼りではあるんですが）
そんな事を思い一つ頬を掻く、広域探査や索敵などは瀬流彦の特性にはそれなりに向いている。一番の特技というわけでもないが、人手不足の現状から引っ張り出される事は多い。
どうも古臭い因習か、はたまた魔法世界の大戦の影響か、戦闘に傾いた魔法使いが多く、この手の情報収集に長けた魔法使いが少ない。まほネットの普及もあり、コンピュータ技術を併用した情報処理関係については弐集院を筆頭に後進の若い者も集まっているらしいが、地道な調査や偵察は敬遠されがちというのが実情でもあった。
「瀬流彦先生、もう良いですよ」
生徒に服を着せ終えた源しずなが瀬流彦に声をかける。
「はい、それじゃさっさと医務室に運んじゃいましょう、どうもあと二人ほど運ぶ必要がありそうです」

瀬流彦はようやく追いついたらしい使い魔が伝えてきた情報を話した。どうも女の子と女の子が「ごっつんこ」したらしい。生徒の一人を背負いながら、氷嚢でも用意しておいたほうが良いかと考える。振り返り、改めて被害を確認し、早めに業者に頼んでおかねば、とも。

電気の灯りの消えた大浴場、派手に割れた大窓から月が水面を優しく照らし出していた。

◇

まだ少々の肌寒さも感じる夜風に紫煙がたなびき消えてゆく。

麻帆良と外部を隔てる長大な橋、その主塔の上に高畑・T・タカミチの姿があった。

「やれやれ、上手くまとまったと言えるかな」

わいのわいのと大騒ぎをしながら麻帆良に戻る四人の姿を高畑は見送る。あれほど楽しそうなエヴァンジェリン、気の緩んだ顔を見せるのは何年ぶりだろうか。高畑がエヴァンジェリンと同じように学生で居た頃以来かもしれない。そして、と一人の少女に目を移す。

「アスナ君……」

高畑の表情は変わらない。色々なものを見過ぎてしまったから。師匠が吸っていたものと同じ煙草を吹かすだけだ。ただ無意識にか、突っ込んだままのポケットの中で拳

が握りしめられ、ぎしりと重い音を鳴らす。
それに気付き、高畑は苦笑を浮かべる。常在戦場の域には程遠い自分を笑う。夜空を見上げ、煙を細く吹く。消えゆく紫煙を眺めながら学園長との会話を思い出した。
「さすがにネギ君の仮契約相手となってしまえばアスナ君は魔法界と繋がりが深くなりすぎます、ただでさえ、彼女の記憶は……明日菜君は明日菜君のままではいけないのでしょうか？」
高畑が学園長に言う。苦しい声で。学園長は目を瞑り、開る。喉を湿らせるように茶を一口啜り、ゆっくりと言った。
「それを本人で選んで貰うのじゃよタカミチ、七年前の記憶処置、封印のみで消してはおらんのじゃろう？　それでも何とか本国は騙くらかせた。あやつらは記憶を失った姫になど価値を見んからのう。じゃが一部の者にとっては別じゃ。これからも生涯この地に居るのならば守る事も出来ようが。それは果たしてアスナちゃんのためかの？」
高畑は返す言葉が無い。無論、幸せになってほしい。安らいでほしい。平和な世というものを楽しんでほしい。しかし、難しいのだ。黄昏の姫巫女という肩書き、そして性質がそれを妨げる。
「はっは……」
夜空に向かい拳を放つ。無意味に。大気を裂く音がし、やがて月にかかる雲が千切れ

て消えた。

「どれほどやれば守れるんだ。いや……守れているのか？　僕は」

その独り言に答える声は無い。

◇

綾瀬夕映は携帯電話のアラームで目を覚ました。年に二回の停電、夜中の十二時までのそれはようやく終了したようだ。枕元に置いたデスクスタンドのスイッチを入れ、その眩しさに二度三度まばたきをすると小さく欠伸をしながら体を伸ばした。

「やっと復旧したですか」

これでやっと春の夜長の読書が続行できる。とってつけたような事を思い、のそのそとベッドから起き出す。

中等部学生寮は部屋の大きさもばらつきがあり、三人部屋もあれば二人部屋もある、生徒の要望もある程度聞いてくれるようで、数人は個室を使用していた。もっとも夕映はご多分に漏れず、一番多い二人部屋でもあったのだが、ルームメイトの葉加瀬聡美はほとんど研究室に寝泊まりをしていて、寮で寝る事の方が少ない。その事を夕映は少々の寂しさと、気兼ねなく夜更かしできるありがたみを同時に感じていた。

仮眠を取った起き抜けの体は重く、頭は怠さを感じる。窓を開け夜気を取り込む。

しばらく夜風を感じ、眠気を覚ましていると何やら小さな声が風に混じり飛び込んで

きた。
「親切な方だったらしくて、まき絵さんとゆーなさんを医務室まで運んでくれたそうです、良かったー」
「あんたしずな先生にも後でお礼言っときなさいよ、仮にも自分の生徒がお世話になったんだから」
窓を開けていたからこそ聞こえた声だったのだろう。夕映の普段より一層眠そうな目が二度、三度とまばたきを繰り返す。おもむろに振り向き、壁掛け時計を見る。時間を確認し、小さく首を傾げた。
「ネギ先生にアスナさん？　こんな時間にお帰り……ですか？」
好奇心という燃料に火が点る。夕映はパジャマから急いで着替え、部屋を抜け出した。エレベータを降り、一階のホールを見渡す。電気は通ったとはいえ、当たり前に消灯時間を過ぎている、常とは違う暗いホールを何となく足音を立てぬよう歩いた。
「確か医務室でしたか」
廊下の奥に進むと確かに医務室の窓から灯りが漏れている。何となく音を立てぬよう足音を忍ばせ、扉の前で聞き耳を立てた。
「ラス・テル・マ・スキル……」
何やら唱える声が聞こえたかと思うと、電気とは違うほのかな明かりが部屋から漏れ

る。
「ねえ、これでもう大丈夫なの？　え、映画みたいにこう眷属になっちゃうとか」
「はい、どういうわけか残留魔力もほとんどなかったですし、それに僕、呪いについてはかなり勉強したんです、このレベルのものなら間違いなく浄化できますよ」
「へー、凄いじゃない。魔法も脱がすだけじゃないのね」
「あうう……アスナさんの魔法のイメージが」
　また、魔法だ。夕映は思考の中に沈む。
　図書館島でもそうだった。あのゴーレム、てっきり麻帆良で偏って進んでいる科学技術の産物とばかりに思っていた、その直前のツイスターゲームからして麻帆良のお馬鹿なノリであったのだし。
「こんな時間に、しかも停電時にごっこ遊び……なんてはずはない、アスナさんが乗る訳がないです」
「ま、そりゃそうだ。ごっこ遊びなんてもんじゃなかったからな」
　口の中で呟いた言葉に返事があった。夕映はびくりとし、恐る恐る目を動かす。
　白い、イタチのような動物、フェレット？　オコジョ？　テン？　そんな動物がちょこんと座り、煙草を吹かしている。
「ようお嬢ちゃんよ、その年で黒の紐パンティは早くねーかい？」

「ひゃ……」

あまりの事態に夕映は混乱し、硬直する。

「聞いちゃいけねぇものを聞いちまったみてえだな、くっくっく」

いかにもな悪役の台詞を吐く小動物、とてもシュールな絵だ、と硬直しながら場違いな感想を抱いていた。

デスクスタンドが付けっぱなしの自室に戻り、ベッドに腰を下ろす。そのまま力を抜き、仰向けに倒れ、布団に埋まった。二段ベッドの上の段、その底板の木目を意味もなく追いながら夕映は放念したような顔でぽつりと呟く。

「おじい様、世界は本当に広いです」

医務室で立ち聞きしているのが知られてしまい、部屋に引き込まれ、アスナとネギ先生に一通りの事情を説明してもらったのだった。口外しない事を堅く約束し放免されたのだが。

「パクティオーって何でしょうか?」

白い小動物、アルベール・カモミールという名前があるらしいが、しきりに勧め、アスナに叩かれていた。

吸血鬼の噂は本当の事だったらしい、詳しくは話さなかったものの解決したのだという。

そして証拠にと見せられた魔法――

「どこか、懐かしいような」

そんなはずはないのに、と持て余した不思議な感覚を吐き出すように、夕映は小さく息を吐いた。

◇

停電の日の翌日、大きな包みを手に、瀬流彦は落ち着きのあるログハウスを訪れていた。

呼び鈴を鳴らすとややあって、給仕姿の茶々丸がドアを開ける。ほのかにハーブの香りが漂った、料理中だったのかもしれない。

「やあ、夜分にすいません。学園長からの言づてと差し入れを持ってきました、エヴァンジェリンさんはいらっしゃいます?」

「はい、マスターは」

「おお、なんだ瀬流彦か、まあいい、構わんから上がれ、今日の私は上機嫌だぞ。茶々丸の料理でも楽しんで行くとよい」

茶々丸が言いかけた所で、奥から当の本人が顔を出し、言葉を挟んだ。テンションが高い。自分で言う通り上機嫌なものらしい。隠しきれない笑みがその顔に浮かんでいる。

学園長からのねぎらいの言葉と、差し入れの高そうな日本酒を渡すと若干微妙そうな顔もしたものの。

「まあいい、まあいいさ。これは祝い酒として受け取ってやろう、フフフ」

瀬流彦はまず目にした事のないエヴァンジェリンの上機嫌さに戦慄を感じ、彼にしては珍しい事に口の端を強ばらせ、冷や汗を一筋流した。さらに恐ろしい事に「ほれ日本風に酌をしてやろう」などと自ずから冷酒グラスに酒を注いでくれる。瀬流彦の背中を伝う冷や汗は倍になった。

「え、えーと、それでネギ君はどうでしたか?」

「ん? 坊やか、なかなか悪くない。足りない部分を別の何かで埋めようとするところなど良いな、要所要所で甘いが年を考えれば妥当だろう、頭の回りも良い。何より面白いのはな、私の制御下から外れた闇の精霊を無意識下で使っていた事だ」

そう言い、ただの上機嫌さから、どこか興味深い研究対象を見つけた学者のような目になり笑みを浮かべる。茶々丸の出した肴の揚げ出し豆腐を食べ、うむ、と一つ頷き続けた。

「最後に闇の吹雪と雷の暴風で撃ち合ったんだが、最後に坊やは闇の精霊も上乗せしてきたんだよ、風と雷、光属性ばかり使っていたくせにな。無意識な上に無理やりだったせいで杖を壊していたが……いずれにせよ興味深い」

ちなみに脱がされた、とおまけのように付け加えた。瀬流彦はどう答えて良いものか困り、無言でグラスを傾ける。
「くく、見れなくて残念、という世辞くらいは言ってもよいのではないか？」
「言ったら言ったで酷い目に会いそうなんですが」
「社会的なものと物理的なもの、その選択権はやろう、どちらの抹殺でも構わんぞ」
「……本当にご機嫌なようで」
瀬流彦が肩を落としため息を吐くと、エヴァンジェリンは高く笑った。
「今日は上機嫌だと言っただろう。フフ、驚け、ナギ・スプリングフィールドが生きていたんだ！　坊やの言によればな。まあ周囲の連中が騙す必要性もなかろう、六年前に坊やの前にサウザンドマスターは現れていた」
おお、と驚く顔を見せる瀬流彦を見、エヴァンジェリンはふと笑いを納め、無表情になり目を細めた。
「なるほど、知っていたか」
「……それだから怖いんですあなたは」
「貴様は本当に驚けば逆に冷たくなる奴だろう、下手な芝居を打つからだ」
正確には瀬流彦には確実に生きているという確信があったわけではない、逆にナギ・スプリングフィールドを死したものにするための情報工作、その痕跡が各地に見られ、

情報を繋げて行くうちに疑問視するようになった、というのが正味の所だったのだが。
いやはや、と困り顔で頬を掻く瀬流彦を視界から外し、エヴァンジェリンはグラスを一息に干した。
「思えばタカミチも奴の死については妙に言い淀んだ事があったな、そうかそうか……あの時点で既に知るものは知っていたわけか、くくく」
神話のゴルゴンのごとく鎌首をもたげる瘴気を瀬流彦は幻視し、頭を振る。読唇術には通じていない、幼い不死者の口元が「じじい」だの「よくも騙してくれおった」だの「どういたぶってやろうか」だの「枯れ枝のごとくまで血を」だのと動いていた事は全くもってあずかり知らぬ事なのだ。
(学園長、どうか安らかに)
瀬流彦は内心で手を合わせた。
ふとエヴァンジェリンは視線を戻し軽く揶揄するような笑みを浮かべる。
「瀬流彦、いつまで他人事のような顔をしている、修学旅行が近い、クラスの流れは京都行きだ、次は貴様が動かされる事になるぞ、西の連中が見逃すと思うか?」
「関西呪術協会ですか、やはり揉めますかね」
「長が詠春になってからは共生派が強いが、逆に反対する者共を追い詰めているとも言える、それは揉めるだろうさ……いや待て」

　エヴァンジェリンは茶々丸に無言で酒を注がせ、煽る。考え深げに視線は宙をさまよった。
「茶々丸、停電に会わせ西側に意図的にリークされた情報は無かったか？　噂話でも構わん」
「はい、マスター。該当件数は十二件、まほネットを通じてのものですが、インターネット上でも同様に符号を通じての情報が三八九件存在します」
「該当した情報の中身は？」
「揺らぎがありますがおおむね近衛木乃香さんの縁談、及び新任の魔法先生について、です」
　エヴァンジェリンは不機嫌な顔になり「じじいめ」と吐き捨てた。
「瀬流彦、索敵をしていたのは貴様だったな、召喚鬼の数はいつもの停電時に増して多かっただろう、それに今回に至っては術者を捕獲しているんじゃないか」
「ええまあ。ああ……そういう事ですか」
「上手くいけば儲けもの程度の考えだったかもしれんがな」
　停電時、恒例のように麻帆良に嫌がらせとも言えるちょっかいをかけてくる関西呪術協会の一派、それはそれで西側のガス抜きともなるために黙認状態だったのだが、意図的に暴発させ、事前に障害を取り除くという目論見もあったのだろうという事だった。

「万が一強力な術者が入り込もうが、その時坊やの近くには魔力の戻った私が居る、何とも良く考えたものではないか、くくく、私を坊やの踏み台兼護衛の犬とするとはな。ふ……ふふ、あはははは、久しぶりにチャチャゼロを出してやろうか」

さすがに今回ばかりは学園長の命も本格的に儚いかもしれない。

（これで行き先がハワイかどこかになってしまったら怒らせ損でしょうに）

頭の中でぼやいた言葉に「やれる事はやれる時にやっておくもんじゃよ」と飄々と返す学園長が想像できてしまい、瀬流彦は小さく苦笑を漏らした。

◇

点滴をしている老人が居た。大きな額には絆創膏が貼られている。

重苦しいため息を吐き、窓から遠くを眺める素振りをし、言った。

「のう瀬流彦君や、知っておるか？　三途の川はそりゃ綺麗なもんじゃったよ」

「はあ、見てこられましたか」

「うむ、かれこれ三度ほどは。じじいを苛めるにも程があるわい」

あの洋ロリババァめ、と言い、言ってしまった後、不安げに室内を見回した。何も起こらない事を確認し、大きく安堵のため息を吐き、茶をすする。

「壁に耳ありとも言うが、さすがに大丈夫なようじゃの、ところでの瀬流彦君、修学旅行についてなんじゃが、君の事じゃ、概ね察しはついとるじゃろう。関西呪術協会との盟

を以てネギ君の実績としたい、既に話はついとるのじゃが万が一もある、適度に警戒しておいてくれるかの」
「はあ、それは構いませんが……ネギ君も大変ですね、知らぬ間に名前が大きく重くなってしまう」
「そりゃのう、じゃがまあ君まで老人をいびるでないよ、ネギ君ほどの立場じゃと無名であるか大きく名を上げるか、二択しかないのは判っておるじゃろ」
「中途半端は危険ですか」
「うむ、わしらもいつまでも守ってやれる訳ではない、そして名を大きくするなら拙であっても速く
　じゃよ。本国の意向で横槍を入れられても困るからの」
　そう言い、学園長はおもむろに長い髭を撫でるのだった。
　教職ではない方の仕事道具は意外に嵩張る。魔法使いとして扱われているとはいえ、ほとんどを独自の技法に頼っているのだ。師でもある高畑・T・タカミチと同じく汎用性に欠けており、その部分は符や魔法具などによって補うというのが瀬流彦にとっての基本だ。
『ピコリンなにこれなにこれ』
　使い魔のプーカが香水のような瓶を抱えて飛んでいる。瓶を取り返し、棚に戻して

言った。
「その棚の瓶は聖別された水です、西欧では有効でしょうが今回は不向きですね」
『おお、聖水か、聖水だ、エヴァにゃんの冷蔵庫に入れてくるー』
「その悪戯は洒落にならないのでやめて下さい」
瀬流彦の自室はさながら物置のごとく、だった。元々住居にこだわる性格でないのもあり、あちこちで調達してきた魔法具などを溜め込んでいくうちに、かなり雑然としてきてしまったのだ。
「そうですねェ……一通りの応急処置用のものと転移符、念のため結界具も持っていきますか」
『おやーつ！』
開けたトランクケースに妖精がドライフルーツのミックスを突っ込む。勢い余って自分も嵌っていたが。
魔法符は魔力さえあれば習得していない魔法でも扱える、瀬流彦にとってかなり便利な品ではあったが、使い捨ての上に値段が張るのがネックだ。とはいえ万が一の切り札は何枚有っても良い、常に一定数は持っているものでもあった。
さらに治癒なども得意ではないので、魔法薬などを入れ、最後に黒檀の杖を入れる。魔法の発動体も携帯するには杖は不向きであったので、最近ではもっぱら鷹の尾羽を加

工して作られた特注の羽根ペンを持ち歩いていた。むろん、それを作る際にはかつて使っていたシルフェの剣、魔女に賜った剣のイメージがあったのは間違いない。

一通りを用意し終えケースを閉める。

修学旅行は明日に迫っていた。

七話

バスは独特の香りが充満していた。
熟柿の臭い、とも言われるそれ。
アルコールを摂取した人独特の甘い香りが生徒達を乗せたバス内からぷんぷんと漂う。
「何ともこれは……困ったもんですねェ」
それはもう問題だろう。未成年の少女たちが修学旅行中に多数酩酊状態になってしまうなど。引率の教師どころか学校そのものの責任問題となりかねない。
常の学校であれば、という話だが。
引率の教師の一人でもある瀬流彦は内ポケットにしまい込んでいる発動体、鷹の羽根のペンに手を当て、口の中で何かを短く唱えた。
バス内に吹く、小さな風、時に戯れるように吹き溜まり、時にはたゆたう、気紛れな風が段々と空気の中の臭いを消してゆく。
「さて、あとは……」
自分の席に置いてあるトランクケースを開け、手の平大の符を取り出す。ありきたり

なミネラルウォーターのペットボトルにそれを貼ると、一瞬の発光。符に込められた魔力が消え去り、その効果を発揮した。

酔い覚ましの符、本来は人体に直接貼り付けることで効力を発揮させるものだったが、間接的な効かせ方を選択する。ペットボトルの蓋を開け、酔い覚ましの薬となっている水を風の精霊に霧状にしてもらい、バス内に充満させた。

「やれやれ、備えあればというやつです」

魔法符のセットを買った時についてきた安価な符。瀬流彦もまさか初めて使うのが生徒達になろうとは思いもよらない事だった。

バスの外では酒を飲まなかった生徒達が集まり、ネギ・スプリングフィールド、皆が言うところの子供先生が点呼を取ると同時に、事情説明をしている声が聞こえる。新田先生や源先生については、サポートに回るつもりなのだろう、口を挟まず見守っているようだ。

――前日にはしゃぎすぎて、疲れで寝てしまった。

普通に無理のある筋書きだが、この３ーＡならあまりおかしく感じない、と瀬流彦は少々の呆れを含んだ笑みを浮かべた。

◇

嵐山にある旅館、季節次第では一面染まった赤い山が一望でき、あるいはもう少し時

期が早ければ華やかな桜に彩られる風光明媚な地を見て楽しめるように作られている。
その一室、修学旅行において割り振られた部屋の一室において、綾瀬夕映はどこかぼうっとした表情のまま、思考を巡らせていた。
彼女は魔法の事を知っている。
持ち前の好奇心、そしてちょっとの偶然により、既にそれがある事を知ってしまっている。
新幹線内で起きた、急に車内に蛙が逃げ出すという珍事、京都に着いてからも続く、まず有り得ないとさえ言える、酒を使っての悪戯めいた騒動。
通り過ぎている時は気にしないのに、ふと振り返って見てみると気付くような。
「……はあ。考えてみても仕方ないですか」
ネギ・スプリングフィールド、神楽坂明日菜、二人には魔法について口外しない事を約束したものの、調べないとまでは言っていない。
「知らないものを知らないままにしておくなど、どだい私には無理な話でした」
京都に着き次第目ざとく見つけた八つ橋スーパーリミックス、そんなジュースの刺激的なシナモンの香りに脳天を揺すぶられながら、綾瀬夕映は今後どう動くかを考える。
「ただ、目下のところは……」
ちらりと部屋に敷かれた布団で心地良さそうに眠る友人を見、次に時間を確認して、

そろそろ起こした方が良いかと思案する。
「ゆえー、のどかは起きた？　そろそろお風呂入らないとだよ」
言葉と共に同室の早乙女ハルナが襖を開け、入って来た。
綾瀬夕映はジュースの最後の一口を啜ると、自身でも無意識に首をかしげ、言う。
「そうなのですが、これでもかというくらいに気持ちよく寝ているので、中々起こすのも良心の呵責が」
「んー、夕映は甘いねー、本人のためにならないっての、こういう時は容赦なく、呵責なく、慈悲なく！　アーハハハ！　徹夜明けテンション漫研ボディープレースッ！」
妙なポーズを決め、とうッという掛け声と共に宙に舞う早乙女ハルナ。
「――んゃ！　ひにふはにゃへ！」
混乱した猫のような声が上がった。ボディプレスの後、ぎゅうぎゅうと抱きしめられ、寝起きから即座にパニックに陥る友人、宮崎のどかに、夕映は内心で可愛い、などとも思いながら呆れ顔でもって取り繕い、頬杖をついて眺める。
「ハ、ハ、ハルナ!?　あ、あれ、何で？」
「んーひひひ、眠り姫が余りに可愛いもんだからちょっと悪戯しちゃおうかと」
「ハルナ……手の動きが異様にその……オッサン臭いです」
宮崎のどかの上に跨り、手をわきわきと動かす姿に綾瀬夕映は溜息を混ぜて一言。そ

の下で未だ赤い顔をし、混乱さめやらぬ大人しい友人を落ち着かせるようにゆっくり言った。
「のどか、そろそろお風呂に入る時間です。起きられますか?」
「え、あ、あれ?　和室?　ゆえ、えっと、何だか私、清水寺に行ったあたりから覚えがないんだけど……」
「それはもう少し頭が回るようになってからにしましょう、入浴時間も限られているのですし」
不思議そうに和室を見回す宮崎のどかを解放した早乙女ハルナも、そうそう、と自分の荷物から着替えを出しながら言う。
「うら若い花の乙女がお風呂入らないで修学旅行二日目に突入なんて駄目だからねー」
「ハルナの言う通りです、なぜかお酒の臭いは消えているのですが……」
もしかしたらネギ先生が何かしたのかもしれません、という言葉を綾瀬夕映は飲み込み、頭を一つ振り、自分も支度をしないと、と空になったジュースの缶をテーブルに置いた。

◇

京都の夜は闇が深い。
街灯に照らされ、深夜となっても営業する店や夜更かしをする人家から漏れる明か

り。現代では、一歩先ですら何があるか判らない原始の夜はどこにも存在しない。
それでもなおこの古都の夜。京都の夜風はどこか湿りを含んで重く、暗い。
歴史の中に沈殿した澱みのようなものでも沈んでいるのか、あるいは人ではない魔でも潜んでいるのか。
瀬流彦は漠とした不安、いわば虫の知らせ、とでも言うべき捉え所のない感覚を感じ、警戒のため、旅館の屋根に立ち、全方位を警戒していた。
風の精霊にとりわけ親和性の高い瀬流彦は、あたかも己の体の一部を動かすかのように風の精霊を操る事ができる。
否。操るなどとは生やさしいかもしれない。ただ瀬流彦が居るだけで、精霊が集い、その身の全てを委ねてしまう。魔法使いとしては三流もいい所ながら、この点のみは遙かに突き抜けているものがあった。
その広大な知覚の中、よぎった姿に瀬流彦は頭を抱えて深い嘆息を夜気の中に吐いた。
「お猿……の着ぐるみですか」
『おさるさるー、どったのー?』
風妖精のプーカが若草色のドレス姿でくるくる回る。
季節柄、どうも脳天気になっている使い魔を半眼で眺めながらお仕事です、と瀬流彦

は言い、次いでどこか困ったかのように頬を掻く。
「どうもやる気を削がれる見た目ですが……しかし盲点ではありましたね」
旅館内に桜咲刹那が結界を構築したのを瀬流彦もまた確認していた。
瀬流彦の魔法使いとしての活動範囲は海外か、あるいは魔法世界が中心であり、生家が近いながらも西の呪術関係については疎い。ただ勿論、麻帆良の近衛学園長は元来西が古巣でもあり、現在においても関西呪術協会とは連絡を密にとっている。
むろん魔法使い側との提携を喜ばない者達についても既に把握しており、その内の主力の術師、中心となっている人物などは真っ先に関西呪術協会の長、学園長にとって婿にもあたる近衛詠春に抑えさせてあった。さらに言えば先だっての麻帆良の大停電時に併せて流布した噂により誘き出し、悶着を起こしそうな血気盛んな術者については捕らえてもいる。
実質的に活動できるのは見習いなどの限られた人員のみ。桜咲刹那の修めた陰陽道、剣術の補助に過ぎないそれでも十分対処は出来る、と学園長自らが保証したのだ。
「上手くいけば、僕に出番なんて無いと思っていたんですが」
楽は出来ないもんです、と一つ息を吐き、古都の夜空を風の精霊に包まれ、文字通りに飛んだ。
◇

深夜と言うには少々早い時間。人払いの結界により人気の無くなった大通り、逃走ルートとして選んだそこを彼女は走っていた。

ユーモラスな式神、デザインについては色々言われもするがお気に入りのものだ、その補助を借り、通常では出し得ない身体能力でひた走る。

腕の中には呪術協会の長、近衛詠春の娘。

天ヶ崎千草、彼女にとってはお嬢様、と呼ぶべき存在でもあり、旧来の風が残っている陰陽道の術者としては主として立てるべき筋の相手でもある。このように気を失わせ、連れさらうなんて言語道断だ。

しかし彼女は躊躇わない。

一応、関西呪術協会に所属してはいる。ただ、魔法使い側との協調の色を強める本家の意向が気に入らず、呪術協会の中でもとりわけ反魔法使いの色の強い派閥に属していたのだ。

もっとも、彼女自身の事情もあり、その派閥の中でもまた腫れ物扱いではあったのだが。

「ふん……皮肉なもんや」

ふと浮かんだ感情のままにそう言い、歪んだ笑みを浮かべる。

彼女の属していた派閥は今や形を留めていない。情報で先んじられ、動きで先んじら

れ、あるものは麻帆良に拘束され、あるものは近衛家率いる主流の者らにより押さえられた。

今や動ける者は天ケ崎千草率いる、腫れ物扱いされてきた者達程度しかいない。腫れ物扱いだからこそ情報が少なく、見逃されたというものではあろうが。

「そやけど、これもまた天佑か」

腕の中の近衛このか、莫大な魔力を持つ長の娘を見てほくそ笑む。

油断していたのだろう、道中の悪戯めいた児戯、あの程度の悪戯を憂さ晴らしに仕掛ける事しか出来ない、そう思って、油断してくれたのだろう。

思わぬ獲物を手にし、上機嫌に街路を走る彼女にいつしか併走するように小柄な影が近づいた。

ちらりと見、馴染みのある帽子を目に留めると、警戒を解く。

「千草ねーちゃん、様子見なんて言っといてやる時ややるなあ」

「油断してくれはったからなあ、緩みは付けこめる時に付けこむもんや」

「付け込むんはええが、追ってきとるで。西洋魔術師も結構足速いわ、まだ一、二分は余裕があるけどな。それに神鳴流の剣士が一人と……クラスメイトか判らんが女が一人や。相手しとこか?」

「せやな……ちょい待ち。小太郎は女の相手は嫌やろ」

そう言い、彼女は符を一枚宙空に投げると、それは燕と姿を変え、夜空を飛んだ。
「これで月詠はんも急行するはずや、神鳴流はちょっと厄介や、同流派同士でやってもらい」
「俺は神鳴流相手でも良かったんやけどなー」
「小太郎、仕事や。徹さんとあかんえ」
「わかっとるわかっとるって、ほな行ってくるな」
軽い調子で地を蹴り、離れて行く少年を見ながら、彼女は大丈夫やろな、とどこか呆れたような溜息を漏らし、再び走りだす。
その足が一歩を踏み出そうか、という時だった。
「なん……や？」
何の前触れもなく、意識は遠のき、力を失った体はひどく呆気なく前のめりに崩れる。
急速に闇に染まる視界の中、無表情に観察する底冷えのする目を見たような気がし、天ヶ崎千草は頭のどこかでぼんやりと失敗を悟った。
『相変わらずよく効くねー』
プーカが小さな指先で眠るように昏倒している天ヶ崎千草の頬をつついた。
「気も魔法も熟練すればするほどその感覚に頼りがちですからね。種が割れればまず通じないでしょうが」

瀬流彦は投げ出された形の近衛このかを抱え、何か呪的な措置がされていないかを探りながら言う。

通じればよしと放った初撃、ある意味小馬鹿にしているとしか思えないその種は、瀬流彦の手の上にある小さな瓶、よく見れば魔法符のような細かい模様の刻まれたそれにあった。

液体窒素。冷却剤、あるいは舞台のちょっとした演出にも使われるものだ。気化すれば七百倍にも膨張し無味無臭の気体、空気中の大半を占める窒素となる。

天ヶ崎千草の昏倒の原因は酸素欠乏症のためだった。

瀬流彦がやった事は極端に窒素含有率が高く、酸素濃度の薄い空気をそのままの形で天ヶ崎千草の口元に運んだという事のみ。もちろん、それはより自然現象に近く、魔力的な察知が困難になるよう、風の精霊に「お願い」して行った事なのだが。

酸素濃度の薄い空気を呼吸するのと、呼吸を我慢するのとでは全く事情が違う。酸素濃度が極端に低下した空気を吸った場合、吐息より低い酸素濃度により逆に体内の酸素が奪われ、六％まで低下した酸素濃度の空気を吸えば一呼吸ですら人は昏倒し、場合によっては脳に障害が残ってしまう事さえある。

『漫画でもそんな技あったよね！』

手を抜き手の形にし、空中でシュシュとシャドウボクシングじみた動きを繰り返す

プーカに瀬流彦は苦笑を一つ返す。近衛このかにも付近一帯にも呪的な罠がない事を確認し終えると、倒れ伏す術者、天ヶ崎千草の容態を確かめた。

「……この着ぐるみは式神ですか。解き方は今ひとつ判りませんねェ。さて、どーしましょうか」

妙にユーモラスな着ぐるみめいた式神に触れながら数秒考え込むと、ありきたりですが、と頬を掻く。

追いかけてきたらしい幼い魔法先生と一般人からはちょっと程遠い二人が近づくのも感じ取り、近場のベンチに近衛このかを寝かせると、天ヶ崎千草を抱え上げた。

「プーカ、僕はこのまま関西呪術協会の本山にこの術者を届けてきます。あなたは結界で入れないでしょうし、先に旅館に戻ってて下さい」

『ええー、つまらないよ、暇だよ、あたしもいくー』

「……明日、柚子餅を買ってあげます」

『ピコリンあたしほど従順で大人しい妖精はいないから安心して！　留守は任せて！柚子餅忘れないで！』

るららるらと不思議な鼻歌を歌いながらくるくる踊り出す。

調子の良いことで、と呟き、瀬流彦は静かに眠る近衛このかを一瞥し、その場を後にした。

◇

月の朧な光を浴びながら、色の無い、無表情な少年は静かに郊外の広場で待っていた。

ふと思いついたように、夜道を煌々と照らす自動販売機に近づき、暖かいコーヒーを買う。

無表情のまま飲み下し、しばし味わった後、一気に飲んで空にする。

「……不味い」

やはり顔を歪める事もなくそう呟き、缶を投げると、それは見事な放物線を描いて空き缶入れの穴に入った。

「遅いね。切られたかな?」

思いついた事をそのままに言う。

少年――フェイト・アーウェルンクスの立場から言えば不都合となればいつ切られてもおかしくないのだ。雇い主である関西呪術協会のある一派は本来西洋の魔法使いを嫌っている、麻帆良を相手に、同じ土俵でも張り合えるだけの知識が最初からあったならフェイトが関係を持つことすら難しかっただろう。

予定を変更しようかとも思考し、規則正しく時を刻む広場の時計を眺めていたその目がふと揺れた。

近づいて来る影がある。かなりの速さを以てだ。

どうやらそれは彼にとっても多少の見覚えがある少年のようだった。
犬上小太郎は荒い息をわずかな時間で整えると、フェイトに向かい吐き捨てるように言う。
「失敗や。千草姉ちゃんがやられてもうた。追っ手はすぐかかるやろ、早う逃げた方がええ。そんだけ伝えに来たんや」
律儀にも、すまんな新入り、と言い残し、姿を消す。
残されたフェイトは変わらぬ表情のまま、静かに目を細めた。
「確かに方法は少々ずさんだったけど、千草さんを捕らえる程の能力か、ナギ・スプリングフィールドの血縁とはいえ……いや。あるいは麻帆良の見えざる手かな」
独りごち、懐から符を取り出す。地に水たまりが作られ、次の瞬間には既にその姿はない。
静まった広場に、やがて玲瓏たる静かな声が響いた。
「転移したか」
最初からそこに居たかのように、悠然と。影がいつしか実体となったかのように少女は姿を現した。
金色の髪が夜の青に濡れる。
その言葉に応える者の姿もまた、透明だった水に色がつくように隣に浮き出た。

「この時点での彼の足跡は多岐に及んでいる、幾つものプランを同時に進めていたのだと思うヨ。ここが失敗したなら次に行くのは当然だろうネ」
フン、と童姿の不死者は鼻を鳴らした。
「これで確かに事件は速やかに収束した。修学旅行も最初の日程通り、つつがなく終わるだろうさ」
「ご不満の様子ネ、そんなにスクナを倒す無双の自分が見たかったのカ？」
「たわけ。それよりスクナそのものに興味があるな。あの時はとりあえず倒してしまったが、考えてみれば私より長生きにして現存している者というのも珍しい」
「千年は先輩だものネ。なんなら試しに封印を解いて話してみるカ？」
黒髪の少女はそんな事をさらりと言い、時代にそぐわないスーツについた端末を操作した。
二人の間に立体映像と思わしきものが浮かび、リョウメンスクナノカミ、飛騨の大鬼神の姿、そしてそれを縛る封印術式とその数値を映し出す。
「……ナギの奴もこんなデカ物にこそ登校地獄でもかけてやれば麻帆良が面白い事になっただろうに」
「学園長の寿命がガリガリ削られるヨ」
少女は西洋の人形じみた顔を夜空に向け、月光浴を楽しむかのように目を閉じた。吹

き抜ける風に金色の髪を一筋流しながら、静かに口を開く。
「後の事を鑑みるに、この修学旅行は重要なターニングポイントだったはずだ。ぼーやは己の力不足を知り、生徒の幾人かは魔法の存在を知った。人形の小僧もまた行方不明だった黄昏の姫御子の事を知る」
「ネギ坊主は仮契約もこの時何人かしちゃってるはずだしネ」
さすがは我がご先祖さま、と剽げるように呟き、黒髪の少女は肩をすくめる。
それに取り合う素振りもなく、どこか冷たさを胎む声は続いた。
「そしてだ、神楽坂明日菜の特異性を知られていないならわざわざ悪魔を送ってくる真似もするまい。ぼーやはぬくぬくと育ったまま、超鈴音の仕掛けた陥穽に落ちる事となる――いや、まて」
何かに気付いたように、閉じていた目を開いた。
そもそもの前提さえ違うとするなら、その未来軸はどうなっているのか。
無言の問いを含んだ青い瞳が、黒い瞳を覗き込んだ。
黒い瞳の少女はにんまりと微笑み、返す。
「そうヨ、この時点の分岐が違うとするなら、この世界の超鈴音は私とかけ離れていてもおかしくないネ。果たしてこちらの『私』が私のように強制認識魔法を起動させるつもりかどうか……」

「ク……面白くなってきたじゃないか。枝葉は似通っていても根が違うか。あの生きているがごとき赤い石といい、六百年以上も生きて目新しきものを見る事ができるとはな。で、どうするつもりだ？」

「こちらの私、と接触してみるネ。本来干渉は避けるべきとはいえ、この世界はちょっと気に掛かるヨ。歴史に対しての特異点同士なら歪みも少なくて済む。それに内実がかけ離れてるとはいえきっと私のコト、情報交換は拒まないはずネ」

「……ほう。まあいい、ただ私はしばらく物見遊山に徹するぞ。かつてのあの時は一日程度しか居られなかったし。この時期に京都を歩けるのは何とも気分が良いものだ」

そう言い、現れた時と同じく、闇に溶け込むようにふらりと少女の姿が消える。

残されたもう一人は苦笑を一つ浮かべ、夜空を見上げた。

「こちらでは完全なる世界の計画が出遅れるという事カ、はてさて、更なるファクターがあったとしても……ふむ。ネギ坊主が常に渦中にあるのは違いない、どこの世界でも苦労するものネ」

春の風が木の葉を揺らす。

その風に解けるように、残った一人の影もまた消えていった。

◇

修学旅行は日程通りに無事進んだ。

初日にあった悪戯めいた嫌がらせも、式神を用いた近衛このかの誘拐、鞘当て程度に襲撃を受けた夜以降ぴたりと収まっている。

翌日には勇気を振り絞った宮崎のどかのネギへの告白、その夜起こった一騒動などもあったのだが、クラス一同は鬼の新田の名を深く心に刻んだ事だったろう。

三日目の自由行動日、夜半、ネギが密かに親書を関西呪術協会の長に届けた時などは、長の近衛詠春は型通りに親書を受け取った後、改まって頭を下げた。

「この度はこちらの者がご迷惑をかけてしまい、申し訳ない。主犯格も反省させましたので、どうかお許し下さいませんか」

ネギもまた、大の大人に頭を下げられると焦りを感じたのか、若干しどろもどろになりながら答える。

「あ、あの、はい、こちらも被害はあまり出ていませんし……」

そんなネギを暖かい目で見ていた近衛詠春はふと笑みを浮かべた。若い頃に共に魔法世界を駆けた戦友、彼の父であるナギ・スプリングフィールドを思い出してしまっていたのだ。

まるで似ていない性格なのに、なぜ連想してしまったのか、というおかしみを少々。

一つ瞑目し、世代交代か、とどこか心の深い所で納得してしまうものをもまた感じていた。

近衛詠春は目を開くと、緊張しているらしい少年と、相変わらず畏まっている桜咲刹那を見、安心させるよう柔和な顔を作りながら、このかの事ですが、と切り出す。
「あの子には自分で選べるだけの分別がつくまでこちらに関わらせるつもりは無かった……のですが、これも機というものかもしれません。刹那君」
「は……」
「君の方からこのかに伝えてあげてもらえますか。陰陽道を選ぶなら良し、関わるつもりもないならまた良し、と。そして、魔法の道を選ぶなら――」
ネギ君、と呼びかけ、続ける。
「君に頼ませて頂けますか。むろん、麻帆良へは修行に来ている事も承知しています。君の負担にならない程度でよいのですが」
「え、ぼ、僕がですか!?」
「ええ、私と君のお父さん、ナギ・スプリングフィールドとは……そうですね、腐れ縁の友人、といった所でしょうか。そんな仲だったのですよ、若い時は共に馬鹿もやりました。そして子達が巡り会うならそれもまた縁だと思うのですよ」
父さんの……と絶句してしまったネギに一つ頷くと、近衛詠春は桜咲刹那に向かって言う。
「このかがいずれの道を選ぼうと父さんは応援すると、そう伝えて下さい。それに」

少し迷うように視線を迷わせ、続ける。
「それに刹那君、君もまた掟に従う事もありません。彼等には話をつけておきました。君は君で生きやすい場所で生きるのが良いでしょう」
「――そっ、それは長、私のお役目を解かれるという事ですか」
「役目などと……元より私の個人的な頼みです。ですが、引き続きこのかを守ってくれるのならば、この先もよろしく頼みます。刹那君、麻帆良は楽しい場所ですか？」
「……はい！」
「ならばよかった」
目を細め、近衛詠春は頷いた。

◇

修学旅行四日目、実質的な最終日は天気に恵まれた。
クラス一のお騒がせ娘である朝倉和美が歩く時間すらもどかしいとばかりに走り回り、あちらこちらで記念写真を撮影している。
「おっ、瀬流彦せんせー！　こっち向いて」
などと廊下を通りがかった瀬流彦もまた記念の一コマとして写真に撮られた。
慌ただしく去って行くその姿に、瀬流彦は元気ですねェと小さく苦笑を浮かべる、旅館の玄関を出ると、抜けるような青空が広がっていた。

野の花々の間を楽しげに舞うモンシロチョウと戯れるようにフラフラ飛んでいるプーカが目ざとく瀬流彦を見つけ、どっか行くのー？　と頭の上に着地する。
使い魔と他愛もないやりとりをしながら、瀬流彦は待ち合わせに指定された甘味処へ入り、目当ての人物を捜した。
「や、こっちですこっち」
向こうから気付いたらしく、奥まった座敷の簾を持ち上げ、普段着の近衛詠春が手招きをする。
瀬流彦が座敷に上がる前に挨拶をすると、苦笑を一つ浮かべて手を軽く振った。
「なんの、堅苦しいのはやめにしましょう。本山で十分味わっている身ですから」
瀬流彦を座らせると、店員が運んで来たお茶を静かに飲み、ここのわらび餅は絶品でしてね、と二人分……少し目を細めると、訂正し三人分を注文した。
店員が去って行くと、近衛詠春は物珍しげなものを見たという顔になり、顎を撫でる。
「土着の小妖とも思えませんが、見たままに妖精のたぐいかな？」
「……気付かれましたか。昔拾ったんです、プーカ」
『あいあいー妖精始めまーしーた！』
瀬流彦の頭から飛び、座卓の上でひらりと回り、ポーズを取る。
言葉に困った様子の近衛詠春を見て瀬流彦は頬を掻く。

「……すいません、ちょっとこの時期頭のネジが緩んでいるので」
「ははあ、精霊に近いとも言いますしね、魔法世界ではたまに見かけたものです。勝手に頼んでしまいましたが甘い物は」
『大好き！　大好き！　おじさん太っ腹ー、ピコピコも見習うべし！』
「何ですかそのハンマーみたいな呼び名は……」
額に指を当て溜息を吐く瀬流彦を見て近衛詠春は愉快そうにハッハと笑う。
公の場から離れた事で彼もまた気が緩んでいるようだった。
やがて運ばれてきたわらび餅、ふるふると震え、重力に抗い形を保つのがやっとととでも言いそうな、ぎりぎりの柔らかさのそれを一口頬張り、味わう。
「うむ……相変わらず良い仕事をしている」
するりと喉に消えて行く食感に、頷きながら茶を一口。
わずかに中身の減った茶を置き、懐から符を一枚取り出し、座卓の上に置く。
軽い人避けと声が漏れないようにする結界符。
発動した事を確認した後、近衛詠春は瀬流彦に頭を下げた。
「感謝します瀬流彦君。事が大きくなる前で良かった」
公の場では頭を下げられない身ですがね、と言い、頬を掻く。
どこか不思議そうに見る瀬流彦に近衛詠春は溜息を一つ吐き、説明する。

捕らえた術者、天ヶ崎千草の計画は長である近衛詠春の娘、近衛このかの誘拐そのものにあったのだという。

イスタンブール魔法協会を通じ、メガロメセンブリアのある議員に引き渡す予定だったそうで、もしそれが実行されていれば、関西呪術協会は魔法使いの側と衝突せざるを得ない。近衛詠春が抑えるにも限界があっただろう。

「……もっともある家の長あたりはより直接的にスクナの力を掌握しようなどとも考えていたようなのですが」

「スクナ?」

「ええ、聞いた事がありませんか? 飛騨で暴れた二頭四手の鬼神です。故あって昔ナギ達とこの地に封印したのですよ」

「それはまた……」

何と言えばいいのか、とお茶を一口飲む。

「もっとも、そちらは封印を解くにも前もって準備が必要です、今回、割と早い段階で人を押さえていたのでそれは無理と判断したのでしょう」

「それで次の策としてメガロと……」

近衛詠春は渋いような、どこか面映ゆいような複雑な顔になり、わらび餅を一つ口にいれる。

「ええ、クルトが最近、政治家として台頭しているようですからね。結びついている麻帆良の足元に火が付けばクルトの力も弱まる。そう考えた者がいたという事かもしれません」

もっとも、と一泊を置いて続ける。

「攫われた後、このかの潜在魔力を知ればどう扱われたか……たやすく想像がつきます。親としても今回は礼を言わせてもらいたいのですよ」

「それを言うなら僕は引率の教師として付いていた身ですから、職分を果たしただけです。それに真っ先に動いたのはネギ君でした。それに友達である神楽坂さん、桜咲さんもです。あ、そういえば、この後生徒達も自由行動なのですが……」

近衛詠春は、ええ、と少し嬉しげに頷いた。

「ネギ君には、その時間を使わせてもらって、ナギの別荘を案内する約束でしてね。今朝型連絡があったのですが、このかや友達方も一緒に来るそうで」

やっと親らしい事ができます、と不器用なはにかみを浮かべる。

少々の雑談の後、近衛詠春はふと思い出したかのように視線を漂わせ、そういえば、と切り出した。

「君は天ヶ崎君をどうやって拘束したのですか？　いえ、秘する技術ならば無理にとは言わないのですが、あまりに彼女が暴れた様子がない、眠りの魔法などではよくある症

状ですが、さすがに彼女も素人ではなく、そう容易くかかるとも……」

瀬流彦はしばし考えた後、とりたてて隠す事でもないか、と手品の種を明かす事にした。

聞き終えた近衛詠春は何とも、と呆れた顔をして言う。

「……空気を武器に変えましたか」

「ええ、一リットル千円でした」

何かと言えば液体窒素の値段だ。お手頃な値段のもので倒されてしまった天ヶ崎千草が聞けば、悔しさを通り越して脱力感で立ち直れないかもしれない。

そうですか、と近衛詠春は口の中で呟く。聞いてみれば瀬流彦の特性あってこその技とも言えるものであり、新技術でも何でもない。術者をあっさり昏倒させるような真似が誰にでも出来るようになったわけではないらしい。呪術協会の長としての安堵の溜息と共に、聞いた話を忘れる事にしたのだった。

◇

窓に切り取られた風景が瞬く間に流されてゆく。

京都に行く時とは打ってかわって静かな車内。生徒達ははしゃぎ疲れたようで、新幹線の静かな揺れに誘われ、夢の中に行ってしまっている。

「ふふ……ネギ先生もお疲れ様」

そう言い、源しずなはずれ落ちた毛布をかけ直した。
まるで恋人のように、あるいは姉弟のように、神楽坂明日菜に頭をもたれさせ、子供の先生が眠っている。
「いつもこのくらい静かであると楽なんだがなぁ」
「ハハ、まったくです。ただ破天荒でなくてはこのクラスじゃない、なんて気もしますね」
そんな教師陣の、生徒達を起こさぬようひそめた声を何となく耳に入れながら、超鈴音は皆に混ざり込むよう、寝た振りなどをしつつ、慌ただしく頭を働かせていた。
彼女に、もう一人の超鈴音――渡界機なんてものを作り出し、平行世界を行き来する世界軸の違う自分が接触してきたのは三日目の夜、ネギ・スプリングフィールドが旅館を抜け出し、呪術協会へ赴いた時間と重なっていた。
（よもや、そこまでネギ・スプリングフィールドの未路が違うなんてネ）
そして、と、もう一方の自分から聞いた、平行世界の辿った歴史、その未来を思う。
超鈴音はかすかに自嘲するような笑みを浮かべた。
彼女の記憶にある世界とは大違いだ。暖かく、優しく、実りのある未来。
ただし、そこに行き着くまでの障害は大きく、重い。
計画の見直しが必用か、と思いながら、ひそやかに訪れた本物の眠気に身を委ねる。

かつて目に焼き付けた、赤く荒涼とした大地を思い出しながら。